

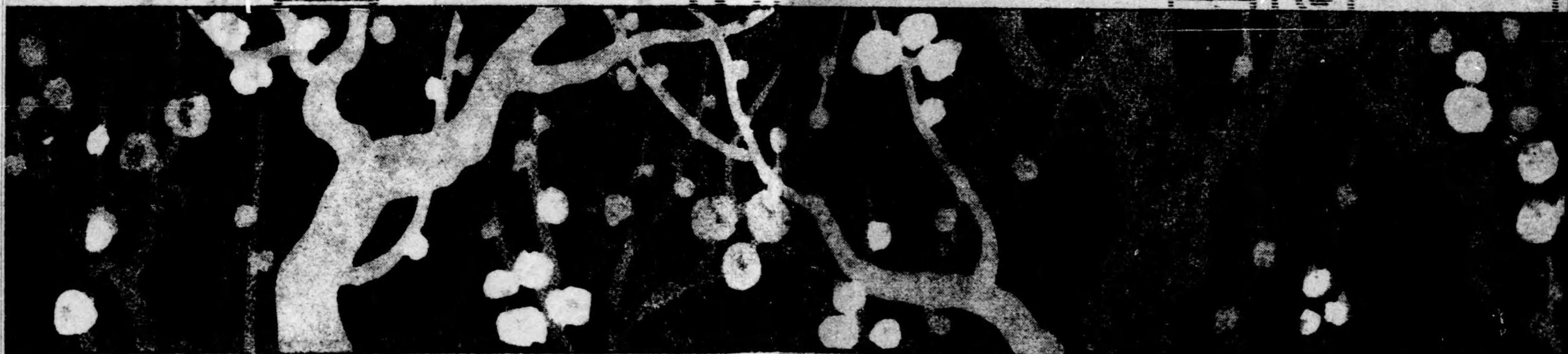
始



特

武士道文庫
義虎張の國丸

Repeating decorative pattern of stylized floral or geometric motifs, likely a border or endpaper design.



Repeating decorative pattern of stylized floral or geometric motifs, similar to the top section. A circular stamp is visible in the lower-left quadrant, containing the text: 大正 5. 2. 3.

特100
70



武道士文庫
義勇
尾張國丸

大正
5. 2. 3
内交

成象堂發行



緒言

青史に千載の美名を残せし忠臣が、碧血を濺ぎしところ、其所に文明の鐵路敷設せられて、史蹟は次第に破壊せられんごし、朝日に匂ふ山櫻その敷島の大和魂は、滔々たる泰西の思想盛んに輸入せられてより、年毎に其芳芬を失はんごす。あはれ神州精靈の氣、凝つては百鍊の鐵となり、銳利整をすら両断したる、夏尙ほ寒き秋水は、永へに鞘に納まると共に、身を以て君國に許す武士道の意氣は、漸くに銷磨し去らんごし、青年子弟の徒、浮華輕佻唯だ利のある所に是れ赴



小休

き翁然として一世の風潮を作らんとす。あゝ此の傾向を奈何せん。弊堂が今茲この文庫を刊行するの微意、蓋しこゝに存する也、敢て一言を巻頭に置す。

成象堂主人識

壬子正月...

目 次

○ 其方こそ全体何者ぢや……………一

○ 虹峰取らすの大失策……………九

○ 此奴ア一番恐れ入つた……………一六

○ 醜体ア見ろ此奴等……………二四

○ 望み通り蹴殺して遣る……………三二

○ 縛られて居る方が勝手だ……………四〇

○ 徳川五代の犬公方……………四七

○ お犬様を殺した不届者……………五四

○ 成る程さ感心いたした……………六一

○ 此の鳥屋は聾か知らん……………六九

○ 那らア榎木癩癩でせうか……………七六

目 次

○ 貴様のは刀で俺のは竹筥だ……………一六四

○ 銀と鉛の取り換へツ子……………一七一

○ 悪人黒川左仲が廻し者だナ……………一八〇

○ ナニお君殿は死んだ？……………一八八

○ 米澤領分地藏ヶ獄の狩獵……………一九五

○ 狐が二疋に狸が一疋だ……………二〇一

○ 大逆黒川左仲の最期……………二〇六

○ 何んだらう那の足音は……………二一三

○ マア悠然り遊びなさい……………二一九

○ 毒婦お君の方の最期……………二二五

○ 義侠は大和民族の誇りである……………二三二

目次終

○ 羽衣と異名を取つた國五郎だ……………八四

○ 吉原仲の町の花吹雪……………九二

○ 心事高潔なる羽衣國五郎……………九八

○ 何だ黒鼠のガリ／＼さば……………一〇四

○ 對手は十五萬石の上杉様だ……………一一一

○ 間拔野郎ばかりは居らぬ……………一一七

○ 火事だ！ツ火事だ！ツ……………一二三

○ 主人上杉侯の身の上だ……………一三〇

○ 雀の宮松並木の大活劇……………一三七

○ ヤア黙れツ木葉武士奴……………一四四

○ 根比べをいたして遣るのだ……………一五一

○ 何も彼も娘の心次第……………一五七

義尾張國丸

澁 香 園 著

○其方こそ全体何者ぢや

富貴も之を移すこと能はず、貧賤も之を易ゆること能はず、威武も屈する能はざる稜々たる一片の意氣は、はしなくも茲に金鯨輝やく尾州藩六十餘萬石の宮さ、徳川御三家の筆頭たる名を捨つること敵履の如く、遂には甘んじて町奴の群に入つて以つて吾が志しを成したりさせし、尾張國丸が華かなる全生涯を史すものは即ちこれ、

朝月夜の影空に残りて、見夢の名残りまだ惜しき貞享三年二月下旬なる或る一日の朝未明、節を自慢の與作が唄に、鈴鹿峠は朝霞みこ、鐸の音に交りて緩く空に響く早立ちの馬士歌、壱を出する群鴉の聲も勇ましく聞ゆる茲東海道尾張國宮の驛なる熱田神社の森を抜けて、繪馬堂の方へ悠然として歩いて来たのは、年の頃二十一二才にして筋骨逞ましき旅装束の武士一人、今しも繪馬堂の中に休まうさでも思つたか、ズツと這入らうさして何か驚いてビタリと其處に足を止めた、見ると其繪馬堂の椽先きには、年の頃十七八才なる容顏玉の如き美少年が、空色羽二重の紋服に紺純子黒天鷲絨の深縁取つたる野袴を穿ち、金銀肅めたる大小刀を帶して、まだ明け切らぬ薄明りに、腰を下して靜かに休んでゐる様子、旅装束の武士は訝がる眼に少年の姿を見ながら聲を掛けた武卒爾ながらお尋ね申す、其許は斯様な處で全体何をして居られるの……」言ふと美少年は鷹揚に少尋ねる其方こそ全体何者ぢや武拙者

は昨夜前の驛にて宿を取りはぐれ、徹夜しに是れ迄参つたる者であるが、當社内に一休みせんさ立越したる處其許の姿を見て驚いて居る處である少ハ、ア左様か、予は尾張吉通の落胤國丸であるぞ武何に尾張國丸君さな、ハ、ツ、存ぜぬ事さて重々の無禮平にお許し願ひ奉る、私し事は先年前將軍家光公日光御社参の折柄、彼の駿河大納言様に御謀反の一味をいたしたる、野州宇都宮本多上野介が、右宇都宮城中に於ける釣天井の謀略手違ひと相成り、將軍家は江戸に御引返しに相成る筋跡よりして大勢の曲者共に追討ちを掛けられ、御駕籠を昇ぎ参らする者もなく、據所なく唯一人にて將軍の御駕籠を擔ぎ、無事江戸城に引返しはいたしたるもの、残念にも桔梗御門の刻限にはずれて其れがため常法を破りましたる爲め、お咎めを蒙むり佃島のうちに島流しに處せられましたる、石川八左衛門の倅同苗八太郎と申す者にごさいます、今般諸國武者修行のため斯く遍歴の途中にごさいます

が、シテ若様には如何なる譯にて斯様の處にお在遊ばします」此の當時有名な石川八左衛門、例の宇都宮釣天井といふ書物にある通り、非常な豪傑であつたが、何しろ法は天下の大法、私事を以つて奈何ともすべからず、刻限は外れて御門を開かせたのは八左衛門の誤り、其れ故表面は食祿を取り上げて遠島仰せ付けられた、遠島といふさ大層な仕置の様に聞へるが、其の實、佃島の内を入左衛門に下し置かれたので、公儀の小さい旗本で朝から晩まで切々勤めるより、其の當時の佃島に在る漁師の納金、所謂石川島を頂戴して其處の君主となる方が大分結構だ、其の八左衛門の一手八太郎、是れも父に能く似た大力無雙、劍術、柔術は父八左衛門より教へを受けて、殆ど皆傳の腕前がある、それが今度武者修行に出て圖らず此繪馬堂で尾張家の落胤たる國丸に目通りをした國丸、扱ては豫て聞き及ぶ其方が、石川八左衛門の倅八太郎であつたか、予は少しく故意あつて尾張家を退いたものである、其の事故さ

言ふは斯様く……」と、茲で尾張國丸が自から身の上話しに移るのであるが先づ此の尾張國丸と言ふ人の生立ちから説かねば成らぬ、抑も此の尾州藩といふのは初代を義直と申上げて、東照權現徳川家康公十番目の公達であつた、此のお方が江戸より移されて尾張名古屋の城主となり、六十一萬石を領して徳川家御三家の一と稱へられた、十一番目が紀州和歌山の城主、其の次が常州水戸であるから、所謂御三家と稱へられたうちでも、格式は先づ筆頭であつた、義直公の二代を光友公と申上げ、三代を綱誠公、四代を吉通公と申上げる、處が此四代吉通公が毎年三月名古屋より江戸へ參勤の其途中、東海道神奈川驛の寛權太夫方にお泊りなされた際、此の權太夫方に女中奉公をして居たのが神奈川在國見村の久兵衛といふ者の娘でお時當年十六才で主人權太夫の爲めには姪に當る者、此の女に吉通公がお手を付けられた、宿世の縁の深かつたか、是れがためにお時は妊娠の身になつて女中奉公も出

來なくなつたから、其時當頂いたる印籠を持つて國見村なる父久兵衛の宅へ歸つて来た、月満ちて生れたのが誠に玉の如き男の子であつたが、憐れお時は産後の肥立ち悪しくして現世を去つた、久兵衛は泣く／＼野邊の葬送を濟まして祖父一人、孫一人で手の内の珠、簪の花と七才の時まで育て居たが、お時が死去の際遺言として此の子供には國丸といふ名を命けて居た、處が或る日久兵衛は不圖思ひ出して娘の手箱を開いて檢べて見るさ、中には金高藤繪にみつばるお三葉葵の紋散らしになつた見る目眩ゆき一つの印籠、中には尾州家のお止藥たる一粒金丹が這入つて居たから驚いた、早速名主の許に駆け付けて一伍一什を物語り、名主同道にて此の次第を尾州家へお届けに及ぶさ、諸役人も大いに驚き直ちに國家老石河出羽守に此の事を知らせた、出羽守より當主吉通公に此の趣きを申上げるさ、成る程其の覺へはあるさ仰せられたが早や其の時には奥方もあり、殊に五代の領主ならせられる綱友といふ若君もお定まりに

成つて居るので仕方がない、國丸と言ふ名前には尾州家代々若君の時のお名であつて、早速父久兵衛には一生涯五人扶持を下され、國丸は石河出羽守の許に引取られて先づ行儀作法から讀書其他の事より、武藝の師匠を付けて仕込んで見るさ、此の國丸君生れ付いての怪力にて、二十二人力と言はれる位に殊に天賦の伎倆は五六年のうちに天晴れ師を凌駕する位いの腕前となつた、そのうちに月日に關守りなく、國丸君早や十七才の春を迎へられた或る日、名古屋城下外れの神子川へ香魚釣に行かれた時、その川中に身を投げ様とする一人の老婆を助け、段々事情を聞いて見るさ、郡奉行小早川淺八郎と言ふ者が私慾を満さんがために此の老婆の一子徳助といふ者を入牢せしめ、種々の難題を持ち掛けて老婆を苦しめたる事が判つたから、國丸は大いに怒つて早速其の夜郡奉行小早川淺八郎其他の者を殺害し、孝子徳助を救けて此の事情を認めたる一書を殘し、孤雛飄然、六十有余萬石の富さ、徳川御三家の一たる名を捨て

茲に諸國修行のため漫遊の途に就かれたので、其夜のうちに宮の驛なる熱田神社の繪馬堂迄立退いて此處に一夜を明し、圖らずも石川八太郎と云ふ豪傑に出會したのである、一方尾張家では大納言公より日本國中の諸大名に對して、當家の縁故ある國丸といふ者貴藩の方へ立廻らし節は、随分世話介抱を頼むといふ御依頼狀を廻されたさ云ふ此の長物語り終つて國丸「予は猶其他に尾州家の相續に就き、弟網友に對する義理も考へ、斯く尾州家を退いたのであるが、聞く處に依れば當時諸所の代官、郡奉行、町奉行杯、稍さもすれば己れの役目を笠に被て下民を苦しめ、私慾を逞しくせんとする由、依つて予はこれより諸國を漫遊して其れ等不正役人を懲らしめん考へである、八「オ、扱ても勇ましき若様の御志し、願はくば此の八太郎を臣下のうちにお加へ下され、御供仰せ付け下さらば有難く存じ奉つります、國「オ然らば其方予の供をいたすか、許す、八「ハツ、有難く御禮を申上げます、國「しかし豫て申付け

置くが、予は尾張の國丸であると言ふ事は、滅多に他に云はざる様にいたせ、八「畏まりました、話を居る内に早や夜も全く明け放れたから、國丸は石川八太郎を供に連れて、當宮の驛を跡になし愈々諸國漫遊の途に就かれる事になつた、

○ 虻蜂取らずの大失策

旅衣思ひ立ちぬる朝霞、宮の驛を跡に東海道筋を江戸に志したる國丸は、石川八太郎を供に連れて、別に急ぐ旅路でもないから、名所舊蹟は残らず見物して足を運ぶ、何しろ一人は六十一萬九千石尾張家の若殿、供する者は天下の豪傑、石川八太郎、金子は澤山に持つてゐるし、力は双方共當時天下に恐るゝ者もない位、武藝は各々免許皆傳以上の腕前、これを眞の遊歴といふのであらうか、斯くして兩人は東海道筋を段々、泊りを重ね日を重ねて

今日しも遠州見附の驛へ出て来たのが恰度其の日の午刻頃、晝飯を仕様と思つたから吾妻屋といふ立場茶屋へ這入つて店先きに腰を下し二つ三つ肴を取つて話しながら主従一杯飲んでゐる、處へズツと這入つて来たのは一人の町人体の男引廻し合羽に手甲脚絆草鞋穿き、管の笠を横に置いて男「ア、今日は宜い鹽梅にお天氣になりましたな亭」これは入らつしやい男「何うか何んでも宜いから一本燗けてお呉れ亭」畏まりました、町人体の男は國丸、八太郎の横に方へ腰を掛けて男「へ、旦那様、今日は好いお天氣でございます國」ウ、好い天氣になつたな男「エ、失禮ながら旦那様はこれからお上りでございますか國」イヤ、吾々は江戸の方へ……、下りだ男「ア、左様でございますか」云つてゐる内に茶店の亭主は其れへ一寸した肴を附けて酒を持って来た、彼の男は頻りに獨酌で飲んで居たが、聽て男「ア、美味かつた、今日は大分歩行いて腹が北山だつたから、好い心持ちに酔ひが廻つた……エ、親方、勘定

を頼むよ亭へエ有難うございます、エ、百六十四文頂きます男「然う、ぢや此處へ置くぜ亭」へい、毎度有難うございます男「お武家様お邪魔をいたしました、失禮いたします」さ、國丸主従にも挨拶して、プイと向ふへ出て行つてしまつた、兩人は尙ほも酒を飲んでゐるさ、何うしたのか彼の町人体の男は、眼を丸くしてソワソワしながら驅け戻つて来た男「エ、お武家様、誠に何うも濟まねエ事をいたしました、好い心持ちに酔つ拂つたものですから、風呂敷包みの色が能く似てゐるので旦那様のお包みと間違へて持つて行きました誠、誠に相済みません、其の包みが私しのでございます國「ア、然うか、イヤ此方も酒を飲んで居るから其方が間違へて持つて行つても氣が注かなかつた、八太郎、中を調べて呉れ」八「畏まりました」さ、八太郎は町人が持つて戻つた風呂敷包みを開いて見たが別に何も紛失した物は無い、八「町人別に變つた事もないから、お前のは持つて行くが宜からう男」左様でございますか、夫れぢや私

しの包みを頂きます。旦那の中には二百両金子が這入つて居りますので、得意先から依頼られましたして……旦那方は立派な御身分でございますから決して其んな事はありませんが、しかし念には念を入れよと言ふ事があります故、一寸と檢べて見ます國「ウム町人、取檢べて見ろ、此方が唯其方が言つたのでハ、ア風呂敷包みを間違へたかなと思ふ位のものだ、町人体の男は自分の風呂敷包みを解きながら男「旦那、此の金包みです……オヤ、エ、何うか旦那御冗戯なさらすさ……國「何に……男「此の中に在つた二百両、何うかお渡し成すつて下さい國「コレ、怪しからん事を申すな、吾々は其方が言つたから始めて風呂敷包みの間違ひも氣が注いた位いだ、其方が何處かで又間違へたのぢやないか男「へ、へ、旦那御冗戯被仰しちやア不可ません、今朝宿を立つまで宿屋にチャシと預けて有つたんです、二百両確かに受取つて此の包みへ入れて、私しが今晝飯する時に始めて傍に置いたのです、何うかマア町

人を脅かすのも宜い加減に成さしまして、早く出してお遣なすつて下さい、お武家様方は腰に刀を帶してお在になります、此方は弱い町人風情愚圖く言ふと無禮討ちにするを被仰つても、唯恐れ入つて逃げ出す様な話らねエ者でございませう、何うか旦那、町人をお助けなすつて下さいまし、私しも是れが自分の金なら宜うございませう、他人から預かつて居る金ですから、萬一是れが無くなりましたら、首でも縊つて死ななければ成りません、旦那マア、御冗戯をなさいませずに……」其のうちに一人立ち二人立ち、表は黒山の様に人が立つてワイ、言つてゐる、中には町人の言ふ事を本當にして、那の武士は二人共騙兒だ杯と言ふ事が聞へて來た、スルと石川八太郎、ムラ、ツと性來の疝癩が込み上つて來た八「ヤイツ町人、其方は實に怪しからぬ奴だな、吾々共が懷中を見込んで、其方は脅迫を仕様と云ふ考へであらう、何うぢやツ男「へ、へ、旦那御冗戯云つやア不可ません、歴々のお武家様へ對して蟲螻同様の

町人風情が左様な事の出来る譯はございませぬ、其んな詰らねエ事を言ひ掛け
て貴郎方に斬られて死に度くはありませぬ、二百兩の金子が無ければ何うする
事も出来ませぬ言はゞ町人が一生懸命の場合、其んな弱い者苛めをなさいませ
な、何うか二百兩の金子をお渡し下さいませ様八「已れ、まだノ、不埒な事を
申して居るな」さ、大分酔ひも廻つてゐるから八太郎、突然立ち上つて彼の
男の胸倉を引摺み拳を固めた男「オヤ旦那、貴郎ア私しを打つんですか、イ
ヤ打ち殺されませう、私しを殺して二百兩の金を取り上げるのも宜うございま
せう、お御家様でエなア其んなものですか、其れなら其れで宜うございませぬ、
サアお殺しなすつて下さい、サア殺せ〜ツ……」さ、大聲に怒鳴り立て、居
る處へ「役ハイ御免ノ、退け〜ツ」さ、大勢の見物を押し分けながら、バ
ラ〜ツと飛び込んで来たのは見附の驛の驛役人、突然り彼の町人の左右の
手を引摺んで「役何うもお武家様、飛んでもない御迷惑を掛けます、イヤ宜く

判つて居ります、何うか御安心下さいませ様……、ヤイツ此の野郎、又來やア
がったナ、豈夫と思つたに又此の驛へ來やアがった、今度と言ふ今度はモウ許
す事ア出來ねエから然う思へ……、旦那、何うか御勘辨を願ひ度う存じます、
此の野郎は始終手前共の目に止まつて居ります、へエ私しは此の驛の附役人
で、此奴ア五院の勘造といふ者で、道中筋の騙兒でございませぬが、御身分
柄の旦那を見るさ何時も斯う言ふ悪事をします、斯んな太エ野郎ですから、お
介意ひなく何うか御出立下さいませ八「ハ、ア左様か」呆れ返つてゐるさ五院
の勘造も、モウ駄目ださ觀念したか勘「オヤ〜、是りや不可ねエ、矢張り知
つてゐる土地は宜くねエ、斯んなに早く此奴が出やアがるさは思はなかつた、
何うだ見物衆、相手の兩人の武士に俺等の二百兩が返して呉れさやつた處
は、言ひ掛りさ思へねエだらう、是れが場所が宜いさな、見物が寄つて集つ
て武士を滅茶〜に叩き付けて呉れる、其の間に此方が仕事を仕様と言ふのだ

が斯う成つちや虹峰取らすの大失策、旦那、何うも濟みません、御免なすつて下さいまし」。

○此奴ア一番恐れ入つた

悪人ながらも洒々落々たる五院の勘造が言葉や舉動を、此方の床几に腰を下して睨み見て居た國丸國「ウム、此奴餘程好い度胸の奴だナ、コリヤ〜其方は却々剛膽なものだ、ノウ八太郎、斯う言ふ剛膽な奴は素破鎌倉さいふ場合あつはに天晴れ一廉の役に立つものぢや……八「ハツ國「コレ〜驛役人手を放して遣はせ、勘造さやら、其方は強い者さ見るさ斯様に脅迫を遣るのか勘「へい旦那斯んな古手な脅迫は滅多にしやアしません、私しは全体百姓や町人は嫌ひですが、何んでも日本中で飯術使ひは俺一人さ威張つてゐる様な強そうな武士さ見ると、路連れになつて其の路金を巻き上げて仕舞ふ重に私しは騙兒で

す、偶に宿屋杯へ泊り合した客人の中で、随分大名の家來なんて威張つて居る奴がありますさ、其んな奴ア寢息を窺つて忍んで行つて仕事をします國「フム、却々其方は變つた氣風で面白い奴だ、しかし賊を働いては不可んぞ、待て〜……」往昔楠正成公は泣き男を用ひて計略を施したる事もある、人間は使ひ道に依れば大抵な者は役に立つさ斯う思つたから國「驛役人此の五院の勘造さ云ふ者を予に呉れぬか役「へエ、呉れさ被仰いますが、何しろ何うも斯う云ふ悪い奴でございませすから國「イヤ〜其儀は決して心配に及ばぬ、予が萬事含んで置く役「へエ、しテ貴郎方のお名前は……國「予か、予は尾張の國丸ぢや役「ハ、ハ、ハ……」驛役人は驚ろいてヒタリさ大地に頭を下げた役「ハ、ハ、ハ、扱ては豫て尾州家より御依頼に相成り居られる、國丸君でございませするか、存せぬ事さて重々の御無禮、平にお許しの程を願上げ奉ります國「ウム、何うぢや勘造、予の供をいたせ、予は是れより江戸表へ参るの

ぢや、途中場合に依つては其方を使ふ事もある勘「へエ……、其れでは貴郎様は尾張の殿様でございますか、一命をお助け下さいました上に、お供を仰せ付けられました、有難うございます、何うかお願ひ申します、貴郎様のお言葉に依つて仕事をすれば、是れこそ天下御免だ、オイ驛役人、手前エ等が御用風を吹かして召捕りに來ても召捕る事は出来ぬぞ、天下御免の泥棒様だ、何うだ何んさか云つて見ろ」驚いたのは驛役人「是りや大變な事になつた、是れからは銘々で用心するより外仕方がない、物騒な世の中になつたものだ」さ、聞いて居た見物人も驚いてゐる役「左様なれば仰せの通り此の勘造はお引渡し申します、しかし何うか餘り此の界限で……國「イヤ、遠方であつても賊は働かさぬから決して心配に及ばぬ」さ、國丸は八太郎、勘造の兩人を連れて此處を立出で、此夜は見附の驛なる橘屋さ云ふ宿に泊り、種々話したのあつた後國「勘造、世の中に賊を働く位悪い事は無いから、以後は斷じて賊を

する事は出来ぬぞ勘「へイ、イヤモウ悉皆り改心いたしました、世の中に此の泥棒位悪い割の悪い商賣はございませぬ、何んな商賣だつて生命を的にかける商賣は無エのです、斯んな高工資本の商賣はモウ仕度くはありませぬ、以來は必らず改心いたしますから何うかお供をさせて下さいまし國「イヤ、其れなれば誠に結構ぢや」さ、話しのうちに大分夜も更けて來たから、此夜は各々寢床に入つて其翌朝、勘定も済して三人連れ、見附の驛を跡にして次第に東海道筋を下つて來る、勘造は種々面白世間話しながら途中の徒然が慰さめて今しも小夜の中山迄歩つて來た、國丸は何んの氣もなしに向ふ方を見るさ、年の頃は十八九才にもならうさ云ふ、一人の女、髪は島田に結つて居るがそれさへ大分亂れてゐる、色蒼さめて四邊をソワソワ見廻したから、人の居ないのを見定めてか、又ツと突き出た松の枝に扱帯を掛けて、何うやら首を縊つて死なさうする様子國「勘造勘「へイ、何んで國「那れを見る、何うやら女

が首を縊つて死なうと云ふらしい、不惑な者ぢや、其方參つて助けて遣はせ
 勘「へエ……、旦那、那りや介意ません、打捨つて置く方が宜うございます」
 石川八太郎は呆れ返り「八」コリヤ勘造、君命だぞ、何故助けて遣らん國勘造
 其方は何故那の女を助けて遣らぬのだ勘殿様、石川さん、貴郎方は學問もあ
 り劍術ら出来るし力もあるが、世間の事はまだ一暗い、放つて置きなせエ、
 國「コレ」勘造、早く助けて遣れ、それ見ろ、今首を縊るぞ勘「ぢやマア行
 つて見ませう」と、何か故意ありそうに云ひながら、バラ／＼とツと駈け付
 けて行つた五院の勘造、突然り後邊から抱き止めるかと思ひの外、駈け付ける
 なり當突に彼の女の横面をホカンと力任せに張りつけた、アツと驚く處を
 足を揚げて續け様に三つ四つ蹴倒した、國丸も八太郎も驚いた両亂暴な事を
 する奴だ」と、思ひながら續いて其れへ駈け付ける、スルと勘造は大聲に「勘
 ナイツ野郎、詰らぬエ眞似をしやアかな、太エ野郎だ、見損なつたか間拔奴

ツ一怒鳴り付けられて彼の女は漸やく其處へ坐り直した女「オ、兄イ、好い眼
 だねエ、辨天小僧の臺詞ぢやねエか、女に化けて道中の金と涙の中山で、巧く
 やつたと思ひの外、長エ間の狂言も到頭此處で遣り損ひか、サア斯うなりや四
 の五なア云はねエんだ、何うでもしろツ」、聞いて居た國丸も八太郎も二度吃驚
 り國「コリヤ勘造、全体此の女は何んだ勘「ハ、ハ、ハ、コン畜生、殿様、此奴
 ツア本當の女ぢやございませぬ、野郎の癖に、女姿になりやがつて、助ける
 人がありや嫁に行つたが、姑が邪慳ださか、或ひば繼母が殿しいさかで家に居
 られんから、一層死んだが増したと云ふ様な泣言を並べる、然うするさ野郎は
 夫りや可愛そうだ、私が送つて行つて遣らうなんて宿屋へ一緒に泊り込む、其
 處で又此奴が哀れつぼく持ち掛けるさ、野郎は食ひ酔つて寝て仕舞ふ、夜中さ
 なつて胴巻でも何んでも持つて行かうと云ふ古臭い手でございます、ナイツ野
 郎、手前達に欺される様な兄さんさば兄さんが違ふのだぞ、何うだ驚いたか、

女「ウーム、上には上のあるものだな、此奴ア一番恐れ入った、しかし兄イお前さんは全体何んだい、勘「俺か、俺は此の東海道から中仙道、奥州街道を始めとして五街道を股に掛けて歩行してゐる五院の勘造さいふ者だ男「其れぢや名前は豫て聞いてゐるお前さんが五院の勘造兄イだったか、イヤ詰らねエ事をしました、私しは天人小僧の新太郎と云ふ者でございませうが、兄イがお供をしてゐる武士姿のお兩人、何處のお頭かは知りませんが、何うかお近親になり度いものでございませう、國丸も八太郎も心のうち「両「イヤモウ何うも盜賊を供に連れて歩行くさ不可んぞ、俺達兩人迄が盜賊と思はれて仕舞ふ」さ、呆れてゐるさ五院の勘造「勘「ハ、ア、夫れぢや手前エが天人の新太郎か、失禮な事を云ふな、此の勘造は改心したんぞ、然うして此處にお在なされるのは尾張家の若様だ、俺は此のお方の御家來になつてお供で斯うして歩行してゐるのだ、日本國中を漫遊して、悪い代官や郡奉行、また大名の領分内でも百姓や町

人を苦しめる役人奴を退けて大勢の者に安心をさせる、居はゞ世直し大明神何かに就いて俺の様な盗人を使ふ場合があるから、お供を仰せ付けられてるのだ、尾張の若様にお供をして歩行けば、天下御免も同様だ、手前エも殿様に願つてお供をして行け新「然うかい、俺の様な者でもお供をお許し下さるだらうか、勘「石川さん、何うでございませう、此奴もお供を願ひたいさ頼んで居りませうが……八「是りや面白い奴が居るものだな、其方は男か、何うも女さしか見へんぞ新「ヘエ旦那、イヤさ云ふ場合には斯うして見せて遣るんです、云ひながらグルリと両肌を脱いだのを見るさ、遠くに富士を眺めた三保の松原浮島ヶ原に、天人が羽衣を松に掛けてゐる處が朱入りになつた一杯の文身、國丸も是れを御覽になつて國「是りや却々面白い奴だ、其方にも供を許す、しかも其方は矢張り其儘の女姿で參れ、何うぢや八太郎好いだらう八「ハッ何もお旅先きの徒然、お宜敷うございませう、勘「何うも有難うございませう、新太

郎、お供はお許しになつた。矢張り其の姿で体裁が悪からうが、お殿様の仰せ
付けた新左様なれば勘造様、何うぞ御一緒にお供を願ひます勘「ヤイ、
奇体な聲をだすな」さ、茲に同行四人となつたが、知らぬ者が見るさ石川八太
郎の妹か何んかで、國丸のお妾でもあらうかさ云ふ風に見へる。

○醜体ア見ろ此奴等ア

斯うして茲に主従四人は小夜の中山も無事に越して、道中の徒然を忘れながら
早くも金屋の驛に着いた、此夜は金屋の驛なる樽屋仁平方に泊つて其翌朝、街
道名題の大井川の河原に歩つて来た、國丸は轡臺、他の三人は肩車で越す事
になつて暫らく河原に佇んであるうちに、同じくこの河を越すので大勢の旅人
も河原に立つて何か聲高に話してゐる甲「オイ源兵衛さん、今更ら何うも仕方
がありませんが、お大名や御三家様の下に、の聲は些と壓制すぎますな乙「

然うですなア、私しの様な商賣の者は、何時までも下に、で待たされて何の
位い損をする事やら判りません甲「本當に弱りますなア、何にも殿様の下に居
れさ云ふのは仕方がございませぬが、お先手のお徒士が下に、と行つてしま
つてから、一番終ひの押へが行くまで呢さ佇座んで待たされるにや往生です、
乙「貴郎の被仰る通り、用足した仕様と思ふやつが、何ん丈け暇を潰すか知れ
ませぬよ、本當に困つた事です、第一何うも斯う云ふ河越しなんかの時に、稍
さもするさ大勢の御家來が悉皆り渡つて仕舞ふ迄待たねば成らんさ云ふ様な、
斯んな難義な事はございませぬ皆「本當に困りますな……難義な事です」さ
大勢の者が口々に愚痴をこぼしてゐるのを聞いて國丸「成る程、大名の参
勤交代には多くの人民が嘸難義をするであらう」さ、思ひながら四人は事な
く河を向ふへ渡つてしまつた國「何うしてもこれは一つ直して遣らねば、町人
百姓の迷惑は甚はだしい」さ頷りに考へた末島田の驛へ差し掛らうとする其の

入口で「國八太郎、先刻河原で町人共の話しに依り、是れより江戸表へ参る途中、萬一交代の大名に出會ひたる節は、斯様く云々にいたせ、亦其方より勘造、新太郎の兩人にも申し聞け置きます様八ハツ、委細畏まりました、何か八太郎より兩人の者に申し含めて、段々足を進めたのが鳥山の驛の中程、スルさ向ふの方より駈めしき先供の聲 ○「エイツ下アに……下アに……さ聞へて来た八「恐れながら若様、如何いたしましよ」國遣つて見るく、云ふと勘造は急に眞面目顔で、大聲で怒鳴り始めた勘「エイツ下に居ろツ……下に居ろツく……」云ひながら大威張りで進んで行く、驚いたのは江戸の方より歩つて来た先觸れ ○「オヤツ……」さ、云ひながら向ふを見たが別に行列の人数も見へない、妙だなと思ひながら尙も ○「下アにくツ、下アにくツ先觸れの聲は嚴めしく響かして行列美々しく立て、来たのは、是れぞ時は三月交代の紀州名草郡和歌山の城主、大納言綱則侯御歸國の行列 ○「下にく

ツ」さ、堂々として進んで来た此方も勘造負けす劣らず勘「エイツ下に居ろツくツ ○「コリヤ控へろツ勘」下にツ……何んだ ○「下に居ろくさは何んだ勘」何がどうしたてんだ篋棒奴ツ、エイツ下に居ろツ…… ○「コレく下に居れさは何んだ、ハ、ア其方は發狂人だナ、見受ける處別に馬鹿でも無い様だが勘」何を云やアがるんでエ、御身分柄のお方が御通行になるんだ間諜く、しやアがる、賊殺すぞツ間拔奴ツ ○「此奴、益々怪しからん事を申すな勘」怪しからんだア其方の事だ、全体手前エ達は何んだ ○「無禮な事を申す許さぬぞ、尊さいお方の御歸國の御道中だ勘」何んださ、愚圖く吐しやがるさ張り倒すぞツ、俺を誰れだと思つて居やアがるんだ、一寸さ念のために見せて遣らうか」さ、ケルリと脱いだ肩肌は、右の腕から胸へ掛けて鬼若丸が鯉摺の文身だ ○「オヤツ、益々無禮な奴、ソレ各々召捕らつしやい、狼藉者でござる……神妙にしろツ上意だツ」さ飛び掛つて来る奴を其れさ見た國丸、石川八太

郎へ國「ソレ八太郎……」と、下知を傳へる。八太郎ハ「ハッ、無禮者奴ツ、神妙にしろツ」云ふより早く大勢の中へ躍り込み、バラ／＼ツと瞬く間、七八人の者を前後左右へ取つて投げ、来る奴来る奴大勢の者を追つ拂つてしまつた。勘「醜体ア見ろツ此奴等ア、將軍家へ抵抗するのと同様だぞツ」と、勘造は大仰な事を云つて威張り出した、先手が亂れて来たから同勢のお供頭をして居た林半左衛門云「人、驚きながらバラ／＼ツと其れへ飛んで来た半「コレ／＼何事であらか。騒がしいではないか。〇ハッ恐れながらお重役、只今斯様／＼云々にて、那れに暴れ廻つて居ります者を取押へんさいたしました。が、却々手に合ひません半「何に……」半左衛門は向ふを見る。一人の武士は大劔を抜いて此方を睨んで突立つてゐる。町人体の男がこれも脇差しを抜いて威張り返つてゐる様子半「ヤア無禮者奴ツ、神妙にしろツ勘「何んだツ、無禮者とは手前エ等の事だ、神妙にしろツ半「吾々の眞似をするな

勘「何を云やアがるんだ、俺達の云ふ事を眞似やがつて、飛んでもねエ野郎だ林半左衛門「一刀の柄に手を掛けてツカノ／＼ツと前に進んで来た半「御行列を何んぞ心得る、畏れ多くも和歌山大納言殿御歸國の所をば妨害に及んでは其方共の身の爲めに相成らんぞ」此處ぞと思つたから石川八太郎大音を揚げて八「其方共こそ神妙に致さん身身の爲めに相成らんぞ、此の御方こそ尾州名古屋大納言殿の若君國丸君に在つしやる、只今江戸表へ御乗出しに相成る御通行中上意、神妙にいたせツ」アツと驚いた林半左衛門半「扱てはお出でなすつたか、何時ぞや尾州家より御依頼に相成つた國丸君」と、吃驚りしながら後邊を振り返つて半「コレ／＼其方共神妙にいたせ、必らず騒ぐ事は相成らんぞ。〇「神妙にしろと云つてお重役、冗戯ぢやございませんぞ」と、アツ／＼云ひながら其れでも少し静まつた様子であるから國丸は、ズイツと其れへ立出た國丸「八太郎、勘造も騒ぐな。コレ／＼老爺其方名前は何んぞ申す半「ハッ、

御直答お許しの程を願ひ奉る私しは、林半左衛門と申し當紀州家の供頭を相勤め居ります。國「半左衛門と申すか、シテ叔父上には何れにお在に相成る予は御對面申し上げる半ハツ、畏れ入り奉ります」と、是れから林半左衛門が大納言綱則侯のお駕籠脇へ御案内する、本格式で道中を通行するに尾州家の方が兄君になるから格式が宜いので、細州家の方より御會釋になる、併し此處は道中であるから一先づ島田の驛なる本陣へ行列を引上げて、略式ながら國丸君に御對面さなつた綱「ア、豫て承はり及んで居るが、御身が國丸殿か。國「ハツ御意にございます、叔父上にも御壯健にて國丸恐悦を申し上げます。綱「ウム、其方も無事で芽出度い、しかし何故國表にお在に成らぬ、國「お言葉ではございませぬが、私しは御存じの通り元々賤しき者の腹より出でましたる者にて、殊に家には綱友と申す相續人も之れあり、私しが居りませんければさて血統の絶へる譯にもあらず、尙熟々當時の世態を見まするに、

稍さもすれば上に詔らひ下を苦しむる代官郡奉行町奉行、或ひは諸家の家來共にも多くあります様子にて、今これを正さざる時には自然徳川家の御爲めにも相成らずと心得、斯く漫遊を思ひ立ちましたる儀にございませぬ。綱「ア、左様か、しかし國丸殿には當家供方に亂暴いたさせしは如何なる譯であるか。國「イヤ決して亂暴はいたしません、私しの供は僅か二三人の少人數でございませぬから、町人百姓にも迷惑をいたす者はございませぬか、叔父上には前後三丁に渡る人數が御供いたす事故、下座觸れを云ふので大いに旅の者杯が迷惑をいたして居ります、其上ならず聊かの粗忽ありたればさて、上意杯と云ふは甚はだ穩かならざる事と相考へます、以來は叔父上にも御家來方に御注意あり道中なども御通行の折柄は町人百姓共に成る可く迷惑と思はれざる様遊ばすが宜敷うござる、綱則侯も顔を赤められた綱「イヤ道理である、以來供方にも注意いたすであらう」と、云はれて、此の綱則侯一代の間は、往來をするの

に道中の行列は人数が非常に少なかつた云ふ。

○望み通り蹴殺して遣る

沙上の偶語、時に古聖人をして三省せしむる事があるとは斯んな事を云ふので
あらうか綱「シテ國丸殿にも、今晚は當驛にお泊りに成らつしやらぬか、
國「ハツ、お言葉恐れ入ります、甚だ早い泊りでございますが、然らばお合
宿申し上げませう」さ、紀州侯と尾州の若殿と合宿といふ事になつた、島
田の驛はホンの御休息として居た處で、お泊りとなつたのだからサア驛内の
宿屋へは非常な繁昌で、宛然とお祭りの様な騒ぎとなつた、此の夜は更け渡
るまで種々のお話があつて、石川八太郎、五院の勘造、天人小僧新太郎は
別間に床を設けて寝んだ其翌朝、お別れなる時に綱「侯綱國丸殿、長の
道中にお手許の御都合があらば、聊かながら金子を御用立申さうか」國丸もい

中に國「幾何あつても邪魔なものでもない、要らねば又貧民共へ施して遣つ
ても宜い」さ思つたから國「然らば叔父上、お言葉に甘へて少々拜借いた
しませう……八太郎、何程拜借願ほうか」さ、聞かれたが八太郎も金子の
事は能く判らない八「ハツ、御意にございます、一つ勘造、新太郎の兩人に尋
ねて見ませう」さ、兩人の者を次の間へ呼んで斯くくだが聞いて見た、ス
ルと勘造「勘左様でございますか、ちや一つウソをお借りなさい、對手が紀州
様で貸し下された八「では幾何程借り様か勘」然うですな、當座のお小遣ひ、
先づ十萬兩もお借りなさい」恐ろしい事を云ひ出した、再びそれへ出て来た八
太郎「八「ハツ、恐れながら兩人が申しまするには、當座のお小遣ひならば先づ
十萬兩もあれば宜敷いそうで國「左様か、叔父上十萬兩もあれば當座の路用は
差支へござりません」云はれたが流石紀州侯だ、十萬兩といふ金は何の位いが
判らない綱「ハ、ア十萬兩で宜敷いか……、ア、コレへ十萬兩お貸し申せ」

家來の者は驚いた、道中するのに其んな大金は持つて居ないから、家來共種々相談の上、到頭千両丈けお渡しする事にした、是れでお別れの言葉を交して綱則侯は和歌山へお歸りになる、國丸は國ア、面白かつたぞ、お笑ひになつて相變らず主従四人島田の驛を立つて野邊に遊ぶ胡蝶の跡を追ひながら、聽て差し掛つたのが有名なる關所で箱根の峠に通行人を取締る所が出来てあつた、舊幕時代には日本國中の肝要な處に關所が拵へてあつて、此の關所では通行切手を改める、尤も關所に依つて近邊の旅籠屋に切手を賣つて呉れる處もあつて、別に矢釜敷くは言はないが、此の箱根の關所さいふのは江戸より西、即ち日本二百四十餘大名の七分方此處を通行するので、幕府に於いても最も厳しく取締つてあつた、殊に女の通行を厳しく取締つて居たのは、徳川幕府が諸大名の妻女を秘かに國へ逃げ歸らせぬさいふ主意から一層嚴重に取調べて居つたので、尙六尺以上の長い物は持つて通らさせない内規とな

つて居た、是れでは材木屋ださか竹屋杯は商賣をする事が出来ない譯だが、夫れには又一つ抜口が拵らへてあるので、町人百姓お長物を擔いで、關所の前に掛るさ、關所役人が役、コレ、長物を擔いで通行は相成らんぞ、云はれるさ此方も心得たものだ、〇へい、これは風呂敷包みでございます、風呂敷包みでございます、云ふから能く見ると、其の長い物の上には風呂敷が一寸さ載せてある、恐ろしい長い風呂敷包みもあつたものだが、其れでも名目さへ立てば通行を許す、處が今日しも箱根の山に差し掛つた尾張國丸の主従四人、別段に身に暗い處のあつた譯ではないが、關所通行の切手が無い、殊に新太郎が女の姿で關所の役人に尾張家の國丸ださ名乗るのも面倒ださ云ふ考へより一同相談の上で箱根の關所の裏道を抜けて行かうさ云ふ事になつた、主従四人は爪先き上りの箱根山を、裏道傳ひに次第、さ山の上へ登つて來るさ、早くも此の事を認めた悪漢十四五人、何れも道中筋の馬士や雲助、今しも細道を迎

つて右に千丈の谷間、左りに峨々たる山岳の間を、話しながらブラ／＼來掛る
 四人の主従、見るよりバラ／＼と飛び出して來た十四五人の惡漢 甲「エ、
 何うか旦那方、酒手をなすつて下さい乙「へい、何うぞ酒手をお願ひ申します
 丙「一杯買つて下さいまし」さ、ワイ／＼云ひながらグルリと四人の者の中に
 取り巻いた國「コレ、其方共は全体何んだ 甲「へ、この處はお關所の
 裏道でございまして、見らア好い姐さんとお若い立派なお武家様、何うせ正當
 な道のお關所を忍んで、裏道を行かうと云ふなア曰くのある事でございませう
 野暮な調べ立てをするのではございませぬ、何うか皆の者へ酒手を一つお出し
 成すつて下さい」聞いた五院の勘造は、又ツと其れへ顔を出した 勘「何んだと
 何を云やアがるんでエ籠棒奴ツ、己等は何んだな、お關所裏へ網を張つて居
 やアがつて、弱い者苛めを商賣に仕様さ云ふんだナ、飛んでもねエ野郎だ、手
 前エ等に酒手を一朱も遣る様な間拔があるか 甲「オヤ此の野郎、剛勢強い事

を吐しやがるな 勘「何んだ、生意氣な事を云やアがるぞ 乙「是りや
 面白い、一つ蹴殺して貰ほう」五院の勘造もこれには困つた、口では強く云ふ
 もの、向ふは十四五人の荒男、手出しは鳥渡出來悪い、處が石川八太郎は
 ニコ／＼笑ひながら此の様子を睨み見て居たが、何思つたかツカ／＼と其れ
 へ飛び出した 八「何んだ蹴殺して呉れ……是りや面白い、サア望み通り蹴殺し
 遣る、覺悟をしろツ」云ふより早くヤツと一聲足を揚げたかと思ふと、眞先き
 に立つた奴の胸尖の處をボンと一つ蹴つたから堪らない 雲「サームツ……」
 ドターリ一人の雲助は其處へ打倒れた 甲「ヤアツ武士、お關所破りをした計り
 ぢやねエ、人殺し迄しやアがつたな 乙「飛んでもねエ野郎だ、サア關所へ來い
 ツ 八「ナニ關所へ來い……乙「何んでも宜い、關所へ引張て行くんだ、サア來
 い 八「ハ、ハ、ハ、關所へ參つたら其方共の首が無くなるぞ 乙「首が無くなる、
 大工事を吐しやがる奴だ、サア房州も上州も皆此奴等を殺んでしまへツ 皆「オ

ウ合點だツ」さ、云ふより早く手ん手〜に棒切れ息杖などを持つて四人の周
圍を取り巻き、ドツミ喚いと打ち込んで来た國「ヤツ不届者奴ツ、ソレ斬つて
捨てるツ、斬れ〜ツ」さ、國丸は三人の者に下知を傳へた三「心得たり」さ
三人は三「エイツ……ヤツ……」一度に大劔の鞘を拂つた甲「其りや抜きやが
つたぞツ、武士奴此方の友達を殺した上に、關所破りさ云ふ罪があるのだ、
遠慮するなツ、打ち殺しても介意はねエ」さ、喚き叫んで討ち込んで来る奴を
石川八太郎は國丸を背後に圍んで「エイツ、ヤツ」右さ左りに斬つて捨てる
中にも彼の天人小僧新太郎は、女姿であるから長い刀を帶しては居ない、
隠し持つたる懷劔ギラリと引抜いて新「サア來い來れツ」さ暴れ廻る甲「ヤア
那の女奴抜きやがつたぞ、那の女から先きへ引攫へて仕舞へツ」さ、云ふより
早く二三人の者が、新太郎目掛けて打ち込んで来る心得たりさ新太郎は苦もな
く前なる一人を其れへ斬り倒して置いて、面倒なりさ両肌バツと脱いだ新「サ

ア來い、何人でも來いツコン畜生、憚りながら俺を誰れだと思つて居やアが
ある、天人小僧新太郎たア俺の事だ、間違〜しやアがるさ一人も殘さず蹴殺
してしまふぞツ」驚いたのは雲助共皆「オヤ〜那りや何んだ、恐ろしい奴ぢ
やねエか、昔しの巴御前か板額見たいな奴だ、女か男か薩張り判らねエ」
さ、流石の雲助共も呆れ果て、居る、處が中に一人の雲助、是れば到底も敵は
んと思つたか、早くも此處を逃げ出して關所の方へ此の事を注進したから小田
原の城主大久保加賀守が固めてゐる關所役人、素破大變なりさいふので大勢
の者を引連れ、各々鐵砲、刺叉、袖搦などの捕物道具を携へて、總勢三
十七八人ドン〜ドン〜此處へ駆け付けて來た皆「上意ツ、御用だツ神妙
にしろツ」さ、聲諸共に打ち込んで來る、一同は今暴れ廻つてゐる最中であ
るから、却々容易に鎮まる様子もなく、役人に應對をして事情を云つてゐる間
に雲助共は何をするか判らない、第一番に五院の勘造が刀を叩き落されるさ

到頭 大勢の役人の爲めに召捕られて仕舞つた、續いて天人小僧新太郎、石川八太郎も同じく繩に掛つた、是れが濟むと今度は國丸を望んで一同の者皆御用だツ、上意だツ、神妙にしろツ」さ、打ち込んで来た此の時國丸國無禮者奴、下れツ」さ、凜然たる聲で怒鳴り付けた、其の舉動は流石至然に備はる威嚴を持つてゐるから、加賀守の家來共も思はずツリ、さ一足背後に引いた國「不埒者奴、其方共は加賀守の家來でないか、手出しをいたして後悔いたすなツ」

○縛られて居る方が勝手だ

役「何んた、大きな事を云やアがつて、加賀守の家來も何も無いもんだ、ソレ遠慮に及ばず召捕つて仕舞へツ、引縛れツ事に依れば大泥棒と見へる、打ち込めくツ」さ、云ふ下知であるから、大勢の者は再び勇氣を起して打ち込ん

で来る、處が國丸も心中其れを考へたか、到頭 大勢のために溫和しく繩に掛つた、其處で役人共は對手方の雲助のうち、死人怪我人には其れ相當の手當を命じて四人の者は其儘箱根の關所へ引いて来た、早速假りの白洲を立て、當時の關所取締り頭遠山久太夫は、四人の者を引据へたる庭前の椽先迄出て来た、一同の姿をシロ／＼睨め廻しながら久「不届至極の其方共、關所破りをなさんさせしのみならず、大勢の雲助共を斬り殺し或ひは怪我いたさせたる亂暴者、一同面を上げる」云ふと下役人下「コリヤ面を上げる、面を上げる久」其方共は實に不届な奴であるな國「コリヤ關所役人、不届だなさ申すが其れは何れが不届だ、吾々共都合あつて關所の裏道を往來せんぞ致したは宜敷くないかも知れぬが、是れは公儀のお慈悲を申す者であつて、獨り當箱根のみならず各所の關所には必らず裏道を付けて置くものである、然るに右の場所を通行いたすを幸ひ、其の者に脅迫がましき事をいたす雲助共、右

様の悪漢を常關所近邊に差し置く云ふは、其方共こそ却つて不埒ではないか、察する處其方等は弱い旅人の路金を脅迫り取らせ、其の上前を取らうさいふのであらう、何うちや久「控へろ、益々不埒な事を申す奴だ、見受ける處別に狂人の様でもないが、何んさしても怪しからん奴だ、シテ其方姓名は何んさ申す、何地の者だ、眞直ぐに白状いたせ國「予が姓名は其方共に名乗るに及ばんが、強つて聞きたいさあらば申して遣はす、予は尾張の國丸ぢや、久「エ、ツ、其れでは貴郎様が尾張の若君……、ハ、ツ」流石の遠山久太夫も驚ろいてパツと庭先きに飛び下るや否、眞着になつてアルノ、顔へながら早速國丸、及び石川八太郎の繩を解く國「コリヤ關所役人、加賀守を早々呼び參れ久「ハツ……」直ちに使ひを遣はして小田原城内へ此の事を注進した、斯うなるも五院の勘造と天人小僧新太郎の兩人は、下役の者が恐ろしく繩を解かうとするが解かせない勘「何をしやアがるのだ、何んだつて譯も分らねエうち

から繩を解きやがる、俺等縛られてゐる方が勝手だ、殿様が勘辨するさ云つても俺等ア勘辨が出来ねエ、飛んでも無エ野郎共だ、出世前の身体に繩ア掛けやがつて……」大威張りで出世前の身体杯と云つてゐる、此奴當年取つて四十六才、何時出世をするのか判らないが、恐ろしい出世の遅い奴だ勘「サア加賀守を此處へ呼んで然う云へ、俺等も加賀守さ何方が豪いんださ……下「ハイ……」遠山久太夫が平蜘蛛の様になつてゐるから、下役の者も唯恐れ入つて平伏してゐる、其のうち小田原城内に在つては大久保加賀守、注進の言葉を聞いてスワ大變なりと、早速兩三人の家來を引連れ、お出迎ひとして出張して來た、兎に角一同四人を一間に案内して下座に手を仕へ、一通りの挨拶終つた後、加「家來共が重々の粗忽、何卒お許しの程を願ひ奉ります、御姓名を早く御名乗り下さいませれば、斯かる粗忽は決していたしませんに、誠に何うも恐れ入り奉る國「イヤ、事さへ判れば其れで宜い、決して心配いたすな、

家來共にも左様申し付けられる様、しかし當關所近傍の雲助、馬士、及び人足共は能く取調べられるが宜からう加「ハツ、恐れ入り奉ります」と、早速加賀守より抵抗したる人足や雲助共は、各々牢内へ打込まれるもあれば追放になる者もある、斯くして其夜は大久保加賀守が切なる願ひに依つて小田原の城内に泊り、四人の者は加賀守が手厚き饗應を受けた、翌朝いよく當所出立さいふので大久保加賀守、及び家來共一同は小田原驛の外れ迄見送り、お別れを告げて當地を出立した、處が丁度此の日の暮れ少し前に神奈川在の國見村へ這入つて、久し振りに祖父久兵衛に面會仕様としたが、早や當時より三年前に久兵衛は、七十五才の長壽を保つて病死し、死骸は村内の大劔山永祥寺といふ寺へ葬むつてあつて、尾州藩より秘かに立派な石碑を建て、あると言ふ事が判つたから、早速國丸は三人の者を連れて其の墓に詣り、金子十兩永代回向料として寺へ納め、尙實母お時の回向料として二十兩都合三十

兩の金を和尙に托して佛事供養を頼み、懷舊の情に堪へ兼ねたる涙を墓前に垂れて此處を出立し、此夜は神奈川驛に泊つて其翌朝例の如く主従四人連れて江戸表を差して足を進めたが、旅の衣の日も添ひて、夢も敷添ふ暇枕明し暮して程もなく、愈々徳川將軍家八百萬石といふ華の大江戸へ這入つて来た、時は徳川五代將軍の治世にして徳川時代にも最も盛んなる時代であつたから、目に見るもの耳に聞くもの、何一つとして驚かざるものはない、主従は此の繁昌なる有様に驚きながら、取り敢へず馬喰町一丁目の刈百屋茂右衛門の宅に宿を取つた、其の翌日から先づ諸所の名所舊蹟を見物して廻る第一番には淺草金龍山淺草寺の觀世音、續いて上野寛永寺を始め丸の内へ來つて見るさ、當時日本六十余州の大名小名の屋敷が、軒を列ねて千代田城を守る有様は、堂々として誠に徳川家の威光に驚かぬ者もない、今日は山の手明日は芝邊と毎日に見物して楽しんである、其のうち早や四十日ばかり

りの間は、別に何んの話しも無かつたが、中に彼の石川八太郎は最早や江戸の
見物も充分に済したから、久々で父の手許へ歸り度いさ云ふので、國丸にも後
日を約して暇を告げ、石川島へ一時立歸る事になつた、今一人天人小僧新太
郎も、紅葉の上の露は紅色を呈し、人は交はる友に依るで、無智文盲にして物
の道理も辨まへない位いの男であつたが、今日では至然と國丸、石川八太郎の
如き人物に感化されて、仁義禮智信五常の道を考へ、両親の事を思ひ出した
見へ、全く善心に立歸つてこれもお暇を貰ひ、両親の機嫌伺ひさ云ふ譯で
深川蛤町の両親の宅へ立ち歸つた、後はモウ五院の勘造唯一人、矢張り國
丸の供をして毎日の如く諸方をブラ〜見物に歩行いてゐる、處が當時の將軍
五代徳川綱吉公を世人は呼んで犬公方と云つた、初代二代三代迄の將軍は智
仁勇の三徳を以つて世を治めた、家康を智將と見立て、秀忠を仁將、家光を武
將と云ふ、四代が家綱公で此の人を諱名してソーセイ公方と云つた、四代の家

綱公を何故ソーセイ公方と云つたか云ふと、何事を申し上げても別に御意
見も無く、唯然うせい〜と仰せられたから、人呼んでこれをソーセイ公方、
要りお人好しとでも言ふお方であつたらしい、扱て其の次に將軍職に就かれ
たのが、五代綱吉公、所謂犬公方と言はれるお方であつた、

○徳川五代の犬公方

犬公方即ち五代將軍綱吉公を立てる以前に大老酒井左衛門尉忠清が
少しく考へる處があつて、所謂政權争辱の勝手から、有栖川親王家を江戸
へ迎へ奉つて五代の將軍職に就けんとした、處が何せう副將軍には水戸光國
あり、御家門のうちには奥州會津の城主保科忠幸さいふ敏腕家が在つて、遂
に酒井左衛門尉忠清を押込隠居さなし、館林右馬頭を以つて五代の將軍
職に就かしめた、是れが五代の綱吉公であつたが、是れより少しく以前右

馬頭は、柳澤彌太郎の執持を以つて、後に大僧正の名を賜はつたる護持院
 さいふ僧を呼び、一代の吉凶を占はせた時に護持院は護將軍家代々の干
 支を繰返して見まするに、中興の御先祖家康公は寅の年のお生れ、二代秀忠
 公は卯年のお生れ、三代家光公は辰年、四代の將軍家は巳年のお生れでござ
 います、然るに君は戌年のお生れなれ共、右馬頭と仰せらるゝ處を以つて考へ
 ますれば、正しく徳川五代の將軍にならせらるゝお生れでございます」と、斯
 う申し上げた、さころが其の後暫らくして此言葉の如く五代の將軍職に就く
 事になつたから、綱吉公も不思議に思はれた位、再び護持院を呼んで綱吉
 は右馬頭と名乗りしを以つて斯う五代將軍に昇進をいたしたが、其方の言葉は
 誠に確かである、何卒將來の事に就いて慎しむ可き事あらば遠慮なく注意
 いたして呉れ」と仰せられた、其處で護持院が護「恐れながら將軍には戌年に
 渡らせ給ふ故に、一際犬を御寵愛遊ばしまする様、御代々の將軍は生れ年の干

支を以つて代々御相續遊ばす事でございますから、犬を御寵愛あつて然る可く
 相考へますと申し上げた、其れを綱吉公が一も二もなく信用せられたから
 早速江戸市中へ對して犬は至つて大切にせよと云ふ觸れを出した、其のお觸書
 と云ふ物は、大正の今日から考へるに随分馬鹿／＼しいものだ、
 一、此の度公方様、戌のお生れ年に渡らせられるゝに依り、町内にて犬を
 飼ふ者は随分大切にいたす可く、また宿無し犬は尙更ら不惑を加へ、
 萬一犬を殺す者ある時は死罪たる可き事、犬を討ち取る者は遠島申し付
 く可き事、亦飼犬、宿無し犬に關らず病氣等差起りたる節は、不取
 敢町内の醫者に診せ、其他犬係り役人、犬醫者等に必らず診す可きもの
 也

月 日

仁は衆善の本源なりと言ふが、人命と犬の生命を同じに見るは殆ど常識で判

斷の出来ない位いのものだ、これを町々の自身番へ張出した、江戸市中には犬
 醫者云ふものがチヤンと十八軒も出来た、然うして犬係りの役人云ふのが
 各々下役の與力同心を連れて、毎日町内をブラ／＼歩行いてゐる、是れ故
 迂濶り犬を殴る事も出来ないで皆競々として町重にする、斯うなるさ犬は能く
 知つたもので、打たれる追はれるさ云ふ事がないものだから、大威張りで、ノ
 ン／＼市中を迂路付いてゐる、先づ人間が壽司屋へでも這入つて壽司を食つて
 ゐるさ、ワンとも云はず犬がそれへ這入つて来て、皿の中へ首を突込んでムシ
 ヤ／＼喰ひ始める、打つ事も追ふ事も出来ないのだから、其の皿を手につつて
 犬に喰はせぬ様にしてゐるさ、其處へ犬係りの役人が見て這入つて来る、役「コ
 リヤ／＼、其方は何故お犬様を左様な慘酷しい事をいたす、其方の様な心得
 違ひの奴があるからお犬様が御病氣になるのだ〇「へい／＼、何うも恐れ入り
 ました、役「恐れ入つたでは齊まない、お犬様に其れを皆差上げる、差上げない

さあらば此方にも考へがあるぞ」と脅迫される、仕方がないから一歩でも二歩
 でも犬役人に賄賂を握まして置いて、犬へは別に壽司を買つて遣る、斯う云ふ
 譯であるから江戸市中の人々が、犬のために迷惑を蒙る事は一通りでない、
 此の噂を聞いて尾張國丸「正逆か將軍家にも斯く迄殿しく仰せられた譯では
 あるまい、唯役人共が上の威光を笠に被て市中の町人を苦しめ己れの懐中を
 肥す手段に相違ない、これは一つ何んさからせねば相成らぬ」さ、信義の爲め
 には水火をも辭せず劔戟も、怖れず、只答ら四民の幸福を念とする國丸は、茲
 に其の時機の来るを待つて居た、處が茲江戸四谷塩町と云ふ處に、小間物屋の
 喜右衛門と云ふ者があつたが、或る日の朝早く、得意廻りを仕様と云ふので品
 物を背負つて自分の宅の戸を開けて出るさ、戸外に寢て居た宿無し犬が迂散に
 思つたか噛み付かないばかりに吠へ掛つた、追へども／＼逃げればこそ、元來
 犬嫌ひの喜右衛門は怖しい餘りに石を拾つて投げ付けたやつが、急所にでも當

つたか犬はキヤン／＼と悲鳴を揚げてニツ三ツ廻るさバツタリ其處へ倒れてしまつた、サア喜右衛門は驚いた、犬を殺せば死罪と云ふ掟で人間が犬と情死せねば成らんのだから蒼くなつて頭へ上り、夢中に羽織を引掛けて家主吉兵衛の宅に飛んで来た、處がまだ朝が早いから起きて居ない、表の戸をトン／＼

喜「お家主さん……お家主さん吉」誰れだ喜「へエお早う存じます、喜右衛門で……、チヨ一寸急にお願ひがあつて参りました吉」ア、喜右衛門さんか、大分早いな、お前の様な人は人間が温和しいから私達も安心して居るのだが……、マア兎に角這入つたが宜からう、何うだい、随分長屋のうちには氣の短かい荒つばい奴があつてな、犬が吠へたりするさ蹴つたりなごするので誠に困るよ喜「へエ、處が其んな……イヤ其何……吉」オヤ何うした喜「へエ、誠に其の行つて仕舞ひましたので吉」何を行つたのだい喜「へエ、其のお犬でございます喜」ア、お前の宅か何んかで、犬と犬が交尾つて居たさでも言

ふんだらう喜「イエ、然うではありません、餘まり吠へたものですから吉」マア待ちなさいよ、餘まり吠へたから何うしたさ喜「ツイ拾ひまして投げましたので……吉」お前さんの話しは薩張り判らないが、全体何を拾ふて投げたんだい喜「柔かい物と思つたが落ちてたものですから小石を……吉」オイ／＼巫山戯ちや、不可ない石を柔かい物と間違へる奴があるかい、しかしマア投げたのも宜いが、當りさへしなければ介意ない喜「それが運悪るく當りまして吉」何に當つた……困るぢやねエか、然して傷でも付いたのかい喜「傷は、然うでございませぬ吉」マア／＼宜い、傷さへ付かなければ、何うで宿無し犬だらう喜「お宿無しでございませうけれ共其の何んでございませぬ、倒れました吉」何んださ、マア待ちな喜右衛門さん、倒れた……、倒れて何うしたんだい喜「さころがお家主さん、何うしたのか其の犬が死んで仕舞ひました吉」エ、ツ死んだ、其りや大變だ困つた事が出来たな喜右衛門さん、しかしマア今更ら何ん

さ云つて、追付く事ぢや無エ、お前の氣質は私も知つてゐるから私に任して置くが宜い」さ、是れから家主の吉兵衛は、近邊に犬醫者の玄澤さ云ふ者が居たから、これへ段々譯を云つて頼み込んだ、そこで早速玄澤は町役人と共に喜右衛門の門口へ出張して犬の死骸を檢視する。

○お犬様を殺した不屈者

醫は仁術なりさ云ふ、犬醫者玄澤は頼りに犬の死骸を檢べて居たが玄、かい、お前が此處の主人喜右衛門さ言ふのか喜へエ、左様でございます、何んださうだな、夜の明け方に表で犬が苦しさに唸つて居たさ云ふのだな喜へエ、イエ……玄、然うだらう其處へお前が起きて出て見るさモウ犬は倒れて居たさ云ふ事だナ喜ハ、ハイ左様で……玄、宜しく、私が診斷書を書きませう」さ、茲で玄澤が犬の診斷書を認める。

一、此度町役人吉兵衛、權右衛門、六藏より届け出て候に付、小間物屋喜右衛門方門口に相果て居候黒斑の牝犬一匹檢視致し候處、正に病氣に依つて相果候ものに相違無之此段及御届候也

月 日

四谷壱町 犬醫者 小山 玄澤
連 署 家 主 吉 兵 衛

馬鹿氣た事があるもので、玄澤さ言ふ慈悲深い犬醫者のために小間物屋喜右衛門は危ぶき一命を助かつたさ言ふ、斯う言ふ譯であるから國丸は何うかして此の繁害を除いて遣らうさ、種々工風を凝した主従兩人は、故意と汚ない着物を着て怪しな風体で本郷の方から小石川の鳶阪の方までブラ〜歩つて来た、處が此の邊りは屋敷町であつて、大抵な家は門構へになつてゐる、屋敷町さ云ふても大名屋敷ではないが、皆小身者ばかりで往來は誠に寂靜さしてゐる

る、犬ばかりは大威張りで其の邊をウロウロして居たが、風体が風体だから犬も國丸主従を怪しい者と思つたか、丸々肥つた一匹の黒犬が突然國丸の前に飛んで出て、ワン／＼とツツ飛び付かんばかりに吠へ掛つた、其りやこそ思つたから國丸は、腰に帶せし一刀抜く手も見せず國「エイッ」スパリ犬の首を斬つて落した、犬は血煙り立つて其れへ打つ倒れる、サア是れに驚いて其の傍に居つた黒犬、赤犬、斑犬を始め皆「オヤ此奴ツ、俺達を何んぞ心得る、お犬様に物を投げてさへ遠島、欠所、江戸構へになつたりするに、到頭友達ちの黒奴を斬り殺しやがつたな、ソレ一番犬役人の早く来る様に大きな聲を擧げて吠へろ／＼」と、口には云はねぞ然う思つたか、七八匹の犬が一度にワン／＼と噴ましく吠へ出した國「ソレツ……」と、云ふなり國丸、勘造の兩人は大刀を引抜いて右に拂ひ左りに薙ぎ倒し、瞬く間に五六匹の犬を其處へ斬つて落した、此の吠聲に驚いた犬役人、町内の町役人を引連れて十

人ばかり、バラ／＼とツツ其れへ駈け付けて見るさ、犬の死骸は其の邊りに横はつて四邊は一面の唐紅い、兩人の男が抜刀して尙ほも犬を追つ駈けん勢ひであるから、目を圓くして驚いた犬役人「汝れ狂氣をいたしたか、將軍家より御禁制に相成つてゐるお犬様を殺した不届者、犬殺し奴上意だツ」神妙にいたせツと、言ふより早く左右前後より、兩人を望んでドツさばかりに打つて掛つた國「ヤツ無禮者奴、控へろツ」と、ヒラリ体を躲した尾張國丸國「汝等如き役人が數多これあるに依つて市中の町人共が難義をいたす、不埒者奴ツ」怒鳴り付けるさ、同時に刀の峰を返して置いて前に進んだ奴の首筋の邊りを一ツ發止ま打つた役「アツ……」と、一聲其れへ打つ倒れる、續いて左右より役「ヤアツ抵抗するか神妙にいたせツ」と、一聲叫んで理不盡にも一刀ギラリと鞘を拂つて役「エイッ……」國丸望んで抜き討ちに斬り込んで來たヒラリ身を蹴して國丸は國「無禮者奴ツ」エイッ……左りの肩先きより右の

乳の下掛けて大袈裟掛けに斬つて落した、返す刀で右手から斬り込んで来たる役人の、眞面唐竹割りに斬つて放す、是れを始めとして大勢の役人は、各々一刀ギラリ／＼と引抜いて、主従二人を中に狭み役「エイツ……ヤツ……」チヤン／＼チヤリ／＼火花を散らして斬り結ぶ、五院の勘造も斯うなつたら一生懸命同じく役人を二人ばかり其處へ斬り倒した様子、時は卯月の中二日、空は曇りて鬱を帯び、凄まじくも恐ろしき大修羅場となつて来た、其のうちに追々町内の役人、又は犬係りの役人が注進を聞いてドン／＼此處へ駆け付け、見る／＼内に三百人餘りの人数となり、國丸主従を追取り圍んで皆御用ツ……上意だツ、神妙にしろツ」さ、前後左右より隙間もなく斬り込んで来る、多勢に無勢流石の國丸主従も今は早や是れ迄と思つたから國「ソレ勘造續けツと云ふより早く、大飯を水車の如く振り廻し、辛くも一方の血路を開くや否、韋駄天走りにバラ／＼と宙を飛んで逃げ出した、五院の勘造も續い

て一生懸命に逃げ出す役「ソレ逃がしては相成らん、何處迄も追つ駈けるツさ、同勢三百餘人の役人は、ドン／＼と跡を慕つて追つ駈けて来る、國丸主従は足に任して宙飛ぶ如く、今しも小石川の御門通りへ出でんさ、安堂阪町の少し前の處まで逃げて来るさ、向ふの方より先觸れの聲「エイツホウ下アに／＼ツ……エイツホウ……」先きを拂つて来たのは金紋先箱立派なる行列で進んで来たのは、是れぞ永年の間天下の副將軍として公議のため力を盡された、當時御隠居の身の上なる、前中納言水戸黄門光國卿であつた、知るか知らずや國丸主従は、今危機一髪の場合であるから、駈けながら一刀の血汐を拭つて鞘に納め、バラ／＼とお駕籠脇に駈け附けるや否、ヒタリ大地に座つて國「ハ、ツ、宜敷くお願ひ申し上げ奉つる、拙者は當江戸市中町民の難義を救はんがため、只今彼の處に於いて數匹の犬を殺し、尙又公儀の二字を頭に載いて壓制にも私慾を逞しくする小役人に傷を負はし、此の意を直れ

参りたる者、何卒特別の御憐愍を以つてお救ひの程を願ひ奉つる」さ、お乗物に向つて申し述べた。處が流石は水戸黄門光國、卿豫て市中に於いて犬の事に就き四民に厳しき罪科仰せ附けられるさ云ふ噂を聞かれ、公儀のため宜敷からざる事と思つて居られる時であつたから、お乗物のうちより光「ソレ、此者を救け遣はせ」さお聲が掛つた役「ハツ、畏まり奉つる」さ、大勢の供がバラ／＼ツと立寄つて兩人を中に取り圍んでしまつた、處へ漸やく追掛けて来た下役人「大勢役「アイヤ、是れは水戸の御同勢と御見受申す、只今彼處に於いて數匹の犬を殺害いたし、係り役人に傷を負はせ、是れに逃げ参つた曲者、何卒御引渡しを願ひ奉つる」此の時お乗物の中より光國卿「光控へい予は光國である」、隱居の御身分でも流石は水戸侯の勢ひ、鶴の一聲で犬係り役人共はハツと大地に両手を仕へた。

○成る程と感心いたした

光「コリヤ犬役人共、彼の處に於いて數匹の犬を斬り殺したのは此の者等の所業ではない、斯く云ふ光國が内意に依つて斬らせたのである、此の者等の前を名乗らざればこそ其方等理不盡に召捕らんさせしに依り、止むなく防ぎのために抵抗いたしたのである、強つて此の者等を召捕らんさあるならば、先づ此の光國より先きに繩を掛けよ、然らば予は屹度上様に此の事を申し上げて細披露をいたす、其方共の姓名は何んぞ申す……コレよ、此奴等の住所、姓名、役目の義を一々控へ置きます様」何方が役人か譯が判らない、サア驚いたのは犬係りの役人、銘々恐る／＼住所及び姓名を申し上げた皆エ、私共一同は上役のお指圖に依りまして止むを得ず晝夜犬を保護いたして居ります身の上、何卒寛大の御所置を願はしく存じ奉ります光「ウム、寛大の

所置にいたして呉れさなれば、早速其の犬の死骸を何れへなり共取り捨て、其方等も必らず上役人より申し付けられたる通り用ゆるに及ばず、世の政治云ふものは妻楊枝を以つて重箱の隅を掃除へる様な事をいたしては、下萬民が至然さ上を怨むものである、以來は屹度注意いたして宜からう」さ茲で黃門光國卿は犬役人を引取らせ、兩人の者はお供の中に加へて小石川御門外の御隠居屋敷の方へ御引取りさなる、其處でお氣に入りの中山備前守を呼んで兩人の身分を取調べさせるさ、國丸は自分の素性を委しく備前守に申し上げた、備前守より光國卿に此の事を傳へるさ、光國卿も大いに打ち驚かれ、勸造はお側近くへ呼ばれないが、早速國丸一人をお手許へ招かれ、此處に改めて御對面となつたが、國丸が今回の思ひ立ちを聞かれて光國卿「光、天下萬民のため道理なる所の考へである、しかし乍ら何日／＼までも尾張の血統國丸さ云ふ事を世人に名乗つて居つては、尾州侯の名折れ、且又將軍家の御耻辱

にも相成る事を察する、徳川の爲めを思はれる御身の事故、近日將軍家にも御對面の執持を致さん考へであるが、其計が天下の爲めを思はれての御遊歴ならば、町人の姿と相成つて随分天下のために力を盡さるゝ方穩かて宜敷からんさ御注意いたす」さ、懇々御意見になつた、國丸も無論其の考へであるから快よくお受けをなし、水戸家より下し賜つたる金子其他の物を頂戴して其日は一先づ馬喰町の刈豆屋茂右衛門方へ引取つて來た、光國卿は其翌日紅葉山千代田城に登城した、將軍綱吉公にお目通りを願ひ、將軍家が戌年のお生れであるから、市中の犬を大切にせよ杯さ云ふ其んな迷信に似たる事はお察し遊ばす様さ、種々弊害の例を引いて御諫言申し上げるさ、綱吉公も成る程お思召したが、直ちに犬に關する掟を取り消し、同時に犬醫者、犬係り役人杯を悉く發止されたから、江戸市中の者の喜びは一方ならず、始めて肩の荷を下した様な心持ちで、噂を聞き傳へた市中の町人共は、國丸を神の如く敬

まひ大いに喜んだ云ふ、處が其れより中三日置いて、時の將軍五代綱吉公が、上野東叡山寛永寺へ御參詣と云ふ事になつた、此の上野東叡山寛永寺云ふは、有名なる彼の天海大僧正の開基であつて、其の建立になつた譯は二代將軍秀忠公の九番目の姫君お福様と云ふお方が、入内になつて東福門院と申し上げた、これがために時の主上よりは秀忠が外舅に當ると云ふ處より太上天皇と諡號を頂いた、是れが爲めに寛永年間壯大な建築物を建て、天海僧正を開基とし、三代將軍家光公のお靈屋もある、然るに今日しも五代將軍綱吉公が此寛永寺へ御參詣と云ふので、凛々しくお供揃ひをなし御參詣になつた、其のお歸りには寺内なる成昌院と言ふ處で暫らく御休息になる、此時國丸は水戸黃門卿のお執持を以つてお目通りを仰せ附けられる事となつた、お目通りと言つても將軍は征夷大將軍の官位あり、國丸は尾張の血統と雖も無位無官の身であるから、座敷で差し向ひさいふ譯で

はない、國丸は椽側之處で平伏する、綱吉公はお座敷に迄立ち出でられて御覽になる、此の時豫て用意のあつたものか、將軍家よりして

天下の爲め盡す可き心底格別に思ふ

我意我儘の外は此の者の行ふ事に就いて其罪を問はず

秀忠書判

國丸へ

云ふ二通のお墨附を賜はつた、國丸は大いに喜んで將軍家に厚く御禮を申し上げ、お暇を告げて御前を下つた、將軍家にも間もなく千代田城へ還御となつた、國丸は只一人で寛永寺内成昌院を出て、將軍家のお行列を拜見仕様と、何十萬と云ふ町人百姓が雜沓してゐる中を抜けて上野を出で、ブラ／＼見物しながら今しも神田の大通り迄來ると、向ふは黒山の如き人集り、何事が出來たかと思つたから國丸は、大勢の背後から首を延して覗いて見ると、其處には年

の頃六十才ばかりにならうと云ふ町人風の爺が、大地に両手を仕へて頼りに謝罪り入つてゐる、其の前には役人体の武士が肩怒らして何かブシ／＼怒つてゐる様子、老「何うか御勘辨下さいませる様、老人の事でございませうから、何も貴郎方に意趣意恨があつて突當つた譯ではございませぬ武「黙れ老爺、斯くも白晝人通りの繁き場所にて、吾々が目に這入らんか、ウム……不埒な奴だ、勘辨罷り成らん、早く役所へ参れ老「何うか其處の處を一つ是非御勘辨下さいませる様武「イヤ相成らん、サア来いッ」と頼りに言ひ争そつて居る處へ、見物人押し分けながら又ツと其れへ這入つて來た國丸、向ふを見てゐる武士の肩の處へ自分の腮を載せて置いて國「成る程ッ」突然り大聲で怒鳴り付けた、不意の事さて彼の武士は、驚いて飛び上つたが武「イヤ貴様か、拙者の耳許で大きな聲を發したのは國「イヤ、別に大きな聲は出さない、成る程と申しただけだ武「無禮な奴だ、何に成る程だ國「左れば、只今此の向ふ迄参り

し處、何處の武士が知らぬが弱き町人を捉へて役人風を吹かし迷惑なる事を申し掛けて、町人は誠に難儀いたすと言ふ事を聞いた、併しよもや將軍家のお膝元たる當大江戸で、武士が町人に迷惑な事を申し掛ける事はあるまいと斯様思ひながら此處まで参るも、果して貴殿方御兩人が、弱き町人の老人を捉へて難題がましき事を仰せられるに依り、扱ては最前の町人の話しは本當であつたぞ存じ、其れで成る程と感心いたした迄の事でござる武「ヤイ控へろ、成る程と感心した……、感心する位に何んだ今の様な大きな聲は國「大きな聲を仰せられるか、拙者は別に大きな聲をいたしたのでござらぬ武「云ふな、此方何れ丈け驚いたか相判らん國「ハ、ア、那の位いの聲に驚ろかれたのでござるか、失禮ながら其許等は甚だ卑怯者でござるな、那の位いの聲に驚かれる様では、素破戦場と云ふ時に鐵砲矢叫びの音や聲を聞かれたら、何れほどお驚き召さるであらう、定めて目を眩される位いかも相判らぬ、實に何うも驚き入り

ました武「オヤ、此奴ツ未だ若年者の分際さいたして吾々兩人を嘲弄いたしたナ、不埒千萬な奴、覺悟をいたせツ」云ふより早く大劔の鞘を拂つて抜き討ちに武「ヤツ」國丸望んで斬り込んだ心得たりと國丸はヒナリ体を躲すこ等しく、飛鳥の如く手許へ飛び込んで、刀持つ手をグツと引握るが早い、肩に擔いで岩石落し國「エイツ二三間ばかり向ふの方へ頭顛倒さ投げ出した、隙さす斬り込み來つた今一人の武士、是れも同じく身を躲すが早い、足を揚げてヤツと云ふなり腰の邊りを蹴飛ばした、ヨコ／＼ツと二足三足踰跟めいたかと思ふさ、ドタ／＼其れへ打つ倒れた國「ハ、ハ、ハ、弱虫奴、サア來いツ」さ、怒鳴り附けたが兩人の武士は、此の勢ひに恐れをなしたか、始めの威勢は何處へやら、落ち散る物を拾ひ取り大勢の見物人の中へ飛び込んで、鼠の如くコソ／＼と逃げ出してしまつた、大勢の見物人は聲を揃へてワァ／＼ツツと囁し立て、國丸が牙へた腕前に舌を巻いて驚いてゐる、スルと彼の老爺は始めて

生き返つた様な心持ちになつて、國丸の前に來つて大地に両手を仕へ老「誠に
お武家様、危ぶき處をお救け下され、有難うございます、私しはツイ此の三河
田で小鳥屋をいたして居る源吉と云ふ者でございますが、何うか行き届かん者
でございますれ共、一寸さお茶でも一ッ差上げ度うございます故、是非お立寄
りを願ひます國「ウム然うか、イヤ／＼老爺、決して左様心配いたすな、其方
の禮を受けては却つて心苦しう存する」

○此の鳥屋は聾か知らん

老爺源吉は却々聞き入れない源「ではございませうが、是非御同道をお願い申
します」さ、無理やりに國丸の手を取らんばかりにして勧める、其れではさ云
ふので國丸は、源吉に案内されて戻つて來たのが神田三河町、店には澤山の小
鳥を飼ふて雇婆アが一人留守番をしてゐる、源「婆さん、今歸つたよ婆」オ

十日那様、大層御悠然りでございますましたね源、少し途中で間違ひが出来たものだから……サア何うかお武家様、此方へお通りを願ひます、今日はお蔭様で危ぶい處をお救けに預かりました、江戸の様な公方様のお膝元でも、折々只今の様な五月蠅い事がございまして誠に困ります、エ、失禮ながら且那様は江戸表のお方でない様にお見受け申しますが、當所へ御見物にでもお越し遊ばしたのでございますか國如何にも、拙者は仔細あつて當江戸表に永く逗留いたし、見物に廻つて居るのである源左様でございますか、シテお宿元は何方で國馬喰町二丁目の刈豆屋方だ源成る程、しかし且那様、私し方は御覽の通り私し一人暮しで、他に雇婆が一人置いてあるばかり、誠に淋しく思つて居る處でございますが、江戸表へ御滞在中私し方へ御逗留になつては如何とございませう却つて其の方がお心使ひもなく御便利が存じますか如何でございます一云はれて國丸は心中に國豫て水戸光國卿よりして、天下の

爲め家を捨て身を捨て、盡さん云ふ事ならば、尾張の國丸云ふ事を止め、町人姿になつて事を計らふ方が宜敷からんとの御注意もあつた、丁度幸ひ此の家で一つ町人の事を見習つて遣らうと、考へ附いたから國誠に亭主お前の其の言葉は拙者に渡りに船だ、當江戸は口で言ふても八百八丁、二十日や三十日逗留いたしても悉く様子を知らぬ事難しからうと相心得る、然らば同行の者が一人、是れは拙者の家來同様であるが、是れと共に参つて暫らく厄介に相成らうと思ふ、尤も宿料萬端の處は決して其方に迷惑は相掛けぬ源何う仕りまして、且那様方御主従が三十日や四十日お在下さいましたさて、何んの御斟酌は要りません國其れでは早速明日から御厄介に成る事に仕様と、其夜は馬喰町の刈豆屋へ歸り、此の次第を勘造にも話し、二人は其の翌朝、三河町の小島屋源吉の宅へ引移つた、ところが此の節では江戸の名高い處や名所は大抵見物してしまつたのだが、勘造は別に用事の無

い身の上さて、國丸から小遣錢を貰つては毎日ブラ／＼遊び廻つて居る、スルさ或る日國丸は源吉に向つて「國」扱て源吉殿、拙者實は當江戸表へ參つて町人にならうと云ふ考へを持つ事になつた、仔細あつて生國はそれと申し兼ねるが、言葉で大抵お前も承知して居る事と思ふ、何うか斯んな田舎武士であるがお前の世話で一つ町人にしては呉れまいか源へエ、左様でございますか、マア、旦那様、お武家様と言へば四民の上になつたのでお宜敷い様でございますが、亦町人となつて見ると随分氣易いもので、取れば憂し取らねば物の數ならず、捨つべきものは弓矢なりけり、御道理でございます、其れぢや斯う成さいまし、お身拵らへより先きに言葉附きを改め、それから先づ町人となるのが早途でございます、しかし其儘でも可笑しう存じます故、失禮ながら私しの仕立て、ございませう着物をお貸し申しませう國「ウム、萬事何うか頼む源」承知いたしました、是れから源吉が自分の着物のうちで成る可く粗い縞柄の

着物を選つてこれを着せ、帯は斯う云ふ風にお結びなさい、行狀は斯う云ふ風に言つたのだが、往昔の事であるから頭髮は武士と町人とは大變に違ふ、國丸は大きな鬢に結ふてあつたのをスツカリ剃り下げて清元と云ふ意氣な鬢に直して貰つた、名前も此處で國五郎と改めこれ何うやら服装は出來たが町人になつて別にする事がない、處が源吉は女房はなし子供はなし、身寄りには死に別れたと云ふ眞の獨り者であるから、好い人が來て呉れたと誠に喜んで世話をしてゐる源、是れでスツカリ町人風になりました、其處で何うでございますか、貴郎一つ此の小鳥屋をやつて見ませんか、小鳥商賣は却々樂しみなもので、厭ひでは出來ませんが卵が出來たら自分で其れを手擲して遣り、其の雛を生長させて商賣に仕様といふ、對手次第で随分宜い事もあるものでございます國「成る程是りや面白からう、私も幼少の時に小鳥を一二羽飼ふた事もあるから何分お願ひ申さう源」其れなら誠に結構でございます、云ふので是れから源

吉が、此の鳥は斯う那の鳥は那ア云ふ風にするものだし、老人だけに最も深切に教へて呉れる、教は方の國五郎は一を聞いて十を知るさ云ふ才智があるから暫らくの間に大抵な事は會得してしまつた、其内或る日の事源吉は源何うです國五郎さん、私しは今日一寸淺草の方へ行つて來様と思ふのですが、留守を一つお頼み申したいもので、就いては鳥は悉く水揚帳に其の價値が書いてあるんですから、其奴へ相當な利益を込んで賣つて頂きます、しかし斯んな物は相場があつて無い様なものですから、先きの言葉や顔色次第で向ふが斯う云ふ鳥は無いかいと云つて來たのに、それは今ありませんが是れは如何と云つて出したのでは餘計な利益は取られません、向ふが此の鳥は幾何だいと云つて來たのは斯りや買ひたいのですから少々高く云ひましても宜敷うございます、何うかお頼み申します」と、頼んで置いて源吉は出て行つてしまふ、國五郎は店へ座り込んで面白半分客が來れば宜いと思ひながら店番をしてゐる、

スルとポツ／＼客らしい者が出て來る男「エ、モシ／＼」、聲を掛けたが國五郎何う云つて宜いか判らないので黙つた儘顔をジロリと見てゐる男「オヤ此の鳥屋は聲が知らん、啞か知らハ、ア吃りか……、ヘエモシ／＼、モシ鳥屋さん、國「ウム……男「お前さん耳が聞へるのかい 國「聞へたればこそ返事をするのだ男「ヘエ、御免なすつて下さい、其處にある其のカナリヤは幾何です 國「ウム……男「そのカナリヤは幾何です」何んしろ數の多い小鳥であるから、何れがカナリヤと云ふのかまだ判らない 國「ウム是れか男「其りや文鳥です 國「ウム然うか、ぢや是れか男「其りや目白です 國「ぢや此方が男「其りや鶯です 國「是れか男「そりや鳩だ、困るな鳥屋さん、其の黄色いのです 國「ア、是れか男「一寸さ見せて下さい 國「宜し／＼」云ひながら籠の儘で前へ出した、

○那りや榎木癩癩でせうか

男「ハ、ア二羽居ますね、是りや番ひですか國「サア何うだか判らぬ男「へエモウ一度位いは卵を生みましたか國「何うだかそれに聞いて見ろ男「オヤ、是りや亂暴な鳥屋さんだナ、併し何程です國「是れか、宜し、一寸待つて呉れ」云ひつゝ上に釣つてある帳面を下して繰り始めた國「フム成る程……、イヤ成る丈け安く買けて遣はす男「有難うございます、お安くして下さいましたら買つて歸るのですが、全体幾何ですな國「然う、番ひで百兩と三百だ男「へエ……幾何と被仰るので國「判らん奴だナ、百兩と三百だ」驚いたのは買ひ手の男「男「へエ……、マア大きにお喧ましよう國「コレ待て、貴様此の鳥を買ふ氣か男「エ、買はない事はございせんが、餘り價が高うございます國「買ふ氣なれば何故買はない、此方は百兩と三百と言ふてゐるのだ男「然う貴郎

武士の假聲を遣つちや不可ません、買ひ度いのですが餘まり」馬鹿くしく價が高いちちございせんか國「何が馬鹿くしい男「困りますな國「何が困る男「何が困ると云つて仕様がありません國「ぢや全体其方幾何なら是れを買ふて行くと云ふか、云つて見ろ」奥の方では五院の勘造、腹を抱へて笑つてゐる男「幾何ださ云つて、百兩三百ではお話しに成らんぢやございせんか國「幾何で買をうと云ふのか男「然うですな、しかし貴郎怒つては不可ませんよ國「怒りはせん、一つ云つて見ろ男「ヤア何んですね、私しが買つても宜いさ云ふのは二百五十文ですな、三百文では少し高過ぎますので國「然らば二百五十文なら買をうと云ふのか男「へエ左様でございます國「ウム然うか、此奴却々鳥の價は能く知つてゐるな、それでは買けて遣はすぞ男「へエ、ぢや買けて下さいますか國「如何にも買けて遣はす男「しかし鳥屋さん百兩と三百と云ふのさ二百五十文と云ふのは全体どう云ふ譯でございます國「其ればナ、二百文

が原價であるが、掛價をいたして百兩と三百だ男へエ、しかし鳥屋さん、何日も店に居るお爺さんと違つて、却々貴郎は面白いお方ですな、ぢや此處へ二百五十文置きますから」と、其の儘此の男は鳥を買つて歸る、處が其の夕方になつて源吉も歸つて来たが、勘造より此の話しを聞いて何れも腹を抱へて大笑ひ、スルは是れが一つの評判になつて此の頃三町の小鳥屋へ行つて見る、若い男が店番をしてゐるが、何方がお客か判らない、武士言葉でボン／＼云つてゐる、面白い鳥屋だ武士の鳥屋だと云ふので、大人氣が立つて源吉の店は大變盛んになつて来た、然るに人生朝露にも似て、六十才の阪を越へた今迄元氣な源吉が、或る日の事湯から戻つて氣分が悪いと床に就いたのが、何うも様子を見るに面白くない、早速醫者を招いて診せたり杯したが其翌朝、源吉も最早や命數の盡さるのを悟つたか、國五郎、勘造の二人を枕許へ呼んで源吉今度と云ふ今度は到底私しも不可ません、失禮ながら此の家は貴郎方にお任

せ申しますから、私しが死ましたら何うか宜敷い様にお願ひ申します、唯死骸だけは何處へでも埋めて下さいませれば其れで本望、貴郎方に死水まで取つて貰うさば思ひません事でございますが、是れも前世の因縁さか申すものでございませう又此處にお金が二十兩あります故これを寺へ寄附して下さいませう、永代寺のある限り回向を受ける事が出来ます、何うか宜敷くお願ひ申しますと、残らず云ふて置いた儘眠るが如くの往生を遂げた、其處で國五郎も涙を流して葬送の事を取り計らつたが、何しろ永らく三河町に住居した源吉場所が場所であるから、大名方の屋敷に居る折助、仲間、或ひは元締杯の見送りを受けて、随分派手な葬式を執り行なつた、國五郎も別に何うも云ふ考へもないから、相變らず源吉の跡を引續いてやつてゐる處へ、久し振りで天人小僧の新太郎も尋ねて来て、國五郎の許でブラ／＼してゐる、暫らくの間に國五郎も充分町人の交際にも慣れて、天晴れ一廉の鳥屋の主人さなりすまし、

鳥屋國五郎とりやくにろう「さ云つて次第に人にも知られて来る、處が或る日の午刻過ぎに國五郎は小鳥の餌を遣らうさ云ふので、摺鉢を前に置いて青葉や何かを入れて頻りに掻き廻してゐる處へ、バタ／＼とツッさ人の足音、續いて男御免下さい、一寸さ何うかお頼み申します」さ、慌て、店先から奥の方へ飛び上つて来た男がある、國五郎は呆氣に取られて國「何んだ、巾着切りにも追つ駈けられて逃げ込んだのでらう」さ、思ひながら立ち上らうさしてゐる處へ、ド／＼這入つて来たのが顔の色も眞蒼になつて眼中血走り、酒氣粉々として衣紋もくすれた一人の武士武「ア、鳥屋／＼國「ハイ武「ア、只今當家へ町人か一人逃げ込んだのであらう」國五郎は心のうちに國「ハ、ア、此奴に追はれて来たんだナ」さ、思つたが左あらぬ顔で國「ヘエ町人……知りませぬ武「イヤ確かに逃げ込んだに違ひない、隠すさ其方の爲めに相成らんぞ國「爲めに成つても成らんでも、其んな事は知らない武「いよく知らんか、では何處へ行

つた國「何處へ行つたつて此方は辻番ぢやあるまいし、其んな者の番をしてゐる譯でもねエ武「何んだ、己れ今の町人を隠匿ふか、隠匿ふさ云ふさ汝から先きに斬つてしまふぞツ」さ、云ふより早く酒の加減の爲す業が、大刀の柄に手を掛けるや否武「エイツ」抜け討ちに斬つて掛つた國「何をツ……」さ云ふなり國五郎は、バツさ体を懸して空を打たせ、ヨロ／＼とツさ前へ伸倒つて来る奴を、今迄餌を摺つて居た榎木を取つてエイツ」ドーンと胸の邊り一つ當てるさ武「ウームツ……」さ、唸いてドターリ其れへ打つ倒れた、サア忽ちの間に表の方は山の如き人集り甲「モシ／＼何うしたんです乙「何うしたつて、今鳥屋の親方が那の武士を一つ突いたんで、親方がヒヨイと榎木を突き出すと那の通り打つ倒れました甲「ヘエ、榎木を見て顛倒つた……其りや珍らしいな、水癩癩、火癩癩と言ふのはあるが、榎木を見て顛倒へるさ云ふのは始めてだ、那りや榎木癩癩でせうか乙「サア……門口では黒山の様な人が

ワイ〜言つて騒いでゐる、小鳥は驚いてビイ〜ビイ〜啼き始める國「エ、五月蠅工事だナ、奥に誰れか居ないか勘「エ、私しが居ります國「オ、勘造水一杯持つて来い勘「へい……ハ、ア到頭目を廻しやがつたナコン畜生」言ひながら勘造は杓に水を汲んで来た、國五郎は其れを武士の顔にパツミ打掛けて置いて刀を鞘に納め、抱き起して暫らくの間脊筋の方を揉んで居たが國「ヤツ」さ一つ活を入れた、武士はこれに氣が注いでキヨロ〜四邊を見廻してゐる國「お武家様、何うしました、鳥屋の爲めに敗を取つて残念だ、何うか致して返報をしたいと言ふのなら、場所を選んで尋常の勝負をいたしませうか武「イヤ何ういたして、全く今日の處は拙者の誤り、何うか平に御勘辨に預りたい國「勘辨しろと言ふなら何も此方は根が町人でござります、決して事は好みませんから、何うか、御遠慮なくお引取り成すつて下さい、戶外の方が大勢立つて居て五月蠅いから武「イヤ、何うか平にお許しが願ふ」さ、這々の体

で彼の武士は逃げ出して仕舞つた、跡見送つて國五郎は奥へ這入つて来て見るさ、顔色を眞蒼にしてアル〜顛へてゐるは、縞の着物に縞の羽織、博多の帯に前掛けと言ふ町人風の男國「お前さん何うも酷い目に遭ひましたナ、全体どうしたんです町「誠にどうも種々御厄介に相成りまして、お禮の申し様もございません、實は斯う言ふ事が時折りござりますので私し共も誠に迷惑いたして居ります、私しは藏前の札差し町人で飯倉屋甚兵衛と言ふ者の手代で市助と言ふ者でござりますが、ツイ此の先き迄お屋敷の御用で参りました其の戻り道、何か私しが無禮をいたした様な事を申し掛け、今のお武家がお手討にするさ申して追つ驅けますので、私しは漸やう御當家へ逃げ込み、お救ひに預かりました様な譯、誠に有難う存じます國「然うか、其りや酷い目に逢ひましたナ、マア氣をお注げなさい、此の近所には悪い武士さか三部屋手廻りの悪い奴ばかりが居ります、しかし江戸で花咲く飯倉屋と云つて、権現様のお供をして江戸

表で町人となつてゐる金満家があると言ふ事は豫て聞いて居りましたが、今
の何か其んな處へ付け込む心算だったのでせう市「イヤ、どうも有難う存じ
ます、却々油断は出来ません、何れ改めてお禮に出ます」と、阪倉屋の手代市
助は喜んで立歸つた。スルと其後へ入り違ひに這入つて来たのは此の國五郎
の宅と軒並びで、諸大名へ人入れの元締めをしてゐる上總屋金兵衛と言ふ隨分
諸方へ顔の賣れた親分株だ。

○羽衣と異名を取つた國五郎だ

情けは人の爲めならず、今入り違ひに這入つて来た上總屋金兵衛「今日は、
どうも鳥屋の親方、驚きましたね、お前さんは元お武家様だつたと言ふが、
今のお腕前は本當に感心いたしました」國「イヤ是れは上總屋の親方、何もそれ
しきの事珍らしい事はございませぬ、要り向ふが弱かつたのでございませう。

金「イヤ、その通り橋木を以つて一時殺しになさる腕前は大したものですよ
國「イヤ、お耻しい位いのもです金「しかし親方、貴郎に一つ折入つてお
願ひと云ふのは外でもございませぬが、宅の野郎共は年が年中喧嘩をして誠に
困ります、處が町内に貴郎の様なお腕前のお人があるのを幸ひ、どうか一つ劔
術を教へて貰ひ申したいので……如何でございませう國「イヤ其れは折角だ
がお止しなさい、生兵衛大怪我の元と言つて、何も知らなけりや却つて逃げる
から怪我も無い譯でございませぬ金「然う言はねエでどうか一つ願ひ申します
さ、強いての頼みに國五郎も今は否み兼ね國「其れぢやア私しの知つて居る限
り教へませう」と承知の旨を答へた、其處で國五郎と金兵衛はいろ／＼と相談
の上、丁度其の向ふの路次の奥が三軒續いて空家になつて居たのを借り受け、
早速其の翌日から大工を入れて三軒の家を壁打ち抜いて一軒の様にしてい、
是れを稽古場として國五郎が、上總屋の若い者に劔術を教へる事になつた、是

れを聞き傳へて若い者の朋杯が、毎夜の如く稽古に来るものであるから、忽ちの間、百二十三人の者に柔道、劍術を仕込む事になる。處が國五郎も根が好める道であるから教へ方も熱心な處へ、習ふ方も進んでゐるので、其中で半ばばかりの者はメキメキ腕を上げて来た、何しろ國丸は十七才の時に尾張名古屋の城下を跡にして、東海道筋を江戸へ登つて来る迄に、劍術は眞蔭流柔術は起倒流、其他武藝十八般は殆ど免許皆傳を受けた位いの腕前、大勢の者も先生くさ云つて稽古をして貰ふ、然るに國五郎は江戸へ来てから早や一年ばかりになるが、まだ吉原の夜景色を見た事がないさうかして一度見物に行きたいと思つてゐるさ、或る日上總屋金兵衛は、何か心祝ひの事があつて若い者を七八人供に連れ、吉原の夜櫻を見物に行かうと言ふので國五郎を迎へて来た、豫ての望みも國五郎は折宜く遊びに来て居た天人小僧新太郎を連れて、總勢十人ばかりで神田の三河町を出て行く、土手八丁から衣紋阪、見返り

柳や大門口、門の内は浮世の外なる不夜城で、仲の町九十六軒の茶屋は花暖簾を掛けて、中央にはズツと満開の櫻を植へ並べ、絹雪洞の火に花に映じて美しく、人の心を浮き立たしむる夜景色に、流石の國五郎も膽魂を奪はるゝばかり、今しも丁度仲の町を通り過ぎて江戸町の方へ行かうとする此の途端、不意に向ふの方でワァーッ云ふ騒ぎ、〇「ソレ何か始まつた」云ふので、唯さへ腕立てを好んでゐる上總屋の若い者、黒山の如き人集りの中へズツと這入り込み、一固まりになつて見物してゐるさ、中には一人の男が酒に性根を奪はれてか、眼は血走つて喧嘩の對手を逃がした口惜まぎれに、持つたる棒を振り廻して今しもズツと顔を出した上總屋身内の若い者をボカーンと一つ打つた、〇「オヤッ此の野郎、何んてエ事をしやアがる、俺の顔を殴りやがつたナヤイド盲目奴ツ氣を注げるツ」云ふ内に又一つボカリ、〇「此の野郎、何を仕やアがる、ソレ遣つちまへッ」と、止めて居る間も何もあらばこそ、五六人の若

い者はバラ／＼ツと其れへ飛び出して、拳を固めて對手の男をボカ／＼ツと苦もなく其處へ叩き倒してしまつた、スルと彼の酔拂ひは手足をバタ／＼させながら「酔」サア殺せ／＼ツ、汝ア何處の牛の骨か馬の骨かア知らねエが、憚りながら此の廓内で人に知られた隅田組の山犬藤藏だ、能くも大勢寄つて集つて打つたナ、覺へて居ろツ、山犬藤藏は斯んな事ぢや死切れねエ、サア殺せ／＼ツ〇「何んだ、山犬だか狼だか知らねエが、此の雑沓の中を騒がしやがるから叩いて遣つたが何うした筈棒奴ツ、憚りながら俺達は上總屋金兵衛の身内だ、手前等の様な無頼漢たア些と譯か違ふんだ、口惜けりや何時でも返報に來いツ」と、ワイ／＼云つて居る其折柄向ふの方よりワア／＼ツツと鯨波の聲を作つてドン／＼駈け付け來た七八十人、手／＼に棒、或ひは長脇差し、馬口杯を携へたのは、これぞ大川を一つ隔つた牛島村で、其の頃は隅田組と名付けて旗本屋敷杯へ出入りをなし、吉原廓内亂暴人取鎮め

と一見識立てた俠客だ、其のうち又も大門口の方より、ドツと三四十人の加勢が來た、見る／＼内に四邊は是れ等の者で黒くなる位いウワ／＼ツツと鯨波の聲を揚げて上總屋身内の者を追取り圍んだ、中にも一人其れへ飛んで出たのは此の内の取締りを見へて却々立派な男「ヤア何處の奴かア知らねエが、當廓内の取締りをする隅田組身内の者を、能くも牛死牛生の目に遣せたナ、塵殺しだ覺悟しろツ、ソレ若い奴等、殺つてしまへツ」と、下知を傳へる上總勢百人ばかりの荒男は、各々得物を振り冠つて、唯一潰し上總屋身内の者に打つて掛らんとする斯う成つてはモ仕方がないから國五郎も着て居たた羽織をバツと脱ぎ捨て、跣足となつた國「貴様等ア何處の何組か薪木組か知らないが神田三河町で小鳥屋渡世、弱きを助け強きを挫く、曲つた事は大嫌ひ、男を磨くと言ふ譯ではないが、羽衣と異名を取つた國五郎だ」まだ異名を取つたと言ふ譯ではないが、天人小僧新太郎の文身を不圖思ひ出したと見へて斯う名乗

つた國「今日是れへ連れて来たのは皆俺の弟子も同様、弟子の過失は師匠が引受けねば成るまい、此の國五郎が唯一人で對手をして消る、一人二人は面倒だ百人でも二百人でも束に成つて掛つて来いッ ○「ナニ生意氣な此の青二才奴、神田の三河町で羽衣ださか天人ださか、今始めて聞く名前だ、ソレ殺つてしまへッ」さ、下知を傳へたから堪らない、ワアツと鯨波の聲を揚げながらドツミばかりに多勢を頼んで打つて掛る國「ヤツ猪口才な蠅虫奴、サア来い来れッ」さ、彼方へ投げ此方へ蹴飛ばす、其の有様は恰かも猛虎の群羊中に暴るゝが如く、目覺しくも又物凄き位い、一刀の許に斬つて落すは容易いが、殺す程の奴でもないさ國「エイツ……ヤツエイツ……」手當り次第に右左り、前さ背後に投げ飛ばす、此の國五郎が烈しき働きに元氣を得た天人小僧新太郎も、最早や往昔の女姿ではない、顔は綺麗だが随分度胸の据つた男、同じ様に右左りに叩き倒し蹴り倒し、縦横無盡に暴れ廻る、五院の勘造も上總屋金兵衛

の身内の者と共に、一緒になつて暴れ廻つて居る、茲暫らくは大勢が、入り亂れての大格闘、嵐ぞ誘ふ花吹雪、其のうち之餘り國五郎の勢ひが激しいものであるから、隅田組の連中も思はず知らず一固りになつてサツと引く、此方も乗り込んで行く程の事もないから、右さ左りに別れ、隙を窺つて再度の殺倒をせんさ、殺氣に満ちて睨みあつてゐる、是れがために廊内の騒動は大變だ、吉原中は上を下への大亂痴起、折角登樓した客は一間のうちに押し込められて外へ出さない、大勢の地廻り素見連中は遠巻きにしてウワツツと騒いでゐる、斯う云ふ譯であるから吉原大門を開けては置かない、據所なくヒタリ大門を閉じてしまつて、如何なる血の雨降る大喧嘩が起るかさ安き心もなく恐れ入つてゐる、大勢の中には早や四五人の怪我人も出来た様子尤も大門口には八丁堀の輿力、或ひは吉原近邊の岡引き云ふ手先き杯も勤めてゐるのだが、何しろ總勢百四五十人、其れに野次馬を加へての大喧嘩で

あるから、却々三人や五人の役人では近付く事が出来ない。

○吉原仲の町の花吹雪

然るに恰度此の當夜、江戸で花咲く飯倉屋と唄はれて、其全盛を羨まれたる藏前の札差し町人飯倉屋甚兵衛が、手代の市助を連れて仲の町の島屋と云ふ其當時名題のお茶屋へ遊びに来て居た、此の藏前の札差しと云ふのは、當今の東京蠣殻町の米商、或ひは大坂の堂島仲買人杯よりも尙一層の勢ひがあつたのは、旗本八萬騎と云つても其中で知行を充分に頂いてゐるのは僅かなもので、藏前取りと俗に云つて千石から八百石、藏前のお藏から其れ丈の米を頂戴する、ところが直参の人々が萬一不時の入用金と云ふさ、來年分の扶持米を書き入れて必らず此の藏前の札差しから金の融通をして貰ふ、是れがために阿彌陀も金で光る世の中、旗本杯と云つても大抵は言葉を卑くして札

差し町人には頭を下げる程であつたさ云ふ、町人だから或る場合は旗本杯より却つて巾が利く、今しも大勢の彌次馬がワイ／＼云ふてゐるのを、不圖耳にした飯倉屋甚兵衛甚「コレ市助市」へエ甚「お前が過日神田の三河町で、生酔ひに追つ駈けられた時に、逃げ込んで助けて貰つた鳥屋の親方は何んさか云つたな、お名前を……市」へエ、確か國五郎さんさか被仰いました甚「然うか、一寸さ御覽、那のお方ぢやないかい、ソレ素足になつて大勢の前に立つて在つしやる」二階の欄干から延び上つて見た手代市助市「旦那、ソ然うでございませう那のお方に違ひございません甚「那のお方なら大層なお腕前だな市」大層な腕前どころではございません、旦那、私しはモウ何うも早や何うなるかと思つて居りましたら、強い強くないのつて、那のお方には楯木持たせるのが一番でございませう甚「其んな事は何うでも宜い、併し市助、お前が助けられてから未だお禮にも行かんで居る、お名前も顔も知つてゐるから此の驕ぎを黙つて見て

ある譯には行くまい、私しが知らなければ兎に角同じ吉原廓内で此の騒ぎを見捨て置く事は出来ないから、一寸私しが行って御挨拶をして來様」是れから羽織を引掛けた阪倉屋甚兵衛、トシ／＼と下へ降りて此の事情を大略島屋の主人に話し、金棒を取つて往來の者を退かせる、何んしろ當時札差し町人で一と云つて二と下らぬ阪倉屋の勢ひ、チャリ／＼と金棒を引かせて辛くも大勢の見物を押し分け、ズツと國五郎の前へ出て來た阪倉屋甚兵衛、膝の下まで両手を下げて町噂に「甚」エ、始めてお目に掛りますが、私しは藏前の札差し町人阪倉屋甚兵衛と申す者でございます、只今此の廓内へ參つて居りましたる處、何か喧嘩の様な風にお見受け申します、何う云ふ御遺恨から起りました事は存じませんが、何んせう夜間が稼業の吉原町是れがために大門を締める云ふ、町々の者は一方ならぬ迷惑でございます、不束な者ではございませぬが、何うか此の甚兵衛に今晚の處丈けお預け下さる譯には參りますまいか

決してお顔の潰れる様な事はいたしません」と、譯の判つた挨拶振り、人を見て法を説け、此方も随分氣象の廓然した國五郎「國」イヤ是れば御町噂な御挨拶で痛み入ります、私しは神田三河町の町人小島屋國五郎でございます、些細な事から致して何さか隅田組さか何んさか云ふ連中が、大勢で理不盡に打つて掛ります事故、是れを防がため據所なく詰らぬ事に及びました次第、何うか宜敷く願ひ申します、お任せ申すも申さぬもございませぬ……、サア皆穩かにしなぐちや成らないぞ、穩かにしない者は此の後に國五郎が片ツ端しから對手にする」鶴の一撃、上總屋の若い者も黙つて一固まりに寄つてしまつた、仲裁人は時の氏神と云つて、仲人があるので事が圓く治まる、斯くして一方の羽衣國五郎が任して呉れたから、今度は阪倉屋甚兵衛隅田組の方へ來て「甚」何うか御一統、お靜かに願ひます、私しは藏前の阪倉屋甚兵衛でございます、此の中で取締りのお方がお在でございます、何うかお話しを願ひます」

云ふさ中からヌツさ出て来たのは、隅田組の中でも頭分たる、奇人の勘兵衛
 さ云ふ男 勘「へエ、ヤア是れは阪倉屋の旦那でございますか、何か御用で、
 甚「エ、只今對手の國五郎さんの方は及ばすながら私しが預かつて参りまし
 た、何んしろお前さん方が斯う云ふ騒ぎをしてゐるさ、此の廓一般の迷惑、何
 うか此處のさころは私しに一つ任してお貰ひ申したい、町人の私しに任せられ
 ずまいが、任せられんさ云ふ事なれば私しにも少し考へがありますので……勘
 斯りや旦那恐れ入ります、何も別に任すの任さんのさ云へたものではございま
 せん、旦那方に憎まれたら私し共は何うにも遣つて行けない事になるんですか
 ら何うか宜敷い様にお願ひ申します 甚「ウム能く任して下された、其れでは兎
 も角も私しが御同道いたします處へお出でを願ひます」さ、云ふので直ぐに喧
 嘩も事が済んだ、一方八丁堀の與力、其他には阪倉屋から頼み込んで、怪我
 死人の處などは内聞に濟して貰ふ事に取計らつた、斯くして甚兵衛は總ての關

係者 中重立つ者を五十何名、仲の町の山口さ云ふ茶屋へ案内をなし、事の起
 りから段々の次第を聞いて、死んだ者は仕方がないから相當の弔ひ金を出す
 怪我したものは夫れ丈の療治代を遣つて療治をさせる、双方共別に根があ
 つて喧嘩が起つたさ云ふ譯ではない隅田組の方も正逆か是れ程の大きな事にな
 らうさと思はない、また國五郎の方も充分に勝味を見せたのだから、萬事を阪
 倉屋甚兵衛に任して甚兵衛は取敢へず仲人さして口を利くさ云ふ事になつた、
 茲で阪倉屋甚兵衛が双方へ對して仲直りの盃事を濟まして、其の後早速座
 敷の模様を替へ、大勢の藝妓、幫間を招いてドンチャン／＼底抜け騒ぎのうち
 に以來は双方共 水魚の交りをするさいふので芽出度く仲裁が出来た、甚兵
 衛は又國五郎に向つて手代市助を救けられた一條を、改めて茲に禮を述べ、
 聞いて居た隅田組の連中は互ひに顔と顔を見合して皆して見るさ餘程腕前が
 出来る人だ、何うも詰らねエ人に喧嘩を仕掛けた、これは必らず人入れ元締の

上總屋なり、阪倉屋も始終厄介になつてゐるに相違ない、何んしろ江戸の土地に取つては大した人たし、心の中に恐れを抱いてゐる位い、扱て其場は阪倉屋が十二分の幹旋に依つて、何れ又改めてお禮云ふ事になり一同別れ、戻つて来る、國五郎を始め一同は神田三河町へ戻つて来た、捨て置けぬ事であるから其れより兩三日経つて國五郎は、阪倉屋甚兵衛方へ上總屋金兵衛同道で禮に行く、

○心事高潔なる羽衣國五郎

類を以つて友と呼ぶ、國五郎は上總屋金兵衛を同道して立派な土産杯を携さへ藏前なる阪倉屋甚兵衛の宅へ禮に来た、甚兵衛も大いに喜んで早速兩人を奥間へ案内し、種々の馳走を出して兩人を待遇する、妻のお芳、倅、娘など其れへ出て来て初対面の挨拶やら、手代市助が禮を述べるやら、する内に阪

倉屋は熟々國五郎の舉動を見ると、流石六十余萬石尾州侯の落胤丈けあつて、其れさば知らぬど何處やうに犯す可からざる威嚴を備へ、云ふに云はれぬ上品な處がある、話しのうちに甚兵衛は又なき友を得た心持ち、國五郎も甚兵衛の行状やら言葉やらを聞いて、却々町人には惜しい位いの人物である、茲に双方肝膽相照すの間柄となり、隔意なく物語つて先づ其日は宜い加減に引上げて國五郎は三河町へ立歸つて来た、是れが縁となつて双方共互ひに訪ひつ訪はれつ、殆ど親類同様の交際をしてゐたが、國五郎は此の喧嘩が爲めに江戸市中へ其名前を賣り出し、羽衣國五郎親分と云はれて、誰れ知らぬ者もない位いの人物となつたが、少しく思ふ處があつて身内など云つては一人も拵らへない、相變らず小鳥を飼つて其れを商賣にしてゐる、處が茲に國五郎の身の上へ芽出度い事が出来た云ふのは、抑々此の阪倉屋甚兵衛方へ出入りをして、甚兵衛共殆ど兄弟同様の交際をなし、家内の者とも非常に

懇意にしてあるうち、何んしろ國五郎は生れが生れであるから、今町人姿
さなつて居ても何處かに残る昔の面影、年はさ云へば當年二十三才の血氣盛
り、色白く鼻筋通り眼元に無限の愛嬌があつてしかも威嚴を備へた風采に、
持つて生れた俠氣の、凜乎とした氣象を見込んだのが阪倉屋の長女お松、當
年二十才で誠に花の如き娘であつた、是女が何うかして國五郎を吾が將來の良
人と定めたいさ、思ふ心は舉動に出て、何時しか親阪倉甚屋兵衛夫婦の目にも
止まる様に成つて來た、甚兵衛夫婦も元より國五郎には然る可き妻を持たせた
いさ思つて居た時であるから、渡りに船と大いに喜び、親戚に當る富澤町の
富田屋善兵衛と云ふ者を介して國五郎に此の事を申し込んだ、處が國五郎は自
から身を卑下して、自分は高が小鳥屋風情、向ふは當時札差し町人でも、一さ
云つて二さ下らぬ阪倉屋の娘、釣り合はぬ縁であるからと云つて断然謝絶をし
たが、阪倉屋夫婦富田屋善兵衛は何うしても聞き入れない、種々さ手を換へ品

を換へて申し込んで來るから、國五郎も今は仕方なく承知の旨を答へ、其代り
世の人の思惑を憚つて、何か非常な事が出來ねば阪倉屋へは決して内間へ立入
らないと云ふ、随分潔白な條件を出して愈々婚約が整ふた、阪倉屋夫婦娘
お松、富田屋善兵衛其他の者の喜びは如何ばかり、黄道吉日を選んで輿入れ
をする、是れが通常なら阪倉屋一家、及び分家親戚などは大層な儀式をする、
また國五郎の方も固より店は小さな小鳥屋だが、人入れ元締めの上總屋を始め
、當時江戸の俠客などの外、隅田組などは出來る丈け盛んに祝ふのであるが、
それは國五郎より一切断つてしまつて、唯僅の内祝言として重立つ者十人
ばかりに依り芽出度く茲にお松を妻として迎へたのであつた、他の見る目も羨
ましき位い夫婦の仲も睦まじく、吾が世の春と喜んでゐる、國五郎は今迄は
月のうちと三回は必らず阪倉屋と往來してゐたか、此時の約束に依つて世間
の口が五月蠅いと此後はバツタリ足踏みをしない、又阪倉屋の方も少しも訪れ

をしないで、唯出入りの者より様子を聞いて一同大喜びをしてゐる位い、元來此の阪倉屋甚兵衛夫婦の間には三人の子供があるので、長女は國五郎の處へ嫁入いたお松、次ぎは同じく女の子でお君と云つて當年十八才、一番下が男の子で當年十五才になる甚二郎是れが阪倉屋の先づ相續人だ、處が此の二女のお君と云ふ娘の身の上に就いて一つの事が出来たといふのは、往昔江戸の名物と云はれたる神田明神の祭禮また芝の日枝神社の祭禮、これを俗に山王祭り云ふ、スルと丁度此の年の神田明神の祭禮の時に、將軍家は御物見臺まで出られて此の祭禮を御覽に成らうといふので、江戸市中は殆ど惣出となつて祭禮の仕度に狂奔してゐる、此の時富澤町からは舞の上手な嫖織の好い娘を十人ばかり選り出して踊り屋臺を出すといふ事に定まり、其の仕度に取掛つた時、彼の富田善兵衛方から親戚なる阪倉屋甚兵衛の娘お君を借りて出した、此の際に當時外櫻田上屋敷のあつた出羽國置賜郡米澤十五萬石、上杉

彈正大弼侯も同じくお上屋敷の表口へ幕張りなごをして家來の者と共に祭禮の賑ひを見物されたが、不圖富澤町の踊り屋臺の中で、目に止つたのが阪倉屋の娘お君の姿、常から藏前の今辨天と云はれてゐる位いの嫖織の上に、今日は華美なる舞衣裳、濃化粧で出来る丈け綺麗に見せ様と云ふのだから上杉侯の目に止まるのも無理はない、祭禮が終るさ上杉侯は用人黒川左仲と言ふ者を介して、阪倉屋へお君をお部屋へ上げる様と望まれたが、娘お君は無論の事町人ながらも藏前の札差し阪倉屋甚兵衛何うして承知するものではない、一言の許に謝罪つてこれと言ふも娘を何時迄も手許に置くからだと言ふので、豫て其れさなく話しのあつた同じ藏前の伊勢屋四郎左衛門の倅幸次郎と言ふ者へ、急に嫁入らせる事と話を纏めた、言ふ迄も無く其れには媒介人もあつて結納を取懸し、吉日辰辰を選んでいよく輿入れさなる、冠婚葬祭は人生の三大禮其れになるさ何んしろ江戸草分けの町人で、藏前屈指の金満

家、阪倉は甚兵衛の事であるから、藏前通りの七八分は皆提灯を出して祝つて来る、是れがために阪倉屋は上を下への大混雑、其當日が来る今日を晴れ着の立派な仕度でお、君を中央にして両親始め親類、媒介人其出入り者四五十人、が前後を取巻いて、何れも阪倉屋の定紋を記した箱提灯を點じ列ね、嫁入り先きなる伊勢屋四郎左衛門方へ送つて行く、處が伊勢屋の宅は同じ藏前で、四五丁ばかりの間しか無いのだが、今日ば方角が宜くないさいふので故意さ一行は裏通りの方へ廻り路をする、藏前の阪倉屋を出て鳥越へ出で鳥越から、七曲りの方へ曲つて淺草見附の脇から伊勢屋四郎左衛門方へ送らうさいふので、今しも一行は對の箱提灯を照した丁稚を先きに立て、藏前より鳥越の方へ差し掛つて来た。

○何だ黒鼠のガリ〜とは

が今しも阪倉屋の娘お君を伊勢屋方へ送り届けんさする一行が、鳥越の方へ差し掛つて来た此の時しも「ソレツ……」と、怪しき合圖の一言に、彼方此方の小陰よりバラ〜ツと現はれ出でたる覆面の武士三十人ばかり、續いて同じく覆面したる仲間体の者が是れ又た三十人、各々大劔を稻妻の如く閃めかして、物をも云はずドツと一度に阪倉屋の一連を望んで斬り掛つて来た皆「アツ……」と、驚いた一同は根が町人の悲しさに、思はずバラ〜ツと四方へ散亂する、中にもお君を乗せたる駕籠昇人足は、ドンと其處へ駕籠を下した儘ウワ〜ツと驚いて這々の体、後をも見ずに命辛ら〜逃げ出した、是れを眺めた彼の曲者曲「ソレ駕籠を奪へツ、駕籠だ〜ツ」と、云ふより早くドツと其れへ駆け付け來つたる彼の曲者四五十人はお君の乗つたる駕籠を其儘、大勢して宛然ら宙に釣る如く差し上げて曲「ソレ引上げるツ 皆合點だツ……」曲者は其儘其處を立つて、ドン〜ドン〜暗に紛れて逃げ出してしまった、向ふ

は餘程手段を考へてした事さ見へて其の手際の早い事は驚くばかり、瞬く間に四邊は元の静けさとなつた、阪倉屋の連中は夢中になつて八方へ逃げ去つたが、此の中に唯一人箱提灯を持つて眞先に立つて居たのが阪倉屋の丁稚久造、此の久造年はまだ十四才の小兒だが、流石藏前で仕込まれた丁稚で、目から鼻へ抜ける様な賢い奴、今しも大勢の曲者に斬り込まれて、自分も同じくワツと逃げ出しはしたものの、途中でヒヨイと氣が注いたから箱提灯を片邊の溝の中へ投げ込み、神田明神の瑞籬の影へ身を秘めて、昵々様子を透して見てゐるさ、彼の大勢の曲者はお君の乗つたる駕籠を宙に釣り上げて、ドン／＼駈け出した様子であるから、一旦逃げ出した阪倉屋の連中が又引返して來た姿を見たまゝ、穿いたる草履を其處へ脱ぎ捨て、向ふの目に付かない様さ軒下傳ひ、彼の曲者の跡をドン／＼尾けて來た、曲者は鳥越より道を逆に取りつて、聽ての事丸の内へ這入つて來るさ、前後に眼を配りながら ○「一同

の者大儀であつた、先づ是れにて君公にも定めしお喜びであらう、各々方のお骨折りも其の甲斐があつたさいふものでござる」云ひつゝ來たのが外櫻田なる上杉家の通用門 ○「コラ門番、門番、言ふさ内裡からは門番の聲番へイ、誰方…… ○「拙者だ、開ける／＼番へイ、黒川様でございますか 左」然うだ、黒川左仲だ 番へイ只今開けます……これは御苦勞様でございます、首尾は何うでございました 左」上首尾である番「左様で、お芽出度う存じますさ、言ふうちに一同は駕籠を先きにしてズツと這入みさ、門はヒタリと締めてしまつた、是れを残らず見て置いた丁稚久造は、其儘ドン／＼藏前の方へ駈け戻つて來る、處が此方阪倉屋、伊勢屋の両家は上を下への大騒動、肝腎の嫁に行かうと云ふ、お君が、何處へか曲者のために奪ひ去られて仕舞つた、送り迎への者の中で、出入りの職人、或ひは仲仕杯が、擅承を大事と思つて抵抗した者もあるが、それがために大分傷を受けたものもある、其處で一同の者は

何うしたものであらうさ、立歸つて評議をして見るさ一人丁稚久造が居ない
 では久造は那の曲者のために殺されたのであらうか、可愛そいな事をしたも
 だ、しかし此の始末は何うしたら宜らうさ、額を集めて相談の上、兎に角鳥
 越邊へ探しに遣らうさ、人を出して大騒ぎの最中へ久「へエ、只今歸りました
 ア、辛倒……」息急き駈け戻つた丁稚久造、番頭の千助はこれを見て千「オ、
 久造か、お前全体何うしたんだい、旦那様も皆も大層御心配で、何處か怪
 我でもしたんぢやないか久「イエ怪我はいたしません、遅くなりましたのは少
 し譯がございます、何うか旦那様に一寸さお目に掛り度う存じます千「マア久
 造、何んの用があるのか知らんが、奥は今お取込みの最中、旦那に申し上げな
 いでも大抵な事なら私が聞かう久「へエ、其りや番頭様へ申し上げても宜敷
 うございませうが、斯う云ふ事は幾何番頭さんでも申し上げ難いので千「申し上
 げ難いたつて、帳場を引受けて内外の事は總て私が擔當をしてゐるだん、何ん

な事かは知らんが私は云へない事はあるまい久「其りや知つて居ます、しかし
 平生の事と違つて今日の事ばかりは失禮ながら黒鼠のガリくさば……千「
 何んだ黒鼠のガリくさば久「ナニ貴郎の事ではございませぬ、他所の番頭さ
 んで千「其れぢや云ふが宜い久「兎に角番頭さんには云ひ難い、旦那様へ直接
 ……千「だつて今云ふ通り旦那様は御親類のお方杯とお話し最中だ、頼りに店
 先きで云ひ争ふてゐるのを、奥の間で聞き付けた主人甚兵衛、何うしたのだら
 うと思ひながら其れへ出て来た甚「番頭、冗戯ぢやないよ、お前が眞になつて
 何かの工風をして呉れねば成らぬ今晚の仕儀、それに子供を對手にして大きな
 聲で云ひ争ふなんて千「是れは旦那様恐れ入ります、イエ何別に騒いでゐる譯
 ではございませぬが、只今久造が戻つて來まして斯様くさ申して居ります
 甚「然うか、久造、お前も些さは考へて呉れ、別に此の場合私に云はないで
 も、番頭迄に話したら宜いぢやないか千「其れは久造、だから私に云へさ云

つてゐるんだ久へエ。しかし旦那様、何しろ大切な事でございますから、番頭さんに申し上げまして其れから旦那様へお執次を願ふなんて云ふさ、萬事手數が掛ります、其れ故旦那様へ直きく申し上げ様云ふので甚「フム、大變お前は大仰な事の様云ふが、私に直きく云はねば成らんさ云ふのは全体何んの事だ久旦那様、何んでございませう、奥で大勢お集まりになつて騒いで在つしやるのは、お嬢様が先刻の亂暴人のために何處へか持つて行かれたに就いて其の始末を御相談になるのでございませう、それに就いて私しが考へもございませうし、またお嬢様の行先きも存じて居ります……甚「ナニツお前が娘の行先きが知つて居るさ云ふのか久へエ左様で、私しは先刻曲者が出ました時に、斯様く云々の譯で、高い聲では云はれませんが、駕籠を擔ぎ込んだのは外櫻田上杉様の通用門、其れを見届けて私しは歸つて参りましたのでございませう。」

○對手は十五萬石の上杉様だ

なか／＼に持たぬが増しよ散る櫻、標緻の好い娘を持つて其れがため却つて苦勞の種となつた阪倉屋甚兵衛甚「フーン然うかい久造、私し大抵其んな事だらうと思つて今奥でいろ／＼話しましたんだが、對手は何んしろ十五萬石の上杉様だ、お町奉行へお願ひ申した處で國主大名の勢ひ覺へは無いさ云はれて見れば其れツ切り……久「サア其處でございませう旦那、年の行かない此の久造の言葉を信用して下さいませすれば、此處に宜い考へがございませう甚「ウム、負ふた子に教へられて淺瀬を渡る、マア何う云ふ考へか云つて御覽久「私しも委しくは存じませんが、旦那が時々被仰いますアノ神田三河町の羽衣の旦那でございませう甚「フム、國五郎殿が何うした久「何んでも非常な場合には何日でも出入りをなさるさ云ふお約束ださうで、私しは神田の方へお使ひに行く度毎に

お寄り申す譯に行きませんから前を通つて見ますよ、お店の景氣は益々お宜敷うございます、人の話しに聞いて見ますのに、今本所深川山の手を除けたら、江戸一番の俠客といふのは神田三河町の小鳥屋、羽衣國五郎さんださいふ評判でございます、其處でマア今度の事も三河町の旦那に御相談なすつたら、容易くお嬢様を取返す事が出来るか私しは思ひます、他の者が幾何騒いでも駄目だらうと存じますが如何で……甚成る程、イヤ是れも宜い考へだちや一つ相談して見様」さ、感心して甚兵衛は、久造に禮を述べて早速奥へ這入つて来た、親類縁者の者に一伍一什を話して此の相談をするさ、一同の老も皆「夫りや結構だ、早速國五郎さんを招いたら宜からう、阪倉屋の家が斯う云ふ騒動の際であれば、豈夫来て下さらん事もあるまい」さ、是れから手代の市助が、仲仕頭の出入り者、權次を連れ、駕籠を持たせて神田三河町羽衣國五郎の宅へ歩つて来た、そこで市助は國五郎に逢つて委細の話しをなし、何

うか此の非常な場合に際しお力を借り度いと頼み込む、これを聞いた羽衣國五郎事の起りの娘お君は自分の妻の妹であり、また對手は十五萬石の上杉家外様入名にして折りさへあれば徳川家にも敵對仕様さいふ位い、中興の先祖は越後春日山の城主上杉謙信、後奥州會津へ國換へさなり、慶長五年關ヶ原の戦争に石田三成、大谷刑部等に味方して徳川家に弓をひき、是れがたぬ祿高を減じられて奥州福島、出羽米澤、両州兼帯になつたが、慶元兩度の關東關西の戦争に、又も豊臣家に味方して遂に奥州福島を取り上げられ、今では出羽米澤丈で十五萬石、内高は三十餘萬石もある上杉彈正大弼、稍ともするさ徳川家に敵討の行爲を見せる、尤も徳川家に於いては上杉家に對し舊家の上に遠き先祖は大の勤王家であつたから、縮號を御免になつて幾何か叮嚀な取扱ひをする、上杉家では此の威勢を鼻に掛けて國守大名のうちでも何かに付けて威張る癖がある、權門に婿びす勢家に阿らず、義侠の二字を命

として膽斗の如き羽衣國五郎一もなく二もなく承知して、市助、權次の兩人を引連れ、自分は駕籠に乗つて藏前阪倉屋の宅へ乗込んで来た、久々にて甚兵衛夫婦や家内中の者に對面し、挨拶を済まして後ち今回の一伍一什を聞き取つた國「イヤ決して御心配下さいませ、必らず此の國五郎がお引受け申します、何うか御安神下さい、しかし婚禮の義は今晚や明日さいふ事さは成りませんから、暫らくの間日延べをして置いて下さい」と、萬事受合つて其の夜明け方になつて三河町の宅へ歸つて来る、國五郎は其のうちに種々考へて見たが、善悪は扱て置いて兎に角對手は十五萬石の大名であるから、餘程氣を注げて事を行はねばならぬ、それには然る可き人の力を借りなければ成らぬ、夜の明けけるのを待ち兼ねて勘造を供に連れ、小石川御門外なる水戸中納言侯のお屋敷へ来て、當時有名なる朝日奈彌太郎を其のお長屋に訪ひ、御隠居光國卿へお目通りの義を願ひ入れた、折宜く光國卿は御滞在中であつたから、早速御通

りを許された、これが中納言として天下の副將軍として居られる時であつたらば、假令ひ國五郎が尾張家の血統にもせよ、今は町人の小鳥屋國五郎、對面して話したる譯には行かないのだが、既に御位を辭して御隠居さいふ御身分であるから、直ちにお目通りへ通してお逢ひになつた、其處で國五郎は一通りの挨拶やら御禮やら終つた後、今度の阪倉屋の一件、上杉家の家來共の不始末を一々光國卿に申し上げ、不憚なる娘お君の身を、御力を以つてお救ひの程を願ひ奉るを願つた、スルも光國卿「一應當主へ光國より願つて遣はす事故、追つて沙汰に及ぶ迄靜かに相待つが宜からう」と、快よく仰せになつて國五郎へ御酒を下だし置かれて、一先づ宅へ引取らせた、早速其日のうちに光國卿より、御當主綱條公に御面會の上、表向き上杉家へ使ひを送つては、却つて体面にも係はる事であるから、殿中に於いて穩かに宜敷く取扱ひ遣はす様を仰せ付けられた、水戸綱條公、是れは有名な明君であるから、お聞きにな

るさ直ちに紅葉山千代田の城へ登城なし。お部屋坊主を呼びになつて綱坊主
 米澤侯が登城いたされたならば、綱條少しく御意得たいに依り、予が部屋ま
 でお出でを願ふと傳へよ坊「ハッ畏まりました」と。お部屋坊主は上杉侯の控
 へて居るお詰所へ来て此の事を申し入れる。上杉彈正大弼はこれを聞いて
 外ならぬ副將軍綱條公の仰せだから、急ぎ仕度をして水戸侯のお部屋へ伺
 がつた。疊三疊ばかり末座に控へて彈「これは、水戸侯には私に何か御
 用でございまするか」と。頭は下げてゐるが腹の中では、自分も縮號を御免
 になつてゐる上杉彈正大弼だといふ色が、自然さ面に現はれてゐる綱「オ
 ーこれは、米澤侯にはお招きいたしてお氣の毒に存する。内々其許へ少
 し申し入れたい事のごさる……、コリヤ坊主、遠慮いたせ坊「ハッ」坊主が次
 へ立つて跡は水戸侯と上杉侯差し向ひだ綱「扱て米澤殿、近頃何か承はり
 及ぶ處、其許が家來共に心得違ひでもこれあるか、當江戸表藏前の町人

阪倉屋甚兵衛の娘君さやら申す者、先達て婚禮の其途中、貴公屋敷内へ乗物
 の儘連れ込んださの噂さ、萬一右様の事ありては先祖輝虎入道謙信を辱し
 め、且つは上杉の家名に係はる様な事に相成るさ心得、綱條御忠告までに申
 し入れる」斯う云つたのは、早く家來の者に云ひ聞かせて、秘かに阪倉屋の娘
 を離して返して仕舞へさ云ふ謎であつた。

○間拔野郎ばかりは居らぬ

事の是非を問はず、思つた事は何う云ふ手段にして、も行き通さうと言ふ大名
 氣質の上杉侯、殊に用人の黒川左仲に命じて漸やく思ひを達せんとする際であ
 るから、早速オインレさ承知はしない彈「これは水戸のお館には、何か拙者の
 家に心得違ひの者あつて、藏前の町人阪倉屋の娘君さやら申す者を、誘
 拐した様に仰せられるが、拙者近頃迷惑に存する、拙者家柄の義は置賜

郡米澤十五萬石でござる。先祖は菊桐の御紋章、裏書の御文、箱號御免の家柄、町家町人の娘を無体に屋敷内へ連れ込んだ杯さは奇怪の言葉でござる態々御注告下さる事故其の儘にも仕りませうが、何者が左様な事をお縮の耳に入れました、姓名相判れば何うか仰せ聞けを願ひたい、奇怪な事を近頃承はるものでござる。以來右様の事は仰せられざる様にお願ひ申す、拙者家來に心得違ひの者は一人もござらん一人も無いごころか家來も心得違ひら主人も心得違ひ、謂はゞ十萬石の家中は皆心得違ひの者ばかりだ、此の言葉には流石の綱條公も心中燃ゆるが如くに思召したが、此處を争ふて却つて亂暴な上杉侯が、お君を殺害する様な事があつては成らぬと思ひ返された綱ア、左様であつたか、イヤ何に是れは唯世の風聞に止まる事にて、左様な事があつては相成らんと思ひし故御注意までに申し入れた次第、お心得違ひの御家來が無ければ其れで宜敷い、彈「斯様な御用の爲めにお招きに相成つたは

彈正大彌近頃甚だ迷惑でござる、御免ッ……」と、云ひ捨てた儘席を蹴立て、自分の控へ所へ立ち歸つた、跡見送つて綱條公「ウム憎くむ可きは上杉彈正、稍さもすれば徳川の威勢を輕んず、屹度取押へんければ相成らぬ」と、思召したが、御自分が別に始められた事ではなく、御隠居光國卿よりお頼みになつた丈けであるから、無念を堪へてお歸りになるさ、早速小石川のお屋敷に於いて光國卿へ有りの儘を申し上げた、光國卿も餘りの事にお怒りになり、早速三河町へお使ひを遣はされた、首を長くしてお返事を待つて居た國五郎、何うなつたかお飛ぶが如くに朝日奈彌太郎の長屋まで行つて執次を乞ふて、直ちに光國卿の御前へお招きさなる光「扱て國丸殿、予は今位を去つて隠居の身の上であるから、綱條殿へ對して申し上げたる處、今日殿中にて上杉彈正大彌は斯様ノ、と申したる様子、世の中の事は理法權の三つを以つて行ふのであるが、理を以つて説いて判らざれば法を以つて押へんければ相成

らぬ、其の法を以つて押へるには何か茲に一つの証據なくては相叶ふまい然らば力ま法を以つて争ふより他に致し方あるまいと思ふに依り、今迄の事は當主がお含みに相成る事故、其方力を以つて上杉家に在るお君を尋ね出し、且つ又お君を彼の屋敷に連れ込んだ次第、及び家來の心得違ひの者共、一々証據をあげて言上に及びなば、是れを以つて將軍家へ申し上げ、屹度沙汰いたす事に仕様」云、事を分けて仰せられた、サア大層な事に成つて来た、喧嘩の相手にならう云ふ當人が、六十有餘萬石の尾張侯の落胤たる羽衣國五郎其の尻押し云ふのが天下の副將軍で水戸光國卿、入費を出すのが阪倉屋と伊勢屋の両家、一方の對手が十五萬石の上杉家だが、對手に取つては些々役不足だ、其處で國五郎は厚く御禮を申し上げて水戸家の上屋敷を出たが、愈々さなれば五代將軍のお墨附を以つて取つて押へ様さいふ考へ、三河町へ戻つて来るさ早速兄弟分、同様の上總屋金兵衛、續いて隅田組の重立つた者二人を呼び、五院の湖

造、天人小僧の新太郎始め一同を集めて國扱て一同の者に今日来て貰つたのは、豫て話を聞いて知つてゐるだらうが、藏前の阪倉屋の妹、娘で俺の女房の妹が、斯うく云々の譯で上杉家へ連れ込まれた云ふ話した、それで俺は水戸の殿様にお願ひして調べて頂いた處、何うしても剛情を張つて本當の事を上杉奴が云はないさうだ、それで水戸の殿様も仰せられるには、強く云へば向ふが秘かにお君を殺してしまふ、然うして仕舞へば骨折損の疲勞儲けだから秘にお君を救ひ出す工風せなければならぬエのだ、しかし乍ら俺の考へでは、上杉家にも然う間抜け野郎ばかりは居らぬエ、名題の長尾權四郎も居れば色部刑部と云ふ人も、千坂兵部といふ器量人もあるのだ、また幾何殿様が氣に入つた女だ云つたつて、勝手に其日から妾にするさ云ふ譯には行かぬエ、先づ奥様の方へお腰元の上つたうへ、一ヶ月でも二ヶ月でも奥様のお手許に居て、其れから改めてお妾に差し出すんだから、其奴から先きに一つ探つて見な

ければ成るめエと思ふ」云ふ。上總屋金兵衛が「金」ウム、然りや國五郎殿お前の云ふ通りだ、丁度宜い事がある云ふなア、上杉家の部屋には俺の兄弟分が始終出入りをして居つて、一寸く遊びに行くんだから、俺が手引きで以つて大部屋に入り込み、手分けをして探つて見たら宜からう」言ふ。天人小僧新太郎も「新」俺は又元の様に頭髪も大分延びて居るし、少し骨は折れるが髪結を頼んで髪を結つて貰へば又以前の女姿に成れるんだから、是りや一番女姿になつて上杉家の奥御殿へ入り込まう」スル。五院の勘造も聞いて居たが「勘」ぢや旦那斯う皆で相談が定つたら、私しも那の屋敷へ入り込む事にしますから何うか宜敷くお頼み申します。國「ウム面白い、では俺も皆なと一緒に入り込む事に仕様さ此處で銘々手分をして上杉家へ入り込む事になつた、そのうちに天人小僧新太郎は、名もお新と變へて神田三河町煙草屋吉兵衛といふ者の娘分さなり、上杉家の上屋敷で老女の萩江の局と言ふ女の處へ、便宜を求めて腰

元に住み込んだが、是れこそ誠に物騒。此上も無い譯で、背中一杯に天人が羽衣を干してゐる繪の文身がある年は二十三才といふ血氣盛り、善事も悪い事も仕盡して、今ではスツカリ改心して國五郎の爲めなら命を掛けても働らかうさいふ、見た處十八九才で誠に綺麗な女と見へる、これが早くも萩江の腰元になつて屋敷のうちに住み込んだ、五院の勘造は双子の着物に小倉の帯、紺の前掛けに白足袋、包みを脊負ふて小間物屋を變装し、毎日の如く上杉家のお門先きを小間物屋でございさ歩行てゐる、根が如才の無い男であるから、女中に呼び込まれたのを幸ひ、原價を切つて品物を賣るから、那の小間物屋さんは價が安いといふので、夫れからそれへ家中の女房、娘、或ひは女中が觸れ廻るから、是れを縁に毎日の如く入り込んで様子を探つてゐる。

○火事だーッ火事だーッ

一方大部屋の方へは上總屋金兵衛が、豫て兄弟分の如くする唐獅子藤五郎と云ふ者に頼んで、何れも仲間の姿に身を扮し、俺は何處の部屋、俺は彼處の部屋の者だと言ふ風に、出鱈目な事を言つて國五郎始め金兵衛、隅田組の頭立つた連中が總數十四五人、毎日入り代り立ち代り遊びに行く、金に糸目は付けないから、大部屋へ遊びに来る酒を買つたり肴を買つたり、少し宛の金を貸して大部屋の者に只管ら近寄らうとするから、何時の間にか國五郎の連中は、大部屋の者と同じ事になつて、中には折々泊り込む位になつて来た、終ひには國五郎、金兵衛杯に對して兄貴ださか親分ださか言ふ様に迄、心易くなつた、其のうちに天人小僧の新太郎から知らせて来たのは、お君は奥御殿の方に居ない様子であるから、外を尋ねて見たが宜からうと云ふ知らせ、そこで國五郎は大部屋の者にそれさなく聞いて見ると、中屋敷にも下屋敷にも居る様子がない始めて心注いた國五郎國「ハ、ア、して見るさ近頃お傍役人を兼帯してゐる

用人の黒川左仲、事に依つたら左仲の屋敷ではあるまいか」と思つたが、しかし左仲の屋敷へ入り込む事は却々難かしいから、何か事あれかしと待つてゐるところ、丁度三月三日の饗祭りの當日、暮れ酉刻時、大部屋では今日の節句を祝ふて盛んに十七八人の者が酒を飲んでゐる其の折しも、不意に「ヤン、ヤン、寺院の鐘はポーン、ポーン」と早鐘を鳴き出した、途端に戸外を走る大勢の足音、「〇、火事だ、火事だ、火事だ」と、言ふ叫び聲、これ聞き付けたる大部屋の連中は皆「ソレ、火事だ」と言ふより早く立ち上つて、各々梯子、鳶口杯を引擔いで戸外へ飛び出して見ると、火事は程遠からぬ長門町で、朝より吹き出した西北の風に連れ、焰々として炎は空を焦がし、火の粉を揉んで黒煙濛々、並び立つ大層高樓を唯一管に管め盡さん凄まじき火勢、櫻田下は眞赤になつて現世からなる焦熱地獄を現はした、當今違つて此の當時であるから瓦葺さ云ふものは誠に少ない、先づ大名屋敷位いなもので、大抵は板葺きに

なつてゐる其れがため火の手は益々風に煽られて盛んとなり、見る／＼間に三四丁も燃へ廣がつた、火勢は今しも櫻田の上杉屋敷へ迄及ばんといふ勢ひであるから、是れでは殿様もお立退きに成らねば相成るまいか、家中の面々は上を下への大騒動、大部屋の連中もソレツと言ふので部屋頭の指圖に従ひ四方八方に手分けをして火の粉を防ぐ、時こそ来れど羽衣國五郎は、火事を見る處の騒ぎではない、金兵衛及び隅田組の連中を引連れて國「サア今だ、皆續けツ」言ふより早く宙飛ぶ如くに黒川左仲の長屋へ乗込んで来たところか、此の時黒川左仲は火事の騒ぎに主人のお側へ出で、留守番をしてゐるのが高の知れたる下男や女中が四五人居るばかり、其處へ不意にバラ／＼ツと躍り込んだる十四五人、下男や女中共は火事の方に氣を取られて、唯あれ／＼と騒いでゐる内、ドカ／＼ツと飛び込んで来た奥の一間、お君は黒川左仲が主君の心に従ふ様に、宥めつ賺しつ責め立て、座敷牢の様の中へ入れてあ

る、其れへズツと這入つて来た國五郎、外は火勢ますます烈しくして、ウワーツツと女子供の叫ぶ聲、阿鼻叫喚の焦熱地獄國「オ、お前さんはお君さん、サア助けてあげますから此方へお出でなさい……、イヤ挨拶ごころの騒ぎぢやねエ、早く／＼と聲掛けられ、お君は地獄で佛に逢ふたる心地、夢中になつて駈け出して来るを五院の勘造が心得てお君を背負ひ國「ソレ引上げろツ」一同は、黒川の屋敷を飛び出して、お長屋筋をドン／＼ドン／＼逃げ出した、スル／＼早くも此の事を左仲の許へ注進したものが在つた見へ、火の粉の雨さ降る中を、黒川左仲が先頭となつて續く若武士三四十人、尙其の上に仲間足輕四五十人、各々袖捌、刺又、薙刀、槍杯を以つて、ドツと揚げたる鯨波の聲諸共皆曲者ツ御用だツ神妙にいたせツ……、シレ召捕れツ／＼ツ」さ云ひながら、國五郎始め一同の者をケルリさばかり取り取り巻いた、扱ては思つた國五郎、早くもお君を背負つた勘造を自分の背後に圍ひながら國「何を小

續な踰跟武士奴、憚りながら羽衣國五郎が手並の程を見せて道るから覺悟しろッ」云ふより早く一刀ズラリと鞘拂ひ國「エイッ……ヤッ」さ、群がり立つたる其の中へ、暴れ込んだる其の勢ひこれを、眺めて黒川左仲の連中も皆、ソレ斬れ〜ッ、斬つて仕舞へッ」さ、秋の薄か稻妻か、火の光りを受けて閃めき渡る太刀を振りかざし、ドツと喚いて斬り掛る。猪口才千萬なる腕立てかな、鑿殺した覺悟しろッ」さ國五郎は、薙ぎ立て〜勢ひ鋭く斬り込む凄まじさに、若武士の連中は思はず知らずバツと四方に散亂する左「エイッ取逃しては一大事、ソレ召捕れッ〜ッ」さ、聲を限りに下知を傳へて、又もや三四十人の人數を呼び集め、四方八方より隙間もなく刺又、袖褰みを以つて突掛つて来る、多勢に無勢で仕方がない、あはれ勘造はお君を脊負つてゐるがため第一番に打ち倒され、早くし躍り掛つた大勢のために高手小手に縛り上げ、左「ソレ續けッ」さ、云ふ左仲の下知に連れ、奥殿深くバラ〜〜連れ込

まれんさする様子であるから國「其れ遣つては相成らん、返せーッ」さ云ひながら金兵衛、國五郎の兩人は、踵を返して追つ駆けんさする此の時、前後左右より突き出したる突棒、袖褰み、或ひは投げ棒がために足を拂はれ、ドツと其れへ打つ倒れる處を、得たりと追ひ重なつた一同のために、到頭茲に國五郎を始め十四人残らず生捕りさなつた、幸ひ火事は屋敷より半町ばかり隔つた處で鎮火さなつたがため、無急〜、さ齒噛みをしてゐる十四人の者は、屋敷の内へ召捕りさなつて空家になつた長屋の一軒の中へ、釘付けにして打ち込まれてしまつた、モウ斯うなつては無念さ云つたつて殘念さ云つたつて仕方がない、お君は獨りで奥の方へ連れ込まれたが何うかして此處を抜け出る工風はないかさ、其ればかりを考へてゐるが、戸外には殿重に牢番が付いて居て、早速伺うするさ云ふ宜い手段もない、尤も勘造丈けは斯う云ふ處へ折々這入つてゐるので別に何んさと思つてゐないが、第一に國丸の國五郎、其他の者は氣ばかり急

つて頼りに残念がつて居る。

○主人上杉侯の身の上だ

牢番の隙を窺つて五院の勘造は勘一旦那樣、定めて御窮屈でございませうが、マア御辛抱なすつて下さい、其のうち此の位いの牢ですから直きに破つてお目に掛けます、他の事には餘まり役には立ちませんが、高の知れた大名屋敷の假牢位い破るのは朝飯前で、傳馬町の牢屋敷は何うしても破る事は出来ませんけれ共、是れ位いなら一遍に破れます」さ慰める、國丸はまた氣の毒に思つてゐるから國勘造、其方も今度は氣の毒であつたな勘何アに御心配なさいますな、私しなんぞが斯んな處へ這入るのは、一寸さ朝湯にでも這入る様な氣で居ります、しかし貴郎はお困りでございませう」さ、種々一同の氣を引立てる様な話をする、しかし此の牢を破つた處で、何んしろ上杉の十屋敷、是

れから戸外へ出るまでには二三ヶ所の門を越へなければ出られない、況て其夜から翌日一杯に掛けては、近火見舞さいふので上杉家では大混雜、中日置いて黒川左仲が、繩付きの儘國丸の國五郎を呼び出して、奥庭の處へ假りの白洲を立て吟味する左「コリヤ面を上げろ、其方は何處の者が、御當家近火混雜の折柄を幸ひに何れよりか紛れ込み、何か悪事を働かうとしたのであらう、眞直ぐに白状いたせ國黙れ此奴、悪事を働かうと云ふのは其方に覺へがあらう左「控へろ、全体其方は何處の者だ國聞き度くば云つて聞かす、俺は當江戸神田三河町にて小鳥屋をいたす羽衣國五郎と云ふ者だ左「其の羽衣國五郎が如何なる譯で混雜に乗じ邸内へ紛れ込んで居つた國「オイ、黒川左仲唯紛れ込んで居つた杯さ、然う白を切つたつて仕方がねエ、餘まり立入つて吟味をするさ、お前の主人上杉侯の身の上だ……ハ、ハ、ハ、驚くな、マア、二三日此の儘で置くが宜いや、お前の方でも宜く考へて見るが宜い、俺の方でも

少し思案のある云ふものだ」さ。調べられる者が却つて指圖をする勢ひ、仕方がないから黒川左仲も、其れでは此奴等の弱り入るまで待つて何か思案を巡らさねば不可ないさ。此の日は其儘再び假牢の中へ投げ込んでしまつた。處が早くも此の事を知つた天人小僧の新太郎は、其夜用事も果て、自分の居間へ歸つて来るさ。何處で何う工面をして来たか風呂敷に包んだ重箱に、三升も這入る徳利を提げて、秘かに奥殿を抜け出で、忍び足に牢番の詰所まで歩つて来た新「これは皆さん御苦勞でございます 甲「へえお前さんは……新「エ、私しは萩江様の處に御奉公をして居りますお新さ云ふものでございます 甲「其れで今頃何か御用ですか 新「ア旦那様が被仰いますには、定めし牢番の者共も大儀な事であらうに依つて、お上へ内々ではれを下さる、其方持つて參つて飲ませて遣はす様にさ申されました、サア早く召飲れ、器物を此處へ置くさまた見廻りの役人共が來て矢釜敷い、然うなるさお前方ばかりの迷惑で

はない、旦那様のお名前まで出る様になりますから、何うか氣を注げて下さい 甲「へえ左様でございますか、承知いたしました、へえ何うも御馳走様で……エ、同役、お局様から下さつたのだ、お戴き申します」さ、何しろ對手は女と思つてゐるお新の言葉、随分これは油断をする 皆「頂戴仕様、何うも御馳走に相成ります」さ、風呂敷を解いて重の蓋を開けて見るさ、上が鹽焼で中が煮付け、下の重には刺身、酒は劍菱の上等が三升、三人の牢番は舌鼓みを打つて皆「左様なら頂戴いたします……エ、貴女がお酌を、是れは何うも恐れ入りました、有難うございます、エ、同役、有難い事だナ、頂戴仕様」さ、お新の酌でグイグイ飲み始めたが、家中一般で評判の小間使ひに酒を勧められるのであるから、モウ三升の徳利が空になる時分には、牢番三人が呂律も廻らぬ様になつて、皆其處へ酔ひ倒れて仕舞つた新「モシグお前さん、グウグ寝てしまつて、夫れではお役が勤まりますまい、酒は飲んでも起きて居て下さい

甲「ウーム、ゲアツ、マア宜しうお頼み申します、何うか介意ないで……、新「見廻りの役人が来たら、お前さん方が役目の落度になりますよ乙「落度になつても介意ません……イヤモ、モウ飲めん、此奴は宜い心持ちに成つて来た花アの……ツンク」グウノ高野きて、三人ながら他愛もなく其れへ打つ倒れ寝入つてしまつた、仕合せよしと四邊に眼を配つた新太郎のお新、足音靜かに假牢の前の處へ出て来たが、固より牢番の居る處さは四五間も離れてゐる新「モシ、親分はお在ですか、新太郎でございます」此の聲を聞き付けた國五郎「オ、新太郎か、今頃何うした新「へエ、今此の牢からお出し申しますから、其のお心算で何うかお靜かに願ひます國「ウム然うか、頼むぞ勤「天人か内裡手傳をうか新「オ、五院の兄イ、宜いよ、俺一人で大丈夫だ國「しかし新太郎、今日大工を呼んで錠前を付けた筈だぞ新「御心配には及びません、斯んな事になつたら私しの得意です、紙よりが一本あれば錠前の三つや四つは屹度

開けます」云ひながら新太郎は、懐中から用意の紙よりを出して暫らく錠前の處に手を當て、居つたが、何う云ふ工風にしたものか、瞬く間に錠を外して戸を開いた新「サア皆さん、お一人宛順々に出て下さい」十七人の者は足音を秘めてゾロリと牢内を抜け出した國「しかし新太郎これから大勢が此の屋敷を出るのは容易であるまい新「イエ其れも私しに少し考へがございます、大抵今夜と思つて居ましたから仕度も出来て居ります」さ、横手の方から取り出して来たのは定紋の付いた提灯に、黒川と記しの入つた法被が二枚、手早く二人にこれを着換へさせて、跡の者には何かそれ／＼云ひ含め「足先きに新太郎が法被を着せて提灯を持たした二人の者を連れ、通用門の處へ歩つて来た、残りの者は門の小影に身を秘めてゐる新「アノ門番さん、お願ひ申します番「モウ、是りや奥のお新さんかい、此の夜更けに何處へ……新「アノ一寸と旦那様のお使ひで前町へ行つて参ります、旦那様が急いで参れと被仰いますので、御

門券を忘れて参りましたが、お供のお方を二人借りて行きます故、何うか通して頂き度うございませす」云ひながらズツと中へ這入つて帯の間から、紙に包んだ二朱金一個、秘さ門番の手に握らせるさ番「斯んな物を頂きましては濟みません新」マア「然う云はないで取つて置いて下さい」杯と男女が押問答をしてゐる間に、豫て法被を着せて提灯を持たせた二人は表口の處に立つて内裡から外の見へない様にしてしまつた、其の間に残りの十人餘りの者は、忍び足にズツと通用門から戶外へ出る。○「サアお新さん参りませう、餘り遅くなつては不可ませんから」さ、云ふのが一同出て仕舞つたさ云ふ合圖の言葉新「何うか其れではお願ひ申します、直ぐ歸つて参ります番」へエ「何うかお通りなさい、有難うございませす」さ、斯くして天人小僧の新太郎も二人の者と共に戶外へ出る、虎の口を逃れた様な心持ちで、一同は始めてホツと一息ついた、國「ソレ愚圖くしては、不可ない早く歸れ」さ云ふので、漸やく打ち揃つて

夜中ながら神田三河町の宅へ戻つて來た、此方は阪倉屋を始め上總屋、隅田組の連中は國五郎其他の者の居所が判らなくなつたから、諸方へ手分けをして尋ね廻り、大きに心配してゐる處へ、首尾よく一同打ち揃つて歸つて來たので、始めて愁眉を開いて喜んだが、新太郎の話しを聞いて見るさ、隣れお君は黒川左仲の家で、一層嚴重な檻禁を受けてゐる様子、是れは何うして助け出すが宜からうさ、一同の者は種々に胸を痛あながら相談をしてゐる、

○雀の宮松並木の 大活劇

日本六十余州二百六十餘大名の参勤交代と云ふのは、大抵一年交代であるが、しかし各其家に依つて参勤の月が違ふ、そこで米澤の上杉侯は毎年四月に出府して翌年の四月にお暇となつて國表へ歸る事に定めてあつた尙大名が國へ歸る時には奥方は同道する事の出来ないもので、何うしても是れは江戸

表へ置かねば成らぬ、夫れは何故かといふと徳川三代將軍家光公の時から、萬一徳川家へ弓をひく者があつては成らん云ふので、所謂人質として江戸へ置く事になつて居た。三代將軍以來十五代慶喜公の御世迄、奥方が領主と共に國表に居られたのは、但馬の出石仙石家丈けであつ、是れまでも代々云ふ譯ではない、仙石播磨守の時代丈けで、此の播磨守の奥方云ふのは大老酒井侯の娘で性來御病身な處から但馬の城崎温泉へ入浴といふ願ひを上げ、然うして國許に居られた。其他の大名は皆江戸表に奥方を置いて國の方にはお妾を寵愛される、時は元祿八年四月、上杉侯は參勤の期満ちて愈お國許へ引取られる事になつたから、家臣の黒川左仲を召して上左仲、予は國表へ彼の君なる者を同道いたし、如何にもして予が初一念を貫かうと相心得るが何うであらうと、仰せられたから黒川左仲左ハツ委細畏ま奉つりる、併し乍ら女姿の儘にては到底お供をいたさせる事は出来難く存

じまする故、彼れをば御道具の中なる御長持に押入れ、お國表へお連れ遊ばして彼れを納得せしめたならば、遂には剛情なる彼れも上のお心に従ひませう彈「ウム、萬事其方宜きに取計らへ左、畏まりました」と、是れで萬事は黒川左仲が取り行ふ事になつた、其處でいよく四月九日上杉侯はお國入りの當日となるさ、黒川左仲は自分の屋敷に隠してあつたお君を引出し、食事其他の手當ては充分にして、お君を長持の中に押入れ、殿様のお手道具と云ふ風に見ひ掛けて、自分は江戸詰であるからお供はしないが、例の如く立派なる供揃へで櫻田の上屋敷を御出立になつた供「エイツ下アにくツ、下に居れーツ、エイホウくツ」と、先觸れの聲を嚴めしく響かせながら、江戸の春を跡にして行列は次第に領地なる羽州米澤を差して進んで行く、然るに物事は隠す程は顯はれるで、黒川左仲唯一人で殿様へ相談の上お君を長持の中へ入れたのであるから、御近習小姓、其他の者も誰れ一人此の事を知つてゐる者

も無かつたが、此の長持を擔ぎ出すのは三部や手廻り名付けたる人足、及び
 大部屋の者ばかり、何んしろ往昔の人足と云ふのは、物を擔いで己れの生活を
 してゐるのだから、誰れに教へられたと云ふてはなく、肩に載せれば是りや水
 だまか是りや土だまか、或ひは金だまか動物だまか、自然に得た経験がある、
 是れが爲め其長持を運んだ人のうらに、ハ、ア是りや的切りお君を入れてゐ
 るに相違ないさ、早くも勘付いたのは豫て上總屋金兵衛から入れてあつた者で
 此の者から早速三河町の羽衣國五郎方へ此の次第を知らせて來た、其處で國
 五郎も考へた國「上野成昌院で將軍家より内々頂戴したお墨附を振り廻し
 水戸光國卿のお力を借りてお君を救ひ出す事にすれば何んの造作もない譯だが
 先達て上杉の上屋敷なる假牢を破つて大勢が逃げ出した後、鼈蛇になると思つ
 たさ見へて別に上杉家から何んの掛合もない位い、其れや是れや考へて見る
 と、其の手段にするさすれば上杉の一家に達人を大勢出して、一方阪倉屋の方

へも多少の迷惑が掛るに相違ない、夫れでは餘まり力が無くなつて仕舞ふ、是
 りや何うでも斯うでも將軍家や水戸侯のお力を借りないで、國五郎が腕一本で
 お君を救ふて遣らうと、斯う考へたから國五郎は、五院の勘造、天人小傳新
 太郎、上總屋金兵衛、其他隅田組の者にも相談した結果、各々道中商人、
 俳諧師或ひは奥州見物の旅人六十六部杯さ様々に姿を變へて、チリ／＼バラ
 ーに江戸表を出立し、上杉侯の同勢の後になり先きになり、只管ら其の
 時機と場所を考へてゐる、同勢の道中は奥州街道、江戸より千住、草加、
 越ヶ谷、粕壁、大澤、それから杉戸を越して栗橋、此の栗橋から中田へ行く間
 に江戸を離れて初めてのお關所がある、その關所の前に川があつて船渡しとな
 つてゐる、渡船を向ふへ渡ると中田、中田から一里半ばかり行くさ下野國、
 相賀土井大炊頭の領地で、此の相賀の城下を去る二十九丁の處が野木田、それ
 より麻々田、小山、小金井、石橋、雀の宮、雀の宮を越すと向ふが宇都宮だ

ところが上杉侯の同勢は此の道中筋雀の宮までは何んの變つた事もなく、相變らず先觸れの聲を掛けて○「下アに、エイホウツ」を、行列殿しく進んで来る、間もなく雀の宮を越して前後一里何十丁と云ふ松並木に差し掛つて来た、この松並木は有名なる鍋懸ヶ原に續いての大並木、今しも此の松並木の中央に差し掛つて、陽炎燃ゆる松の木の間より、一文字笠の見へつ隠れつ二百何十人の同勢は金紋先箱両掛け杯を前にして○「エイホウツ」を進んで来た、スルさ此の時行列の横手なる、大松の木蔭に立つた一人の男身には南無妙法蓮華經と墨痕あざやかに記して諸方の寺院や寺社の朱印を捺した白の着物に、白の股引草鞋穿き、白木綿の帯に金剛杖を持つたる身延参りの風体の者が、少しく行列を遣り過して置いて、懐中探つて取り出したる呼子の笛、口に含んでピエウツピエウツと吹き立てたる此の途端、一丁ばかり向ふの方に行き過ぎたる越中富山の薬屋風体の者七八人、續いて十四五人連れなる奥

州見物の道者、各々揃ひの印しある胸當に、眞鍮胴輪の道中差し、或ひは菅の一文字笠に引廻し合羽を着したる者合せて凡そ七八十人の者が、ソレツと云ふなりバラ／＼とツと行列の前方牛丁ばかりの處に駆け集まつた、上杉家の同勢は是れを見て、コハ何事と思ふ間もなく、ドツと喚いて一同の者は、各々長刀の鞘を拂ひながら、無二無三に行列望んで斬り込んで来た、ハツと驚いた上杉家の同勢○「是れは怪しからぬ狼藉者、米澤十五萬石上杉侯の行列と知らぬかつ、控へろツ」と大喝一聲怒鳴り付けた、處が此方眞先に立つた羽衣國五郎、南無妙法蓮華經の白衣をバツと脱ぎ捨て、脚絆を外す下には結城紬の袴に献上博多の帯を、滑皮の襪に手拭を以て、向ふ鉢巻、盲紺の股引に盲紺の脚絆、切緒の草鞋と云ふ身輕の扮装、大劍の鞘を拂つて大音聲國「ヤア狼藉者とは何んの痴言、江戸は公儀のお膝元お藏前の札差町人阪倉屋の娘を誘拐した大盗人それでも十五萬石の上杉か、江戸

は神田三河町羽衣國五郎が其のお君を取り返すがために、此の倉の宮の松並木で待つて居たのだ、お君を此方へ渡せば宜し、何うでもお君を渡す事が出来んさならば、腕盡くでも取つて見せる、氣の毒ながら十五萬石、上杉の家名に係る一大事だ、性根を定めて返答しろ ○「ウム、扱てこそ江戸を出立の際黒川殿より御注意があつた、各々御油断召さるなツ、して狼藉者を片つ端しから召捕つてしまへツ國」何を小癪なツ、ソレツ」さ云ふなり一同は、大刀手ン手に振り冠つて、上杉の同勢が其の中へ面も振らず斬り込んだ。

○ヤア黙れツ木葉武士奴

此方上杉家の同勢も、モウ斯うなつたら仕方がない ○「ソレツ手に餘らば斬つて捨てよツ、殿様にお怪我があつては一大事、近寄る者は一人も残らず斬つて仕舞へツ」ツ、大喝一聲傳へた下知に、お駕籠脇なる同勢は是れ又ギリリ

さ大刀の鞘を拂ひ、踏み込み來る七八十人の者を對手にして、駕籠を背後に圍ひながら、チヤンノ、チヤリオン ○「エイツ……ヤツ……」と掛け聲も凄まじく茲に双方入り亂れての大戦 ひまなつて來た、斬りつ斬られつ追ひつ追はれつ、閃めく及ば秋の薄か稻妻か、飛び散る血汐は日の光りを受けて虹の如く見る／＼間に四邊は一面の唐紅い、打ち合ふ刀は火花を散らして戦ひは今將に酣はまなつて來た、さころが何んしろ向ふは羽州米澤十五萬石の上杉家、家柄の古い丈け宜い家來も澤山にある、殊に道中警固のためとあつて、選拔された劍客其他の勇士揃ひ、此方は羽衣國五郎を始めとして人數は僅か七八十人勇氣はあるが腕の立つ者が少ない、其の上上杉家の家臣を惱ますのは目的でなく、唯お君を取り返しさえすれば宜いのだから、國五郎杯は長持ばかりを目掛けて彼方此方と駆け廻つてゐる、其のうちに衆寡敵せず次第／＼に斬り立てられて、七八十人の者は無念殘念と齒齧みをしながらツリ／＼と後退りを始め

た國「ヤアツ皆の者確乎りしろツ、ソレ踏込め〜」と、味方の者を勵ましな
 がら、眞先きに立つて上杉の同勢を右左りに斬り立て薙ぎ立て、一生懸命に
 働いたが、身は金鐵ならぬ悲しさに、少しく腕に疲れた覺へて來た國「這は
 殘念なり」と思ひながら、隣れ次第に背後へ下つて來様とする此の折しも、向
 ふの方より韋駄天走りに、宙飛ぶ如くに駈け付け來つたる一人の武士此の有様
 を見るよりも被れる笠を其れへ脱ぎ捨て、手早く懷中から取り出した白滑皮
 の襪を十字に綾取り、手拭を四つに疊んで後鉢巻ッロ〜四邊を見廻して居
 つたが、バラ〜ツと駈け寄つたのが長さ二間、幹の圍り一尺五六寸もあらう
 と云ふ一本の松の木、是れへ手を掛けるや否武「ウームツ」と一聲力を込め
 て引抜くと地は一間ばかりメリ〜ツと割れて難なく根こぎにしてしまつた、
 武「オ、是れで宜し」と、云ふより早く其松の根方を持つて、群がり立つたる
 上杉家の同勢の中へ、物をも云はず躍り込み武「エイツ……オウツ……」ビユ

ーツビユーツと水車の如く振り廻したから堪らない、見る〜間に十人ばかり
 の武士は、足を折られ手を挫かれ、或ひは臍天を打ち碎かれ、悲鳴をあげて
 パツタ〜と打ち倒れる、此の激しき勢ひに流石の上杉の同勢も、思はずサツ
 と足を引いた○「ヤア何奴なれば此の處へ來つて、斯く狼藉なる舉動をいたす
 のであるか、見れば其方武士の風体をいたしながら、曲者に助太刀をいたすこ
 は何事だ、何者なるか姓名を名乗れ 武「ヤア黙れ木葉武士奴、左まで名前を聞
 き度いさあらば、名乗つて聲かせるから耳の穴をほじつて能つく聞け此方事
 は今彼方に羽衣國五郎と名乗りし尾張家の落胤國丸君の臣下さなり、御
 恩を受けた天下の旗本石川八左衛門の一子、石川八太郎義宗である」と、名
 乗るを聞いて國五郎の同勢は、ソレ石川が來た八太郎が來たさ一同大層な力
 を得た心地、さころが上杉の方では特別に徳川の旗本陣中さば仲が悪い○
 ソレ石川八左衛門の一子八太郎だ、斬つてしまへツ」と云ふので、十四五人の

若武士は、ドツと喚いて石川八太郎唯一人をグルリと取巻き、四方八方より斬り込んで来る「何にッ猪口才なッ」八太郎は、例の松の木を振り廻しながら、近寄る者をバタリ〜と殴り倒し、茲に再び新手を増した大修羅場なつて来た、其のうちに上杉家の同勢は、殿にお怪我があつては相成らんさいふので、人足共を指揮してお乗物を昇がせ、お君を押し入れたる長持 諸共四五十人の家臣の者が警固して、ドン〜ドン〜宇都宮の城下へ擔ぎ込んでしまつた、然うして置いて上杉家より、宇都宮の城主奥平大膳太夫に對して、主人上杉彈正大弼今日日國入りの途中、當城下外れなる松並木に於いて狼藉者に出逢ひ、難儀仕るに依り何卒御人數御繰出しの上御助勢願ひ度う存するを頼み込んだ、奥平家に於いても同じ大名の事ではあり、殊に城下近くで狼藉者等ありては甚だ穢かならぬ事であるさ云ふ處より、家老奥平大膳は目明し或ひは足輕二百人ばかりを従へ、捕物道具を持つてワツと松並木を

差して乗り込んで来た、是れを眺めた羽衣國五郎、石川八太郎其他の者は、皆斯りや不可ん、ソレ今日は此の儘引上げるツと云ふので、茲に一同の者は思ひ〜に道を轉じ、江戸街道の方へ眞直ぐに引取るものもある、或ひは松並木の間を潜り抜けて野道畑道の差別なく、ドン〜ドン〜思ひの儘に散亂する、國五郎、八太郎、勘造、新太郎、金兵衛等五人の者は、此處を跡にして宇都宮の在なる平澤村平澤明神の森の中へ引上げ始めてホツと息をつき、國五郎は石川八太郎が今日の企てを聞いて態々乗込み助勢をして呉れた禮を述べ、一同聊かながら手傷を受けてゐるから其の手當てをして後、再び五人の者が額を鳩めて善後策を講じる事となつたが、此の上は一層羽州米澤の城下へ乗込んで、意地としても彼のお君を取返さねば相成らぬ、就いては其手障さして斯様〜と、各々其計略を廻らして愈々茲に一同は、進んで虎穴に入る事となつた、一方上杉彈正大弼はモウ敵方の者は残らず何處へか引揚

けてしまつたき聞いて大いに喜び、家臣の死骸は奥平家へ頼んで假りの葬ひを
なし、怪我人はそれ／＼手當てをなして新たに奥平家の好意に依り、警固の
ため付けて呉れたる藩士に送られて、無事羽州米澤へお國入りとなつた。また
羽衣國五郎の同勢のうち、三人ばかりの死骸は是れも奥平家で叮嚀に取
納め、宇都宮城下の法禪寺さいふ寺へ無縁佛として葬むられた。處が無事お國
入りとなつた上杉彈正大弼は、早速家臣の者に申し付けて長持の中より彼
のお君を引出し、奥殿深く連れ込んで日夜自分の意に従ふ様説き付けたが、
お君の方では早や定まる良人もあり、且つ親の許さぬ事だ云ふので、何うし
ても上杉侯の言葉に従はない其處で上杉侯も今はホト／＼持て餘して彼の江
戸詰めになつてゐる黒川左仲に對し改めて國詰めを命じ、自分の手許へ召し寄
せて左仲にお君を預け是れから更らに説き落さんとしたが、黒川左仲は主人の
命に依つて江戸表より米澤城内に來り、お君を預かつて朝晩に何か云ひ聞

かす、時に依つては手荒い折檻、是れかためお君も今は早や日影待つ間の朝顔
の如く、日夜たゞ嘆き悲しむばかりにて、聲は立てぬぞ咽返る、涙に外をしの
ぶ摺、素れ苦しき啣のみ、嗚呼佳人薄命の言葉も亦偽りではない、

○根比べをいたして遣るのだ

春さは云へど朝夕はまだ寒風の絶へ間なき、山には尙ほ白雪の消へやらぬ、出
羽國、今日は殊更ら北風烈しく梢を鳴らす或る日の朝、相變らすお君を側に引
出した黒川左仲「何うぢや君、此の左仲がまだ江戸表に在る頃より、嚙んで
含める様に其方へ説いて聞かせるのに、我意を張り通して御殿様の御言葉に従
はぬが、江戸表に居つてさへ籠の鳥同様、當米澤に其方を連れ歸つた上か
らば、何幾剛情を張り通したきてモウ不可ぬ、今日にても其方が御殿のお心に
従ひさへすれば、お部屋さば云へお國詰の身のうへ、奥方さへも凌ぐ勢ひさな

り、十五萬石の家中に敬はれる身の上にならうと云ふのぢや、まだ是れでも殿の御意に従はぬか君「ハイ、お言葉は有難うございますが、親の許さぬ夫定め心の許さぬお方に肌を觸れる事は何うぞお許し下さいます様左「然らば其方は何うしてもお心に従はぬな君「ハイ、是ればかりは被仰る丈けが御無用にごさいます左「ウム憎くい女奴、然らば殿の御意に従はぬでも宜い、だが黒川左仲も武士だ、刀の手前一旦斯うと云ひ出したからには、此儘其方を許して親元へ歸す事は罷り相成らん、拙者も殿に申譯けなき次第であるから、其方の身体が骨になるか、此の左仲の一命が終るか根比べをいたして遣るのだ然う思へッ」と、云ふより早く持つたる銀の延煙管を以つて、お君の肩の邊りを發止と打つた君「アレツ御免遊ばせ」と、泣き入るお君の鬢を取つて疊に顔を擦り付け、左「サア何うだ、御免許せよ云ふなら御殿のお言葉に従ひ、今日よりお妾となつてお側に上るか君「イエ、是ればかりは假令へ何んぞ被仰つても

……左「さ剛情な奴め、然らばこれでもかく」と、お君の襟首を丁々ど打つ黒川左仲、打たれるお君、宛から満開の牡丹の花が、嵐に散つてまさに落ちなんその風情、たゞ君「御免……、お許し」と、泣き入るお君の鬢を取つて、情け用捨も荒々しく、引摺り廻す黒川左仲左「サア是れでもお受けいたさるか、剛情い女奴ツ」と、帯を解いて裸体となし、雪の如き腕を逆手に捻じあげて細帯にて括り、ズル／＼ツミ庭へ引下して向ふの雪見燈籠の足へ固く縛り付けた左「サア、斯かる憂目いたしても、まだ其方は御殿様の御意に隨はぬか、お君はあまりの事に言葉も出でず、唯ヒイ／＼悲鳴をあげて泣くばかりあはれ嵐の許の梨花一枝左「其處で能く考へて居れ、今に其方の身体は凍へて来る、其の時心得違ひを悟るであらう、ア、斯うして居つても寒くなつた」と、流石の黒川左仲もお君の剛情には手古摺つたから、今は言ひ聞かせる處ではない一思ひに殺して遣らうかと迄憎んで来た、障子をヒタリと閉めて黒川左

仲、部屋へ這入りながら勝手元の方を何心なく覗いて見ると、豫て左仲の屋敷へお針で奉公に来てゐるお留と言ふ者の娘が、何か母に用事があつたから勝手の方へ来て母親のお留と頻りに話してゐる様子左「ハテナ……」と首を傾けた黒川左仲、今奥庭で折檻して来たお君さば、似たりや似たり瓜二つの娘、年さへ同じ十七八、唯髪の容ちや衣服の似合が變つてゐるばかり、目の迷ひかど再び障子の間から覗いて見ると、何れ菖蒲がかきつばた、引きぞ煩らうその姿左「ウーム、……」と左仲が考へたのは、早や日を重ねてお君を種々ぞ宥め賺して見たが、何うしても聞き入れる様子なくと云つて主人に是れ／＼で手に合はない杯と云ふ事も云へない處から、不圖此娘を見て考へ付いた皮肉の計略、自分の部屋へ戻つて来た左「コリヤ、誰れか居らぬか」出て来たのは一人の小間使ひ小「ハイ、何か御用でございますか左「アノお留を一寸と叫んで呉れ小「ハイ畏まりました」と、立つて行く間もなく其れへ這入

つて来たのがお針のお留留「ハイ、お呼びになりましたのは何か御用でございますか左「ア、留か、外ではないが最前から那れに參つて居るのは其方の娘か留「ハイ、左様でございます左「那女は只今何うして居るのだ留「別に何うして居ると云ふ譯ではございません、妾しが良人に死別れましたから、獨り娘の事でございますから、何うかして好い婿を買つて遣り度いと思ひますが何分妾しが御當家様へ斯うしてお針に雇はれてゐる様な譯で、思ふ様にも參りませす、只今では妾しの少し親類の宅へ預けてゐるのでございますが、可訝な事にないうちに何んさか身の始末もつけて遣りたいさ、娘を持つた親心それには苦勞をしてゐるのでございます左「ハ、ア然うか、何んさ云ふ名ぢや留「お辰さ申します左「年は……留「へエ年は今年十八才になります左「左様か、其れでは今別段に奉公をいたして居るといふ譯ではないな留「イエ別に奉公と云ふではございません左「ぢや當家へ呼び入れては何うだ留「有難うござい

ますが、田舎育ちで行儀作法を……左「イヤ苦しうない、此方にも少し思ふ仔細があるから、是非當方へ呼ぶが宜からう留、左様なれば早速申し傳へます、那女も嘸喜こぶ事でございます」さ、茲にお留は娘のお辰を小影へ呼んで、留、お辰、御當家の旦那様が斯くく被仰る、固よりお前の姿や容貌を見て仰せられるのであらうと思ふ、御當家の旦那様はお殿様の大的お氣に入り御家老様方ですへ御遠慮なさるさ云ふ位のお方、萬一旦那樣のお手が付いてお妾さなれば尙更ら幸福、奥様は先年御病死をなすつて、まだ後をお迎へにならない御當家様であるから、暫らく辛抱して見るが宜からう」さ、おさめは、娘のお辰に向つていろく説き立てる、素よりお辰は娘心に、宜い着物ださか宜い持物に氣を奪はれる無教育な女、一も二もなく承知したから、早速其夜お辰は黒川の宅へ引移つて来た、心中秘かに期する處がある黒川左仲は大いに喜び、おさめに申し付けて立派なる着類、或ひは頭物から履物にいた

る迄残る方なく買ひ調べさせ、風呂に入れたり髪を結ひ直させたり、及ぶ限り黒川左仲が指圖をして磨き立させる、玉磨かざれば光りなして、磨けば綺麗になるのは素よりの事、風呂から上るさスツカリ化粧をさせ、今迄お君が着て居た様な衣裳をお辰に着せて、晚酌の酌に招いた黒川左仲が、様子を見るさ全くお君が酌をしてゐるさしか思へない、其の上に化粧を美しくしてゐるから一段好い嫵緻に見へる、朝晩お君を手許に置いて見て居た黒川左仲の目にも、瓜を二つに割つた如く、見擬ふばかりに能く似てゐる。

○何も彼も娘の心次第

吾が事成れりさ心中秘かに領いた黒川左仲、他の女中や其他の者を遠けて置いて、母親のお留さお辰の両女を前にした左、扱て辰、お留も娘の事であるから能く拙者が云ふ事を聞いて呉れ、辰、其方には誠に身に餘つたる果報を此の黒

川左仲が執持うと思ふのぢや、就いては其方の心を尋ねるのであるが、當御殿様は、江戸表に於いてお抱へとなつたるお妾も一人二人ではない、然るに肝腎當上杉家を御相續なさる御男子御出生更らになく、上下共に是れには大いに心配いたし居る次第、是れ故更らにお妾として婦人を尋ねに相成つて居たる處、斯く云ふ左仲が豫てよりお預かり申し上げてゐる江戸淺草藏前の札差し町人にて、阪倉屋甚兵衛の娘君さ申す者、何程此の左仲が意見に及んでも御殿様の御心に従はず、左仲も誠に残念さは心得るが是れも致し方がない、依つて御殿様にも甚くお心を遣はせられて居るのである、就いては其方に少し頼みさ云ふは、其方が今申す阪倉屋の娘君さ相成つて御殿の御側へ罷り出でお心に従ふて呉れるか何うぢや、只今拙者が申せし事を生涯云ひ出さで償んでさへ居れば、其方の立身出世は申す迄もないが何うぢや」と、言葉を盡して説き立てた、處が素より人間は慾の動物で、年若い娘杯は當今の言葉で

云ふと随分虚榮心さいふものがある、お辰も根が卑しい身分の女であるから良人を持つとした處が中等以下で、少し宜いのが先づ武士で十五石二人扶持位のものだ、それが黒川左仲の言葉に依る自分の標緻にて圖らず十五萬石の大名の心に従へさいふ、往昔の事であるからお行列は拜んでも殿様のお顔は眞正面に見る事が出来ないさ云ふ、誠に人爲的階級のあつた時に此の話し、殊に十五萬石の家中一般が心配してゐるのが、自分の心一つで何うにでも成らうさいふのだから、夢ではないかさ喜こんだのも無理ではない辰「お話しを承はりまして委細承知いたしました、何うぞお心任せに遊ばして下さいまする様妾しに置きましては何れなくとも宜敷うございます左「ウム早速の承知で此の左仲も誠に喜ばしい、しかしお留其方の考へは何うぢや、其方さても娘の出世、大抵承知の事と思ふが……留「ハイ、イヤモウ妾しは何も彼も娘の心次第、何うか宜敷うお願ひ申します」さ、是れも一言の許に承知した、そ

こで左仲に「左」然らば斯うして那アして……」と、萬事お辰とお留の兩人に云ひ含め、其夜のうちに彼の阪倉屋の娘お君は、秘かに黒川左仲が斬り殺し、死骸は庭の片隅に埋めてしまつたあはれ可憐の少女お君の亡魂は、何處の空に彷徨うやらむ、思ひ遣るだに悲痛の極みであつた、斯くして黒川左仲はお辰を手に許に置いて、二月ばかりの間に行儀作法を大略教へ込み、漸やくお君が御殿の御意に随ふ様になつたからと、換玉のお辰を上杉侯のお側へ差し上げた、スルと流石の上杉侯も餘り能く似て居るものであるから、これが換へ玉であらうとはお氣が注がない、初一念を貫いたさいふお喜びより、日夜お側を離さず寵愛されて「彈」君よく、」と可愛がられる、母親のお留も此の後はお針奉公をサラリと止めて、黒川左仲の屋敷に町重な扱かひを受け昨日にかはる結構な身の上となつた、人盛んなる時に天に勝つさか、罪なき人を殺し厚恩を受けたる主を欺き、只管ら自分の榮達をのみ心掛けて居た黒川左仲、惡運ある時は仕

方のないものか、唯此の事丈けで加増するさいふ譯には行かないが、聊かの事をお賞めになつては上杉侯より百石の加増、また二百石の御加増と、僅か五百石の用人から今では千二百石の高祿を頂いて、家老次席お側御用人筆頭さまで経登つた、然るに此の間にも彼の羽衣國五郎等其他の者は、何うかして阪倉屋の娘お君を奪ひ返したいと、秘かに米澤の城下に入り込んで辛苦をしてゐるが、流石に對手は米澤十五萬石、上杉謙信公より連綿たる家柄であるから、何うしても城中へ忍び込む事が出来ない、よし忍び込む事は出来るにしても、普通への事をして居れば到底も奥殿深く入り込んで行く手段がない、手を換へ品を換へて善後策を講じて見たけれ共、江戸屋敷杯とは違つて嚴重なる米澤城、唯櫓の方を見上げて無念の齒噛みをするばかり、是れでは到底米澤の城下では目的を達する事が出来ないから、寧ろ今度の參勤で江戸へ乗込む其の途中、再び雀の宮邊りで同勢の中へ斬り込み、騒ぎに乗じて奪ひ返さ

んさいふ準備をなし前回の失敗に省みて充分な手配りをした、スルミ早くも是れを悟つたか杉弾正大弼は、公儀へ病氣の届けをして參勤を一ヶ年延期して貰ふ事にしてしまった、是れには流石の羽衣國五郎も手を出す事が出來ない、依つて茲に百計盡きたる最後の計、一同に相談の上で再び手を分か羽州米澤の城下へ一人二人づゝ、目に立たぬ様乗り込んで来た、又一方米澤城中に在つても茲に一つの隱雲が漂ふ事になつた云ふのは、彼のお君の換へ玉に上つたお辰が、城中へ上るに其の月より懷妊、月満ちて生れ落ちたのが誠の玉の如き男の子、上杉弾正大弼の喜びは如何ばかり、名を辰之丞と命じて這へば立て立てば歩めの親心は、上下ともに變りはない、殊の外喜ばれてお辰の爲めに假親となつて居る黒川左仲には、特別を以つて二千五百石の大祿を賜はり、お負けに家老の末席に列せしめられた、尤も此の黒川の家まで全く名もなき者ではない、永祿の昔川中島に於て武田信玄が車懸りの

堅陣を、上杉家の先祖謙信が小豆長光の陣刀を揮つて單騎武田の本陣へ乗込み難なく打ち破つた時に上杉家で徒士頭を勤めて居たのが黒川五郎左衛門と云つて、是れが即ち黒川左仲の先祖だ、なれども高が徒士頭の家から家老の末席に列せらるゝに至つたのは確かに異數の出世に違ひない、故に黒川左仲は一層上杉侯に對しては、粉骨碎身忠誠を盡す可きであるが、何んぞ圖らん黒川左仲は、豫てお部屋お辰を人目を忍んで不義をしてゐる身の上であるから、お辰の産けた辰之丞は上杉侯のお胤であるか但し黒川左仲の胤であるか判らない、處が人間の慾望には限りのないもので、寵を得て蜀を望むは人情の常さば云ひながら、淺ましくも茲に黒川左仲は、専ら自分の子と信ずる辰之丞が、一日も早く上杉家を相續して、自分はお辰と共に榮耀榮華に暮りたいといふ志しを起し、就いて第一邪魔になるお側の忠臣を退けねば相成らぬと、秘かにお部屋お辰と申し合せて、お家に對し誠忠の武士は、片つ端しから讒言をかま

へて身を退けさせる、是れを憂ひて諫言をする者は、御不興を蒙つて閉門なつたり、或ひは知行を取り上げられたりする、亦中にはお手討ちになつた者さへある位い、不遇に泣く忠臣、冤罪に泣く義人はこれがために數知れず、此の儘で押し移つたならば米澤十五萬石の上杉家も或ひは慘膽たる終りを見んばかりの有様となつて来た、

○貴様のは力で俺のは竹篋だ

茲は羽州米澤の城下茶屋町なる、中野屋市兵衛と云ふ小料理屋へ今しも又ツと這入つて来た一人の武士、背の高さは五尺七八寸、朱鞘の太刀を横へて草履穿き、黒紋付の着物に小倉の袴、城内の人とも見へないが去りさて亦旅武士とも見へない武「許せよ」スルと亭主の市兵衛市「へい入らつしやいまし、何うぞお上りなすつて武「イヤ、拙者は此處で宜い市「エ、お誂らへは何んにい

たしませう武「酒ぢや市「へエ、お肴は何ういふものにしたしませう武「然うぢやな、吸物に焼いた物さ、其れから何んか刺身が出来るか市「出来ます、直ぐ拵へます」聽て亭主は其れへ酒肴を持って来た、彼の武士は三品ばかりの肴を前に置いて、大きな湯呑でガブリノ、さ飲つてゐる、折りしも其れへ又ツと這入つて来たのは、例の黒川左仲の家來で成り上り、今では用人を勤めてゐる野村源藏と云ふ奴、主人は二千五百石で家老席に列なり、同座御免で殿様の御寵愛ふかく、お部屋お辰の方の假親として威權並ぶ者なき黒川左仲、其れの家來であるから何處さなく高慢お顔をしてゐる市「オ、是りや小林の旦那入らつしやいまし源「何うだ市兵衛市「へい、先づ何うか奥へ源「イヤ今日は然うして居られない、旦那の御用で一寸茶屋新田まで行くのだから市「マア宜敷うございませ、今日は旦那様に賞めて頂くお肴がございませうので源「然うか其奴ア有難い、ぢや大急ぎで一つ出して呉れ「急ぎの用を控へながら、別に酒

杯を飲まんでも宜いのだが、此奴餘程下素張つた奴と見へて、野村源藏は彼の武士の傍の處へ腰を下し、大劔を右手に置いて銚子の換りも五六本ガブリくさ大急ぎで飲み終つた源「ア、美味かつた、ぢや勘定はまた明日でも屋敷の方へ取りに參れ市「へエ決して御心配に及びません、御一緒で宜敷うございます源「ぢや歸る、左様なら」云ひながら慌て、一刀を打込んで、其儘ドシク出て行つて仕舞つた、後には粗忽な奴めと云はぬばかりに、ツロリと後姿を見送つて居た彼の武士武「亭主、今の奴は何處の武士だ市「モシ大きな聲をなさいますな、只今の旦那は御城内、黒川様の御家來で武「フム、黒川と云ふの阿何んだ市「旦那、貴郎御存じはございませんか、ぢや此處のお方ではございませんな武「俺は此處の土地の者ではないが、マア此處へ過日から來てゐる市「へエ左様でございますか、エ、アノ旦那は今お派利の御家老様黒川左仲様と被仰いまして、お殿様の大的お氣に入り、其の上お部屋様のお父上に相成

つて居られます、處が主の出世は身の出世で、此四五年前までは那の今の野村源藏さまも、仕様のない三びん奴の様に人は思つて居たのでございますが、只今は御出世なさいまして那の通りでございます武「フム然うか、如何にも那奴は成り上り者に違ひない、刀の差し様も持つ業も知らん馬鹿な野郎だ、アハ、ハ、ハ、」と、大口開いて高笑ひ、處へ折悪しくキヨロノ眼で戻つて來たのが野村源藏源「ア、亭主、市「へい、ア、野村の旦那、何かお忘れ物で源「一寸此方……」云ひながら床几の處を見るに彼の浪人、右手に置く可き大劔を左りの方に置いてある源「アイヤ其れなる御人、拙者取り急いで大劔を取違へ甚はだ失禮をいたしました何うか此方のお取替へを願ひたい、スルと彼の武士はツロリ源藏の顔を睨めつけて武「ならぬツ源「ナニ武「相成らんツ源「拙者粗忽にて取違へて參り、只今心注いたる事故、何うか取替へて頂き度うござる武「イヤ、其義は相成らん源「相成らんとは無体、專を仰せられる、何故

お取替へが願へません武「何故ならぬと云つて、其方も四民の上に立つ武士ではないか、其大小刀を横へる者の心掛け、大劔は主人に形取り小刀は自分の身に形取つたものだ、其の主を取り違へて行くこと云ふのは、畢り貴様は主人を取違へて居るのだ、取替へて遣はす事は罷り相成らん源「これは又怪しからぬ、見受ける處其方は浪人者の様子であるが、故意に取違へたのなら又云ふ可き事もあらうが、高が粗相過失で取違へた事ではござらぬか武「黙れツ、其の粗相過失といふのが不可なのだ、それさも茲で三拜九拜大地に両手を仕へて詫び入るなら知らぬ事、理屈がましき事を申した以上は何うしても取替へる事は相成らぬ源「其れでは拙者が甚だ迷惑いたす武「貴様の迷惑は俺の知つた事ではない、しかし其方は俺の大劔を檢めたらうな源「エ、其れは見ました掛遣を……武「構造ばかりぢやない、俺の大劔が宜いのであれば無論取替へて遣るが、俺のは悪いので貴様の方が少し宜い、其れ故取り替へる事が出来ない、

源「へエ……、拙者のも餘り宜いものではございませぬ、ホンの常生差して武「常生差しても貴様のは刀だ、俺のは竹篋だ源「へエ……、アノ竹篋……へエ、武「何故然り可笑な顔ないたす、俺は無祿浪人であるから竹篋でも何んでも介意ぬが、貴様は大切な主人を持つてゐる野村源藏さま云はれる武士だ、其の武士が大切な主人を取違へるさ云ふのは、畢り主人を忘れてゐるも同様だに依り、以後心得のため戸外へ出て尋常に俺と勝負をしる源「ウームツ、宜し如何にも承知いたした、是れ程までに申上げて聞き入れぬさあれば如何にもお對手を申さう武「オ、對手をしろ、しかし俺のは竹篋だぞ、竹篋でも能く斬れるから用心しろ」これを聞いて料理屋の亭主市兵衛は膽を潰した市「モシ御浪人様でございませぬか、旦那様如何でございませう町人風情がお詫をいたして相済みませんが、大分貴郎様も御酩酊の御様子……武「ハ、ハ、ハ、イヤ亭主心配するな、酒は飲んで性根に狂ひはない市「其りや御道理でございませぬが、私

しの店で起りました事でございませうから、お詫が叶ひますれば何うぞ武「イヤ心配するな、斯んな野村さか源藏さか云ふ奴は、世の中の穀潰しだ源「何にッ穀潰し武「然うだ穀潰しだ、武士さ云やア武士、人間の刀架同様な奴だ、源「これは益々怪しからん、人間の刀架さは何うだ武「怒るなく、武士の魂さいたす大小刀を取違へて行く様な奴、唯腰に二本帯して居るさ云ふ名ばかりだ、サア来い源「オ、モウ斯うなれば仕方がない」さ野村源藏、羽織を其れへ脱ぎ捨て、提緒を早速の襷さした、手拭を疊んで鉢巻なし、股立ちを高く取りあげて料理屋の戸外へ飛び出したが、大飯の鞘を拂つて中段に身構へた、スルさ相手の武士はノソリノソリ其れへ出て来て武「サア来い、亭主後の銚子の代りを頼むよ、一寸さ此の野郎を叩き斬つて仕舞ふて丁度爛の塩梅が宜からうと思ふから」云ふうちに戸外は黒山の如き見物人武「サア何處からなりと斬り込んで来い」さ、云ひながら襷も掛けなければ股立ちも取らず、自分の

手にした一刀の鞘を拂つたが、中身は成る程竹の筥、銀紙も張つてあれば未だしもだが、ホンの竹ばかりで二尺七八寸、その竹筥を中段に以つて武「サア早く来て見ろ」

○銀と鉛の取り換へツ子

盲目蛇に怖れずの野村源藏、竹筥なれば少しも恐るゝ處はないさ源「エイッ」云ふなり斬り込んで来た奴を、バツさ体を駈して置いて彼の武士武「そりや何うだ、此處だ、此方へ来い源「己れツ生意氣な奴」さ、又も斬り込む一刀を苦もなく躲して武「夫りや又違つた、此處だ、源「汝れツ」さ横一文字に斬つて掛る、手經に体を躲して置いて武「そりや何うだ、ヤアイ此方」さ前後左右に源藏を彼方に躲し此方に追ひして居たが、何んしろヒラリノソリと身を躲されるので、暫らくの間に野村源藏目が眩んで来た源「ヤイ此の素浪人奴

恐ろしく身の軽い奴だ、ジツとして居ろ武「ハ、ハ、ハ、馬鹿を申せ、誰れがジツとして居るものか、何うだ驚いたか源「イヤ驚かない、エイツヤツ……」ヒイ云ひながら野村源藏、八方十方に追ひ廻るのを彼の武士武「此方へ来い彼方へお出で」さ、体を轉してゐる其の間に、野村源藏が目が眩んでヨロ／＼ツと踰跟めて来た右の肋骨武「ヤアツ」さ、云ふなり彼の竹篋を突き込んだが何んしろ非常に手が冴へて居たものさ見へて、竹篋ながら衣類をプスリと突き破り、餘れる力は肋骨の間へアツ／＼と這入つた源「アツさ云ふなり其れへ打つ倒れた處を、咽喉笛目掛けて今一つ突き通したから堪らない手足をブル／＼ツと顫して其儘其處に息絶へた様子、武士は竹光の血汐を拭きもせず鞘にヒタリと納めて武「ア、到頭死んだナ、亭主、銚子は付いたかい市「へエ、シ併し旦那、大變な事をなさいましたな、人を殺せば又自分も殺されます、何うなさるお心算で武「マア然う心配するな市「それでも野村さんの御主人さ云ふの

ば黒川左仲さいふ御家老様でございます、私しの宅に迷惑が掛ります武「決して心配するな、貴様の宅に迷惑は掛けない、マア此の酒を飲んでしまつたら黒川の宅へ俺を連れて行つて呉れ、俺が野村源藏さ云へる奴を殺したさ云へば其れで宜いのだ、少しも心配する事はない市「へエで、私しを殺すさ云やアしませんか武「サア、殺すさ云つたら序でに殺されて仕舞へ市「サヨ冗戯ぢやございませぬ、殺されて堪りますものか武「マア宜い、兎に角俺を連れて行け」云つてゐる内に彼の武士は酒を飲んでしまつたから亭主の市兵衛、否やださ云へば又ごんな事に成るかも知れないさ、恐ろ／＼同道して黒川左仲の屋敷へ歩いて来た、そこで亭主から執次を以つて斯様／＼と申し込む、黒川左仲は是れを聞いて、何か仔細のある事だらうと思つたから、家來を殺した怒りを包んで早速其の者に對面いたさうさ、様先きの處へ立ち出でる、中野屋市兵衛は執次の口上に依つて庭の切戸を押し市「サア何うぞ此方へお這入りなさい、氣を付け

て口を利かぬさ大變な事になりますぞ武「ア、宜い、サア案内しろ」椽先
きに立ち出でた黒川左仲左「コレ、中野屋市兵衛、其方は玄關先きで相待つ
て居れ……、承れば只今中野屋の戸外に於いて、吾が家來野村源藏を斬り
殺したさいふ、其の下手人は其方が武「如何にも拙者左」其方生國は何處で
姓名は何んぞ申す武「拙者が、拙者生れば關東だ左」フム武「生れば關東で
あるが仔細あつて幼年の頃に國を出で、住所不定の浪人だ、名前の儀は丸崎
剛藏と申す、過日だから此の米澤の城下へ来て、何うか知行に有りつき出世を
仕度いさ種々考へて見るさ、當時御家老黒川左仲殿は、飛ぶ鳥も落す様な勢
ひ、お部屋様の假親になつてゐる天晴れ一器量ある人さ承はり、何うか此の
お方に隨身をして面白い夢を見たいものださ斯う思つた、さころが今日彼の中
野屋方で一杯飲んでゐるさ、貴殿の家來で野村源藏さか云ふ男、先刻中野屋の
亭主がお話しをした通りの事情であるが、實にお困りであらうさお察し申す、

那の様な粗忽な家來を持つては實際貴殿のお爲めが悪い、世の中は主従と云つ
てな、貴殿は主だが野村なんかは従には相成らん、斯う云ふ丸崎剛藏こそ失
禮ながら従と相成つて犬馬の勞を盡し度いさ相考へる、貴殿が美味しい酒を三
杯飲んだら、丸崎剛藏も美味しい酒を二杯飲む、兎に角先づ拙者を一つ遣つて
見ては如何でござる、丸崎剛藏は眞の従さなつて力を盡さう夫れさも大切な
家來を殺したから此の剛藏を仇敵として、貴殿お手討にでも成さるか、貴殿が
此の剛藏を家來の仇敵とする様では、マア、黒川左仲殿も大した事はない
アハ、銀と鉛の取り替へつ子、先づお考へになつて宜敷からう」さ、憚
る處もなく溜々述べて立てた、腕拱いて黒川左仲、丸崎剛藏の顔をツツと
見てゐたが、何か心中悟る處があつたさ見へ左「イヤ能く相判つた、拙者
も然る可き家來を召抱へたいさ豫て心掛け居つた、一人の凡臣を失なつて天晴
れ丸崎剛藏さいふ家來を得るは誠に結構な事ではあるが、しかし貴殿食祿

にお望みでもござるか 剛「黒川左 仲殿、夫れは固より拙者貴殿の家來と相成
つて、萬事忠義を盡さうと云ふのだから 食祿の多過ぎるさいふ不足はない、
しかし先づ、其許の見込みで以つて幾何でも宜敷い、經節でも使つて見な
ければ相判らん、其の後で 食祿を更らに定めて貰ふ事に仕様」さ、故事あり
さうな丸崎 剛藏の言葉に、黒川左仲も素より胸に一物ある人物であるから、
癖ある馬には乗つて見ろ、一癖ありさうな奴故一番使つて見て遣らうさ、遂に
丸崎 剛藏を其儘吾が家來さななし、屋敷内の長屋中で恰好いのを一軒貸し與
へ、此處に 食祿は先づ八十石と定めて置いた、一方用人野村源藏の死骸は
秘かに自分の屋敷へ引取つて菩提寺へ葬むつてしまつた、斯うして黒川左仲は
丸崎 剛藏を召抱へて後家の取締りを命じ、朝に晩に手許へ置いて正逆か悪事
の相談はしないが何かと打ち明けて使つて見ると、随分役に立つ様子 武藝は
出来る學問は出来る、人間は飽くまで厚顔しく、力量は飽くまで強いといふの

であるから、左仲も心中大いに喜んで 左「是りや宜い家來が出来た、此の者
を萬事相談相手にいたして居れば、いよいよ、吾が目的も達する事が出来る」と
秘かに笑を洩してゐる、處が或る夜左仲は剛藏を秘かに手許へ招いて 左「丸崎
其方大儀であるが御城下外れの穢多町に捨扶持を下し置かれて小屋圍いご相成
つてゐる菅沼母子の者をば、此の闇を幸ひ一思ひに殺して來ては呉れまいか、
剛「イヤ宜敷うござる、如何にも今晚乗り込み參つて、高の知れたる小鳥に雌
鳥、一思ひに息の根を止めるのは最易い事でござる、しかし彼等母子の者を殺
害せずとも、二千五百石の大身と相成つて居らるゝ御主人、尙ほお部屋お君の
方が折々殿様からお暇を頂いて當家へお越しになつてお人拂ひの其時に、
何か怪しき御相談……左「コレ、何を申す 剛「お隠し遊ばす事はございませ
ん、人の手前は假りの親、實の處は不義をいたしてお家を望むお心さは、丸崎
剛藏御胸中残らずお察し申して居ります 左「ウーム、イヤ恐れ入つた丸崎、

然らば今更ら水臭く隠し立てはいたすまい、察しに違はず當上杉家十五萬石の家は、此の黒川左仲が自由にいたす時機を相待つて居る、何うぢや其方も一骨折つては呉れまいか剛「ウム、其れこそ最易い事でござる、しかし乍ら御前のまへでござるが、穢多町の小屋圍いに相成つてゐる菅沼親子は、全体何者でござるか左「ウム其れか、その菅沼親子さいふのは以前當上杉家にて食祿一千石を頂戴した菅沼新左衛門と云ふのがあつて、要らぬ事をば御殿に御諫言申し上げ、お怒りに觸れてお手討となつた、其新左衛門の妻お高、並びに一子新八郎の兩人であつて、何うでも此奴を助け置いては吾が失望の妨たげ、蟻の穴より千丈の堤も潰れる譬へもあるノウ丸崎剛「成る程、然らば早速今晚参つて母子の者の息の根を止めて参りませう、それに付けても御殿様は何うしてお片付けなさる御心底で……左「其れに就いては拙者も先日中からいろく胸を痛めて居るのであるが、毒殺いたすか或ひは忍び入つて……剛「其りや不

可ん、毛を吹いて傷を求めらさば其の事でござる、それなれば此の丸崎剛藏が今のうにお止め申す、萬一左様な事にて吾が君を殺さんと忍び入れれば、大勢の宿直をいたす者の目に觸れて其夜直ちに悪事の露顯、槍や刀を振り廻さすとも、人間一人殺す位いの工風は澤山にござる左「ウム、其の工風さは如何いたすのぢや剛「御主人、お心注ぎに相成りませんか、御領分内鷹野村にある信光院、那の寺に居る住職の廣道と云ふ坊主は、加持祈禱は申すに及ばず、如何なる難病と雖も傳來の秘法を以つて癒すさか、また子のなき女は信光院の住職に祈禱をいたして貰へば、忽ち懐妊するさいふ噂さ、依つてお部屋お君の方を御懐妊と云ひなし、御安産の御祈禱を願ひたいと申して當家へ招き、大望を打ち明けて大殿を祈り殺す祈禱を頼むのでござる、如何に坊主と雖も慾を以つて誘ふ時は豈夫厭やとは申しますまい、首尾宜く行つた曉には、信光院こそ斯く云ふ剛藏が乗り込んで、一刀の許に命を絶ち、悪事の露顯を防げば

宜敷うございませう」

○悪人黒川左仲が廻者だナ

横手を打つて黒川左仲「サム成る程、流石は丸崎宜い考へだ、然らばさう云ふ事にいたさう、夫れでは今晚乗り込んで呉れる様剛「承知いたしました」と丸崎剛藏は、黒川左仲に別れて自分の長屋へ歸つて来る、日の暮れるのを待ら兼ねて丸崎剛藏は覆面頭巾の扮装にて只一人、長屋を出て秘かに歩つて来たのは城下外れの穢多町、夜は次第に更けて行く、處が此方菅沼新八郎母子は、父新左衛門が死去の後、僅かに二人扶持を賜はつてそれで露の命を繋いでゐるが、聽て身の浮雲が晴れたならば、眞如の月を見る事もあらうと昔を思ふ忍び泣き、母子打ち寄つては父が孤忠を歎くのみ、此の夜も更けて早や初更の鐘の響き渡る此の時しも、豫て聞いたる小屋圍いの、表口の處へ忍び寄つた

丸崎剛藏、星の光りに四邊を透して見るさ、自分が立つてゐる四五間先きに何うやら一人此方の方を窺がふ曲者のある様子、それには目も呉れないで剛藏は、横手に廻つて兩戸を外から強開けんさする此の物音に、内裡では怪しいと思つたか菅沼新八郎新「何者だ……此の夜更けに及んで……」云ふ内に早くも兩戸を外した丸崎剛藏「バツミ上へ飛び上るや否剛「喧ましいツ、汝等母子に對しては別に意趣遺恨のある譯ではないが、去るお方より頼まれて母子の者の息の根を止めんがため参つたのだ、サア斯うなつては仕方がない、尋常に討たれて仕舞へツ新「サムツ、扱ては彼の悪人黒川左仲が廻し者だナ剛「能くこそ氣が注いた菅沼新八郎、如何にも黒川左仲殿に頼まれて汝等の命を貰ひに来たのだ、覺悟いたせツ」さ、云ふより早く斬り込む一刀、ヒラリ体を林した菅沼新八郎モウ斯うなれば一生懸命片邊に置いたる父が遺品の三條小鍛冶宗近の、一刀ギラリ鞘を拂ひ、チャリーンと受け止めた其の早業剛「何をツ

……」と、再び取り直した丸崎剛藏、一刀を大上段に振り冠つて只一討ち
と睨み付ける、母のお高も九死一生の危ふき場合と思つたから、是れ又側に有
り合ふ脇差を引抜いて丸崎剛藏に斬つて掛る、暫らくの間はチャン／＼チャ
リンと火花を散らして戦つたが、何うしたものが丸崎剛藏は、次第／＼に
後退りをして来た、折柄最前より小屋の外に在つて、様子を窺ふて居た怪し
の一人は、此の有様を見るや否、バラ／＼／＼と内裡へ飛び込むが早いか、
一刀ギラリと鞘を拂つて曲「ヤア丸崎氏御勢申す拙者は田中又五郎でござ
る剛「オ、田中氏が、何卒お頼み申す」と、云ひも終らぬ其のうちに、何んぞ
思つたか丸崎剛藏は、今しも討ち込み来る新八郎の一刀ヒラリと体を躲して
置いて剛「エイツ」裂帛一聲彼の田中又五郎の、腦天から胸の邊りまで眞向
唐竹割りに斬つて落した又「ウワッ……」と云ふなり田中又五郎はドターリ
血煙り立つて其れへ打つ倒れた、是れはと計り驚いたのは菅沼母子、一刀引

提げた儘呆れ果て、眺めてゐる、丸崎剛藏は血汐を拭つて早くも一刀ヒタリ
と鞘に納め剛「菅沼氏新「エツ……剛「サア早く此の場をお立退きなさい、
拙者名前は假りに丸崎剛藏と名乗つてゐるが、少し仔細あつて拙者も貴殿等と
同じく、お家の悪人黒川左仲を討ち、天罰の然らしむる處を知らせてお家を
無事に治める事に勤めるでござらう、就いては御身の父上が無念は、必らず拙
者が晴させます故、時來る迄は近き處に身を秘め、時節をお待ち成さる可す、
新「ウム、扱ては丸崎殿とやらは、黒川左仲の廻し者には是れ無くして……、
剛「如何にも拙者は黒川左仲の悪事を見現はさんが爲め、故意と家來になつて
入り込みし者でござる、只今是れへ斬倒した此奴こそ田中又五郎と申して黒川
左仲が無二の股肱、拙者より先きに出で來つて様子を窺ひ居りたる程なれば、
黒川左仲に尙ほ如何なる企てあるやも計られず、壁に耳ある世の譬へ、滅多に
大事は打ち明されぬ事なれど、拙者は江戸表より當米澤へ罷り越したる者に

して、尾張家の落胤國丸君の家來となつた、石川八左衛門の忤、石川八太郎でござる。これを聞いて驚いたのは菅沼新八郎母子の者。新八郎は豫て噂に聞いたる國丸君の御家來、石川八太郎殿でござつたか、左様なれば尙此の上共に宜敷くお頼み申す、して其石川八太郎殿が、何故あつて當家の悪人黒川左仲方へ……八左ればでござる、當時上杉侯のお部屋になつて居るお君の方さいふは、拙者主人國丸君の義妹であつて、上杉侯の望みに依り彼の黒川左仲方が當米澤へ誘拐し來つたものでござる、されどお君の方が此の頃の舉動を聞いて見ると、少しく拙者の腑に落ちぬ事もござれど、兎に角親元なる阪倉屋の依頼であれば、一先づお君殿を江戸藏前の阪倉屋まで引取らせ度いさ、國丸君と共に種々苦心いたし居る次第でござる新八郎、左様の譯でござつたか、イヤ御辛勞の段深くお察し申し上げます、尙お家の事に就いても此の上共萬事宜敷くお頼み申し、と、石川八太郎の丸崎剛藏を伏し拜んだ

菅沼母子は、暇を告げて其夜のうちに、穢多町の小屋をば跡にして何處さもなく立ち去つてしまつた、サア先づ是れで安心さ丸崎剛藏は、黒川左仲の屋敷へ立ち歸り、夜中ながら左仲に逢つて剛「御主人、只今立歸りました左「オ、丸崎大儀であつた、シテ首尾は何うであつた剛「御主人、誠に面目次第もございません左「何うした剛「しかし御主人は拙者を今までお疑ひ遊ばしてか、拙者の跡より田中をお尾けになりましたな左「イヤ丸崎、其方に然う言はれると誠に心苦しい、萬一御身の腕前で以つて、菅沼母子の手に餘る時には、助太刀をさせ様と心得ていたしたのであるが、夫れで田中は如何いたした剛「何んしろ御主人菅沼母子の者は死物狂ひ、此方は大望を抱へてゐる身の上、流石の拙者も斬り立てられましたる處へ田中又五郎が飛込んで來て助太刀をいたすさ申し斬り込んで参りましたのでございませぬ、田中は新八郎の爲めに斬り立てられ遂に斬り倒されてしまひました、夫れ故拙者はその處に付け入り斬